
～ 永遠の追憶～ refrain

TAKA丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の追憶　　r e f r a i n

【Nコード】

N4091A

【作者名】

TAKA丸

【あらすじ】

　　永遠の追憶　本編では語られなかったお話を、一話完結の形（中には前編・後編と分かれる物もあります）でお届けします。その為、物語は公開順に進む訳ではありませんので、予めご承知おき下さい。

Rie's diary(前書き)

「永遠の追憶」第一部は、

```
http://www.digbook.jp/product|
info.php/product?id/7351?osCs
id"ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

第二部は、

```
http://www.digbook.jp/product|
info.php/product?id/7448?osCs
id"ff3d8bd5d83f041e11a60f121f4
83d8a
```

にて販売致しております。

R i e ' s d i a r y

わたしは、自分を幸せな人間だと思う。

他人と比較するのは好きじゃないけど、それでもやっぱり、どうしたって比べちゃう部分はある。

そうした時…… 勿論そうじゃない時もだけど、凄く幸せなんだって感じる。

優しい両親がいて、大切な友達がいて……。

そして……。

わたしの大好きな人には、お父さんがいない。

彼が小さい頃、交通事故に遭って亡くなったのだそう。

しかも、彼の目の前で。

彼を助ける為に……。

もしも、わたしが同じ場面に遭遇したら、どうだっただろう？

そのまま何年かが過ぎて、今みたいに笑えるだろうか……？

もしかしたら心が壊れて、二度と笑えなくなってしまったかもしれない。

さもないと、変に歪んだ考えを持ってしまったかもしれない。

でも、彼は真っ直ぐだ。

ちょっと無愛想で、時々怖い顔をしたりもするけど、わたしに優しくしてくれる。

きっとそれは、彼のお母さんが優しい人だからだと思う。

愛情をいっぱい、彼に与えたからなんだろうと思う。

そして……いつも彼の傍で、ずっと彼を見つめていた子がいたからなんだろうと思う……。

その子は、今ではわたしの一番の親友だ。

ちよつと怖がりで泣き虫だけど、一本しつかりと芯が通ってる。

いつもは控え目で、他人の後ろに隠れてるような印象があるけど、いざって時にはとっても強い。

特に台所に入ってる時には無敵と言ってもいいと思う。

料理してる時は迫力があつて、凄く怖いし……。

そんな時の彼女には、わたしでも逆らえない。

……と言うより、逆らう氣にさえならない。

でも、基本的には『女の子』って表現がピッタリの子だ。

ちなみに、この子と彼は幼馴染で、生まれた時からずっと一緒なんだ。

ちよつぱり焼けちゃうけど……ま、これは仕方ないよね。

ただ、この子の両親は凄く忙しいらしくて、滅多に家族が揃わないだって。

そのせいなのか、凄いしっかり者なんだ。

わたしも見習わなきゃね。

そうそう、わたしの友達には、もう一人『女の子』っていう

感じの子がいる。

その子は大金持ちのお嬢様で、すつごく清楚。

儚げって言葉がピッタリ来るような、そんな女の子なんだ。

いつもニコニコしてて、和風の美人でスタイルも抜群。

何と言っても乳がデカい！これは彼女の中で唯一許せない部分だ。

横に並ばれると、わたしの胸は完全に隠れて見えなくな……って、

そんな事はどうでもいい。

見た目は一部の隙も無い感じなんだけど、その割りにどこか抜けて……いやいや、天然ボ……じゃなくて、ちよっとお茶目な一面がある。

成績はトップクラスで、特に文系が凄いんだ。

難しい言葉をアツサリと普通に使っちゃうし、古文や漢文なんか、辞書も使わずにスラスラ読んじゃう。

ただ……あんまり人の話を聞いてない事がよくある。

理系も得意だから頭の回転は速い筈なんだけど、ボ……としてると言つか、時々頭の中身がどっか行っちゃ……いやいや、ちよっと夢見がち。

でも、お茶やお花をやってるだけあって、その仕草は上品そのものの。

いつも慎ましかで、何となく『お母さん』な印象もある、そんな子。

……なんだけど、思い込みが激しくて、時々暴走するのがちよっと……。

で、その子には双子の妹がいるんだけど、こっちはお姉さんとはちよっとタイプが違う。

わたしと大声で怒鳴り合うなんてしょっちゅうだし、お稽古事なんてなぐんにもしてない。

でも、わたしと同じく陸上部に入っで、毎日一緒に汗を流してる。

お姉さんと違って、この子は運動神経抜群だ。

足の速さもわたしといい勝負で、練習しててもとっても楽しい。

あ、そうそう、この子達の両親もかなり忙しい人らしい。

何でも世界中を飛び回ってるとかで、家どころか日本にいない事が殆どだとか。

それもあった、小さい頃は随分寂しい思いをしてたみたい。

そんな家庭に育ったからなのか、この子って一見すると気が強そうなんだけど、本当は凄く寂しがり屋なんだって事を、わたしは知ってる。

前に一緒に喫茶店に行った時、この子、昔の話しをして泣いた事があったんだ。

何でも、双子のお姉さんと事ある毎に比較されてて、自分は要らない子なんだって思っちゃったんだって。

元々は同じ人間の筈なのに、お姉さんには出来て自分には出来ない。

努力しても追いつけない……自分は自分だって認めて欲しいのに認めてもらえない。

お姉さんに優しくされる度に、自分が惨めになって行くみたいだったって言ってた。

一人っ子のわたしには、正直言っつてその気持ちの全部は解らないでも、それって、きっと物凄く辛かったんだと思う。

辛かったから……だから誰にも言えなくて、それで余計に悲しくて……。

でもね、これからは大丈夫！

長い付き合いしようねって約束したんだもん、絶対に大丈夫なのさ！

わたしは、その子をその子として認めたんだもん。

わたしの友達として、その子を選んだんだもん。

ただね、負けず嫌いなのはいいんだけど、寝食を忘れてゲームしちゃうのはどうかと思うんだ……。

あ、ゲームと言えば！

元々好きだったとは言え、この子を更にその道に引きずり込んで深みにはめたのは、わたしの彼の友達なんだよね……。

その人は根っからのお調子者で、わたしの彼とは正反対の性格。大飯食らいだし、変な一発芸はするし、スケベだし、口からはギヤグと冗談しか出て来ないし。

……なんて言うただのバカみたいだけど、実は案外いい所が多いんだ。

案外なんて言ったら本人は嫌な顔するだろうけど、それでもわたしは言っちゃうのだ。

だって、わたしとその人は、そういう付き合いが出来る仲間なんだもん。

わたしの彼もそうなんだけど、その人もとにかく腕っ節が強い。子供の頃から喧嘩ばかりしてたらしくて、拳には殴りダコがある。おまけに身体が大きくて馬力がある上、めっちゃめっちゃ打たれ強くて凄くタフ。

わたしが本気で突っ込み入れても、全然ダメージ受けにくいくらい頑丈。

でもね、ただ乱暴なだけじゃないの。

話してみても解ったんだけど、凄く周りに気を遣う人なんだ。

人が笑ってる顔を見るのが好きなんだって本人は言ってた。

特にお年寄りや小さな子に優しく、すぐに場に馴染んじゃう。

何て言うのかな……壁が無いって感じかな？

特定の人だけじゃなくて、誰でも受け入れちゃう……そんな感じの人。

自分で自分の事を『正義の味方』って言い切っちゃうような子供っぽい所があるけど、何となく納得出来ちゃうかな？

でも、そんな陽気なこの人も、時々ふっと悲しげな表情をする事がある。

この人にはお母さんがいないんだけど、亡くなった訳じゃなくて、どうやら離婚したらしい。

だからなのかな……女の子と話す時って凄く楽しそうなんだけど、何となく別の物を見てるような、そんな感じがする事があったんだ。

ま、素敵な彼女もいる事だし、これからはそんな事も無いだろうけどね。

わたしの彼にはもう一人、中学時代からの友達がいるんだけど、こっちは超が付くくらい真面目で固い。

生真面目なんだけど、ガツガツに糞真面目って訳じゃなくて、逆にそれが笑えるって事が多い。

この人はちよつと変わってて、女の人の前に出ると物凄くどもって、まともに話せなくなる。

女の人に対する免疫が全然無いらしくて、ちよつとからかったりすると顔が真っ赤になっちゃうんだ。

あんまり悪戯するのも可哀想だけど、リアクションが面白くて、ついつい構いたくなっちゃうんだよね。

でも、お祖父さんから剣術と抜刀術を習ってて、その腕前は超一流。

ひらひら舞ってる木の葉を、木刀で真つ二つに出来るんだって。

しかも、その木刀は鉛入り！

一度持たせてもらったんだけど、振るところか、ちよつと持ち上げるのが精一杯だった。

身長はわたしと同じくらいなんだけど、やっぱり男の子なんだなゝって思った。

そんな彼には両親がいない。

船舶事故で亡くなったんだそうだけど、この人の境遇について詳しい話をした事は無い。

この人の師匠でもあるお祖父さんも亡くなって、今はアルバイトをしながら一人で生活してるんだって。

親戚の人を頼るのが普通じゃないかな？ って思ってた訊いてみたんだけど、何となく笑って誤魔化されちゃった。

きつと話したくない事なんだろうな……。

わたしの彼からも、それについては訊くなんて言われてる。

彼は何か知ってる感じなんだけど、話せる事なら話してくれる人だから、訊くなって言うからには理由があるんだろうな、きつと。

だから、わたしは何も訊かない事に決めた。

知らなくていい事まで知る必要は無いもんね、うん。

友達付き合い出来る程度の事だけ知ってれば充分だよな。

そんなこんなで、わたしは今日も元気に、そして精一杯生きてます。

たくさん遊んで、ちょっぴり勉強して、目一杯、恋をしています。

出不精な彼をデートに連れ出すのは大変だけど、この頃コツが掴めて来たって感じかな？

十回の内、七回は連れ出せるようになったもんね。

最近では手を繋いでも振り解かなくなったし、何となく一緒にいるのが当たり前っぽくなったし。

これから、もっともっと素敵な当たり前を作って行きたいな……。

もっともっと……ずっと一緒に……。

恋の予感（前書き）

第一部第一章の直前のお話です。

恋の予感

二月。

卒業を間近に控えたこの時期、誰もが新しい生活に不安と期待を抱いている頃……。

だがここに、そんな事を全く感じていない男がいた。

「うーん……今日はハズレかなあ」

真一郎は今日何度目かの空振りを食らうと、また新たなターゲットを求めて街をうろつき始めた。

やがて広い交差点に差し掛かると、赤信号を待ちながら腕組みをして考え始めた。

「誰でもいいって訳じゃないんだよ。そう！　こう……何て言うか、俺のソウルを熱くさせてくれるような、そんな出会いが欲しいんだよね……」

一人ブツブツ呟く真一郎を、周囲の人間は怪訝な顔をして遠巻きに見ている。

その一団の中に、真一郎とは別の意味で他人の目を引く少女がいた。

スラリとした長身に見劣りしない程の、輝くような長い黒髪。

その身を包んでいる服も、その辺で売っているような物とは全然違うと見た目で判るくらいだ。

（……何ですか？　あの男は）

少しキツイ目をした少女は、少し離れた場所から真一郎を観察するようにして見ていた。

何人もの女性に声をかけ、その都度項垂れているその姿は、何やら変な動物を少女に連想させた。

（ナンパしているにしては、少々押しが弱いようですよ……）

不思議な男だと思った。

しつこく食い下がるでもなく、ただ一言二言、言葉を投げかけ、

相手が断りの様子を見せると笑って手を振り、離れてしまう。

（アンケート調査……という訳でも無さそうですね）

暫くそうして見てみると、突然振り返った真一郎とシッカリ目が合ってしまった。

真一郎は途端に笑顔になると、少女に向かって足取りも軽く近付いた。

「こんにちは！ お一人ですか？」

「私が二人以上に見えるなら眼科へお行きなさい。……貴方の場合は脳外科ですかしら？」

「両眼一・五です！ 素敵な女性が一名クッキリと見えます！ 思考力も判断力も正常であります！ 身体にも精神にも問題ありませんです！」

「そう、それは良かったですわね。……では、失礼」

信号が変わり、それを待っていた人の波が動き始めると、少女もそれと共に歩き出す。

真一郎がその後に続いて歩き出して暫くすると、

「私を尾行するおつもりかしら？」

少女は真っ直ぐ前を見たまま、真一郎を振り返りもせずに問いかけた。

そこには怯えや警戒心といった類の感情は無かったが、一切を寄せ付けない凜とした強さがあつた。

だが、当の真一郎はそれを感じないのか、はたまた全然気にしていないのか、

「そんな事しませんよ。俺も信号が変わるのを待ってたんですから」

と、いつもの調子で、ごく普通に返した。

「……そう」

言われてみれば確かにそうだ。

少女はそれ以上何も言わず、黙って歩き続けた。

ところが、道路を横断して暫く歩き、右に曲がっても左に折れて

も、真一郎は依然そのまま後を付いて来る。

付いてくるなと言ったところで、きつとさつきと同じように、自分もこつちへ行くつもりなのだと答えるだろう。

そう考えた少女は、

「貴方……どこまで付いて来るおつもり？」

先程と同じように振り返る事無く、前を見据えたまま歩きながら言った。

「付いて来いと言われるなら、どこまでもお供しますよ」

「言いません」

「残念、言つて欲しかったのに……」

「丁度、道が分かれていますわね。貴方はどちらに進みます？」

恐らく真一郎が言う道と、別の方へ進むつもりなのだろう。

少女は真一郎の答えを待った。

「おお……早くも人生の分かれ道に差し掛かってしまった！生まれて初めての試練だ……」

「随分と楽な生き方をしてらしたのね……。さあ、どちらにします？」

「右にします」

「では、私は左ですので。さようなら」

少女はスタスタと左の道を歩いて行ってしまった。

「あらら……。人生で最初の挫折だ……」

背後で聞こえた真一郎の声に、少女は小さく笑った。

少女はそのまま歩を進めたが、それきり真一郎は付いては来なかった。

どうやら本当に右の道を進んで行ったようだ。

「面白い方ね……」

少女は立ち止まって振り返り、もう一度クスリと笑った。

「な、泣きが入りそうだ……」

あれから、もう何度女の子に声をかけたろう……。

しかし、誰一人として、真一郎の言葉に耳を貸す女の子はいなかった。

「何故だっ!? いつもは、もうとくにお茶くらい飲んでるのにっ! 今日に限って誰も乗って来てくれないってのは、どういう訳なんだ!？」

真一郎は疲れ果て、自動販売機で缶コーヒーを買うと、すぐ傍にあった公園に入り、ベンチに腰掛けて一口飲んだ。

今日は少し冷え込んでいるせいか、広い公園の中には子供が数人遊んでいるだけで、他には人の姿も無かった。

「ハア……虚しい」

胸ポケットから煙草を取り出し、火を点けて一息吸い込むと、吐き出した煙が青い空に吸い込まれるように消えて行く……。

「空はこんなに青いの……俺様の心はグレーだぜ……」

空を見上げながら落ち込む真一郎の足に、ポンとサッカーボールがぶつかった。

「とんだ回り道になってしまいましたわ。時間に余裕があったから良かったようなものの……」

本当は、さっきの道を右に行く筈だった。

しかし、ずっとついて来られても困るし、第一気味が悪い。

いくら相手が悪人では無さそうでも、昨今、物騒な事件には事欠かないのだから。

ましてや自分は……。

「気まぐれを起こして車を使わなかったのは失敗でしたわね。時には歩く事も大事だと言われて、その気になったのが運の尽きでしたわ……」

変に遠慮せず自分に意見してくれる友人の言葉に従ってはみたものの、やはり慣れない事はするものではないなと少女は思っていた。

「すつげー！ お兄ちゃん、サッカーの選手みたいだ！」

「そうか？　じゃあ、こんなリフティングはどうだ！　アウツアウツ！」

「あははは！　それじゃアシカだよ！」

少女が次の場所へ向かう為、駅に向かって歩いてみると、どこからか子供達の楽しそうにはしゃぐ声が聞こえて来た。

「私は、あんな風に騒いだ事ありませんわね。　子供らしい事をした記憶も……」

何気なく声のする方に目をやると、公園で子供達の中心になって遊んでいる真一郎が目に入った。

「あの方、先程の……」

小さな子供達の中に入ると、身体の高い真一郎は更に目立つ。

けれど、そこには自然な空気だけがあって、何故か暖かい物を感じさせた。

少女の足は、自然に公園へと向かっていた。

「いいか？　男の子つてのはな、いつでも正義の味方じゃなくちゃダメなんだぞ？」

「なんでえ？」

「その方がカッコいいからだあ！」

真一郎は器用にサッカーボールをリフティングしながら、子供達に自分の理念を教え込んでいる。

「じゃあ、おさらいだ！　困ってる人がいたら？」

「助けるー！」

「泣いてる人がいたら？」

「笑わせるー！」

「男の子は？」

「強い、正義の味方になるー！」

「女の子は？」

「あつたかくて、優しい人になるー！」

子供達は真一郎の問い掛けに、一斉に声を揃えている。

きつと成長するにつれて忘れてしまふのだろうが、今この瞬間だけは、その言葉に忠実に生きる事だろう。

「じゃあ最後！ ご挨拶は？」

「いつでも元気いっぱいにつー！」

「おっけーい！ ……おっと」

真一郎がボールを後ろに逸らせてしまった。

テンテンとボールが転がった先に、あの少女が立っている。

「あ、すみません！ ボール、こっちに蹴り返してくれますか？」

「……え？」

少女は自分の足元まで転がって来たボールに視線を落とし、少し困ったような表情を浮かべた。

「で、でも、私そんな事……」

やった事が無いので出来ないと言おうとしたが、

「お姉ちゃん！ 早く〜！」

「ボール、ボール！」

子供達は、しきりにボールを蹴ってよこせとせがむ。

少女は、どうしたものかと考え込んでいたが、やがて意を決したように……。

「そ、それじゃあ、行きますわよ……エイツ！」

だが、その右足は虚しく空を蹴り、ボールはその場に残ったままだ。

途端に少女は顔を真っ赤にして、ボールを睨んだ。

「……たかがボールの分際で、この私に恥をかかせるなんて！」

「あのお……」

少女がもう一度ボールを蹴ろうと身構えると、真一郎が申し訳無さそうに声をかけた。

「何ですか？ 私、これから……」

少女が顔を上げて真一郎を見ると、その顔の真ん中に見慣れた靴が張り付いていて……やがてポトリと地面に落ちた。

「あ……」

「ナイスシュートです……」

子供達の笑い声が辺りに響き、少女の顔が更に赤くなった……。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ばいばーい！」

「また、遊ぼうねーっ！」

「おう！ 気を付けて帰れよーっ！ 道路に飛び出すんじゃないぞーっ！」

真一郎と少女は笑顔で手を振り返し、子供達を見送った。

子供達が帰ってしまうと、公園は嘘のように静かになった。

「……どうして避けなかったんです？」

「え？ ああ、さっきの靴の事ですか？」

真一郎はベンチに腰掛けると、パツパツと埃を払い、少女に隣に座るよう勧めた。

少女は小さく頷くと、黙ってそこへ腰を降ろした。

「絶対にウケると思いましたからね。こんな展開は、そうそうありませんし」

「……それだけですの？」

「他に何かありますか？」

「そのせいで怪我をしたとか、恥をかかせたとか言って……」

その後、少女は言葉を濁したが、まあ早い話し、因縁を付けるといふ事だろう。

言ってしまったから、さすがにそれは言い過ぎたかと、少女が少し申し訳なさそうな顔をする、

「あはははは！ そんな下らない事しませんよ、せっかく笑いが取れるチャンスなのに」

気を悪くした様子も無く、真一郎は大きな声で笑った。

これが普段のままの真一郎なのだが、それを知らない少女は、やはり不思議な生き物でも見るような目をしている。

「笑いを……取る？」

「人を笑わせられるって事ですよ」

真一郎はニコニコしながらそう言った。

無邪気な、とても素直な笑顔だった。

「そう言えば、あれからナンパは成功しまして？」

「いいえ、全然……サッパリです」

急に真一郎の顔が情けない物に変わると、そのあまりの変わり様に、少女はクスクスと笑い出した。

何ともおかしい男だ。

いい加減なのか真面目なのか、軟派なのか硬派なのか……。

或いは、そのどれにも当て嵌まらないような気もする。

だが、少なくとも嘔吐きではないようだし、子供達と遊んでいた様子をみても、悪人ではないようだ。

「失礼……本当にガツカリなさってるのね」

「いえ、構いませんよ。人の笑顔を見るのは好きですから」

「他人に笑われるのが好きですか？」

「うーん……その辺は微妙ですけど。でも、険悪な雰囲気になるよりは、そっちのほうのマシってところですかね？」

正直……と言えるのだろうか？

初対面の人間から言われた事に対して真剣に受け答えしている真一郎を見て、少女は不思議な気持ちを感じた。

「……私でよろしければ、お誘いをお受けしても良くてよ？」

「え？」

真一郎は一瞬、キョトンとした顔で少女を見つめた。

「あら、私ではご不満かしら？」

「そそそそそんな！ 滅相も無いっ！」

両手と首をブンブン振りながら慌ててベンチから立ち上がると、

真一郎は再び笑顔になった。

そして、ビシ！ っと気を付けの姿勢で真面目な顔になると、

「えっと……これから、お時間ありますか？ もしよろしければ、

僕と一緒に午後の一時を過ごして頂けませんか？」

と言いながら右腕を自分の前に回し、腰を四十五度に折り曲げた。
「そうですね……三十分程でよろしければ」

「では、美味しいコーヒーのお店にご案内致します」

「良くてよ」

少女は静かにベンチから立ち上がった。

その顔には午前中とは違って、優しい微笑が浮かんでいる。

「あ！ 自己紹介がまだでしたね。俺、掃部関真一郎と言います
！」

「一之瀬美奈です」

翌週の日曜日。

二人は、初めてのデートをする事になる……。

恵再び

それは中学時代の、ある日の放課後の事……。

「待って下さいよーっ！ 教えてくれたっていいじゃないですかあつ！」

「しつこいぞっ！ もういい加減に諦めろっ！」

「はいはい！ 皆さん、ちょっつと道を空けて下さいねー！」

教室から廊下、廊下から階段、階段からまた廊下と涼が爆走する。その後を真一郎が、掃除中の生徒に注意を促しつつ走って逃げる。更にその後方から長い髪を振り乱し、スカートの裾が跳ねるのも気にせず、小さな女の子が追いかけていた。

「あれ？ なあ、あれって宇佐奈と掃部関だよな？」

「そうみたいだけど……もしかして、あの子から逃げてるのかな？」

「掃部関が女の子から逃げるって……でかい地震でも来るのか？」
「いつも女の子を追いつけ回しているような印象がある真一郎が、女の子から逃げるなんて……。」

その光景は他の生徒の目にはにわかには信じ難い物に映ったが、どうやら真一郎は本当に逃げているようだ。

「……どこかで俺様の評判が落ちたような気がする」

「空耳だ、空耳！ つまんねえ事言っただけで、とにかく走れ！」
やがて三人は、昇降口から校庭へと出た。

先頭を走る涼は、無駄と知りつつ、
「頼むから、もう諦めてくれよ！」
と、一応お願いしてみた。
が……。

「この恵ちゃんをナメてもらっちゃ困ります！ どんな困難があつても、諦めないのが信条なんですから！」
やっぱり無駄だった。

「そんな信条は捨てちゃいなさい！」

「みんな立派だつて褒めてくれますう！」

「内容によりけりだつーの！　そもそも、人の嫌がる事をしちやいけませんって習つただろ！」

「嫌よ嫌よも好きの内っていうのも習いました」

「知識を更新なさい！」

校庭に出ると、何も障害物が無くなったのを幸いに、涼と真一郎は最大加速をかけ、一気に恵を引き離しにかかった。

さすがに二人の足に追い付ける筈も無く、恵は息切れと共に立ち止まり、校庭の真ん中で膝に手を付き、肩で息をしている。

「アディオス、恵ちゃん！　いい女は引き際も肝心だぞ？」

「ハア、ハア……ほ、本気で逃げるなんて、ズルいですよあ……」
しかし恵の抗議は、小さくなつた真一郎の後姿には届かなかつた。

「……絶対に突き止めてやるう……！」

恵は拳を握り締め、固く己の心に誓うのだった……。

そんな恵の様子を、校舎の窓から冷めた目で見つめる女生徒の一人があつた。

「……あの子、まだやってるんだ？」

「いい加減しつこいね……宇佐奈には雛子がいるつてのにさ」

「迫水つたつけ？　ちよつと言つてやろうか？」

「そうね。調子に乗つてゐたいだしね」

三人が振り返ると、掃除当番の雛子が一生懸命に、他の当番の生徒と机を移動させている所だった。

ドン！　と突き飛ばされ、恵の背中では校舎の壁に打ち付けられた。
「痛！　……何するんですか！　話しがあるつて言うから来たのに！」

ザラザラしたコンクリートの感触が制服を通して恵の身体に伝わる。

まだ掃除中の為、ゴミの集積所になっている校舎裏のこの場所には、恵達以外には誰もいない……。

「これがアタシらの話し方なんだよ！」

「アンタさあ、ム力つくんだよね」

「何がですか？ アタシ、別に先輩達に何かした覚えありませんけど」

そう言った途端、恵の右頬に衝撃と痛みが走り、ジワジワと熱を帯びて行く。

「あんた、宇佐奈にちよつかい出してるだろ？ いい加減目障りなんだよね、ああいうのって」

「そんなの……先輩達に関係無いでしょ……？」

「ところがあるのよね。アタシらの友達の彼だからさあ……」

「大人しい子だから何も言わないだけで、ホントは頭に来てるに決まってるんだよ！」

「もう宇佐奈君に付き纏うのやめなっ！」

涼の彼女……噂では、佐伯雛子という女生徒がそうらしいと聞いた。

恵も何度か顔を見た事がある。

容姿端麗、品行方正、成績優秀で、涼の幼馴染だと。

ただ、『彼女だ』という話については、どうしても『らしい』以上の情報を入手出来なかったのが、少々気になっていた。

まだ雛子本人と話した事は無いし、涼達に訊こうにも、恵の顔を見た途端すぐに逃げられてしまうからだ。

「やっぱり、人の噂なんてアテにならないな……」

「はあ？ あんた何言ってるの？」

「自分じゃ何もしないで、人を使ってこんな事させるなんて……」

佐伯って人、随分と根性が捻じ曲がった人だって事ですよっ！！

「何だつてえっ！？」

「フざけんじゃないよっ！」

恵の言葉に上級生三人は激昂し、代わる代わる暴行を加えた。

喧嘩などした事の無い恵は、ただ打たれるままだ。

「何も知らないくせに、下らない事言うんじゃないよ！」

「これはアタシらが勝手にやってる事さ！ あの子は関係無いっ！」

「あの子は、アンタなんかと違っていい子なんだっ！」

恵は何も言わずに、ただ打たれていた。

倒れ、身を丸め、ただ黙って打たれていた。

（自分達だってアタシの事、何も知らないクセに……！）

そう思いながら……。

「あれ？ 帰ったんじゃないの？」

三人の女生徒が教室へ戻ると、ゴミ箱を抱えて教室を出ようとする雛子と力チ合った。

「やくねえ雛子ったら、まだカバンが置いてあるでしょ？」

「え？ あ、そうか」

「いつもながらの天然なんだから」

普段はしっかり者のくせに、こういった所でボケる。

そんな雛子を見て三人は笑った。

「何よ、一人でゴミ捨て？」

「うん。これで終わりだから、一人で充分だもん」

他の当番は既に帰ってしまったようで、雛子の他には誰の姿も見えない。

きつと言葉の通り、一人でいいからと言って帰らせたのだろう。

「よいしょ」と、ゴミ箱を抱え直すと、雛子はヨタヨタした足取りで廊下を歩き出した。

中身は大した量ではないのだが、身体の小さな雛子にはゴミ箱が扱い辛いようだ。

そんな雛子の背中を見送りながら、

「あの子、強いよね……。アタシらと、こんなに普通に話すんだ

もん」

三人の内の一人が言った。

「アタシら……昔、あんない子をイジメてたんだね」

「どうかしてたんだよ、あの頃のアタシ達」

女生徒達は小学生の頃、喋れなくなつた雛子を三人でイジメ抜いた事を思い出し、恥じ入つた。

元々大人しかつた雛子はイジメの標的にされ易かつたのだが、男子からのイジメに関しては涼が鉄壁のガードを敷いていた為、問題無かつた。

だが、さすがに女子に対して手を上げる訳にもいかない（そんな真似をしたら環に殺される）し、巧妙に仕組まれてしまえば、雛子が言わない限りは涼に知られる事も無かつたのだ。

「雛子……宇佐奈にも言わないで、一人で頑張つてたんだよね……」

「マジ強いよ、あの子。アタシらなんか、ハナから敵う相手じゃなかつたんだ」

「でもさ……雛子知つたら怒るかな、やっぱ」

「だろうね……。あの子、この手の事って大嫌いだからさ」

「いいんだよ！アタシらには……こんな事しか出来ないんだから罪滅ぼし……にもならないだろうけど。」

「あゝあ、こんなに汚れちゃつた……」

恵はヨロヨロと立ち上がると、パタパタと制服の汚れを払い、近くにあった水道の蛇口を捻り、顔を洗つた。

「痛！……そっか、最初に叩かれた時、切れちゃつたんだな」

そつと水をかけるようにして唇の端の血を洗い落とし、ハンカチで拭つた。

真つ白だつたハンカチに、赤い染みが広がって行く……。

「涼先輩……アタシ、悪い事してますか？ここまでされる程、い

けない事してますか……？」

確かに目立つ行為ではあるだろう。

時間があれば涼の所へ出向き、アレやコレやと質問責めにしていいのだから、それを面白くないと思う向きもあるう。

「でも……でも、アタシは自分に正直なだけだもん。涼先輩には迷惑なだけかも知れないけど、いっぱい……いっぱい知りたいんだもん……」

恵の大きな瞳から、ポロポロと涙が溢れ出す。

一度流れ始めた涙はやがて嗚咽を伴い、恵はその場にしゃがみ込んでしまった。

「どうしたの？」

突然声をかけられ、恵がビクッ！ として顔を上げると、そこには心配そうに恵を覗き込む雛子の顔があった。

（この人……佐伯って人だ！）

「な、何でもありません……」

恵は慌てて涙を拭くと、すっくと立ち上がった。

弱みなんて見せたくない……この人は、アタシの敵なんだ！

「何でもない事無いでしょ？ 制服に靴の跡が付いてるよ？」

「……自分で付けたんです」

雛子は抱えていたゴミ箱を下に置くと、立ち去ろうとする恵の腕を捕まえ、背中に付いた靴の跡を柔らかくパタパタとはたいた。

本当に柔らかく、心の埃まで落してくれるようなはたき方……それは、まるで母親のような優しさを感じさせた。

「い、いいですよ、そんな事しなくて……」

「良くない！ それに怪我もしてるみたいだし……一緒に保健室に行こう？」

一体どういう人なんだろう……と恵は思った。

自分を痛め付けるように命令したのはこの人の筈なのに、芝居でなく、本気で自分を心配しているようだ。

もしかしたら違うのか……？

自分が考えているような人ではないのか……？

「……佐伯先輩」

「あれ？ わたしの事、知ってるの？」

「知ってます。涼先輩の幼馴染で……恋人だって……」

それを聞いた雛子は一瞬だけ目を大きく開くと、直後に苦笑した。下級生まで、自分と涼をそういう関係だと思っているのかと。

いちいち否定して歩く気は無いが、虚しい誤解は解いておかなくては……。

「幼馴染は合ってるけど、恋人じゃないよ」

「え？ だって、みんな言っていましたよ？」

「りよ……宇佐奈君の恋人はね、他所の学校にいるの。でも、その人の事を知ってるのは、わたしと掃部関君だけだから、そうやって誤解されちゃうのも無理無いかな」

「じゃあ……じゃあ、何でこんな事するんです！？ アタシ、佐伯先輩に何かしましたかっ！？」

恵は、キッと雛子を睨み付けて叫んだ。

「こんな事……って？」

「とぼけな……！」

言いかけて、ふと恵は考えた。

もしかしたら本当に、この人は何も知らないのかも知れない。

さっきの女生徒達も、自分達が勝手にやっている事だと言っていた。た。

なら……。

「……ごめんなさい、確認が先でした。知らない事で他人を責めるのは、アタシの流儀に反しますから」

「はあ……。で、確認って？」

「アタシ、ある人達にここへ呼び出されて殴られたんです。涼先

輩に付き纏うなって」

「……それを、わたしが指示したって思ったの？」

肯く恵を見て、雛子の顔付きが変わった。

今まではどこか優しさを含んだ表情だったのに、厳しく、そして、
どことなく哀しげに……。

「違うんですか!？」

「……もしも、わたしがそんな事をしたら、宇佐奈君はわたしを絶対に許さない。きっと一生、目も合わせてくれなくなるでしょうね」

「それが……」

「わたしは、そういう人と十四年間も幼馴染を続けてるの。と言っても、助けてもらってばかりだけどね……」

「……」

「わたしは彼とずっと幼馴染でいたい。隣でいつも笑っていたいの……笑っていて欲しいの。そんな関係を壊すような事は絶対にしないよ」

静かに言う雛子の顔を見て、恵にはすぐに判った。

雛子は涼に好意を持っている。

(でも、それならどうして幼馴染でいたいなんて言うんだろう……)

「……信じてもらえるかな?」

「……」

「ダメ? うーん、困っちゃったな。他に証明する方法なんて……」

……

「いえ、佐伯先輩の事は信じます……」

涼が卑怯な真似を許さない事は、恵も知っている。

涼に関する情報は、どんな些細な事でも収集しているのだから。

それに、この人は嘘を吐くような人じゃない……恵は自分の直感を信じた。

「アタシ、佐伯先輩を誤解してたみたいです。ごめんなさい……」

「あ、謝らなくていいよ! こんな状況じゃ、しょうがないもん」

素直……この子は真っ直ぐなんだと、雛子は恵に対して好感を持った。

強張っていた雛子の顔は、またいつもの柔らかさを取り戻し、穏

やかに恵を見ている。

それを見た恵は、

(優しい顔……こんな顔する人っているんだ……)

と、先程とは逆に、雛子に対する好感度がMAXにまで高まった。

「アタシ、佐伯先輩のファンになっちゃいました!」

「そ、それはどうも……ねえ、それより保健室に」

「そうだ! 佐伯先輩なら、涼先輩の志望校知ってますよね?」

「え? ええ、知ってるけど……」

「教えて下さい!」

そう訊かれて、雛子は思い出した。

『いいか? 迫水って下級生が何か訊きに来て、絶対に何も教えるなよ? 大変な事になるからな』

と、涼が言っていた事を……。

「……もしかして、迫水さん?」

「恵でいいですよ、アタシもヒナ先輩って呼びますから。そんな事より、どこなんです? 涼先輩の志望校」

「そ、それは言えないの。ごめんね」

「ええ〜っ!? そんな意地悪しないで教えて下さいよ! 涼先輩も、カモ先輩も教えてくれないんですからあ〜! ヒナ先輩だけが頼りなんですう〜……」

「あ、忘れてた! わたし、ゴミ捨てに来たんだ! 早く捨てて、教室に戻らなきゃ!」

「あ、待って下さいよ! ヒナ先輩ってばあ!」

恵の立ち直りの早さと、その溢れるバイタリティに、雛子はただ感心しつつ、ひたすら逃げるのみであった……。

翌日から、恵から逃げる人数は二人から三人になった。

もう一つの追憶

それは木々の若葉が青さを増す頃の事……。

「名場あーっ！ 死ねえええーっ！！」

「うらあああーっ！」

とある学校から程近い川原で、複数の学生が乱闘している。

いや、よく見ると、大勢でたった一人に殴りかかっているのだが……。

「イヤだ」

殴りかかる男達の手にはバットや角材が握られているのだが、輪の中心で殴られそうになっている男は涼しい顔でそれをヒョイヒョイとかわし、体勢を崩した相手を蹴り倒す。

その蹴り方も本気で蹴っているのではなく、相手の尻を押し出すような感じなのだから、やられた方は屈辱だ。

そんな真似をしていれば相手は益々頭に来るのだが、狙われている当の本人、名場と呼ばれた学生は、

「お前らな……いい加減にしろよ、ホント。 温厚な俺も、しまいにやキレルぞ？」

全く危機感が無いのか、言いながら小指で耳を掻いている。

「うるせえっ！ 何が温厚だっ！」

「今までてめえに何人やられたと思ってんだ、この野郎っ！」

「んなもん、お前らが仕掛けて来るのがワリインだろうが……」
「たたく、面倒臭え連中だな。 俺の通り名、知ってるだろ？ さっさとビビって逃げろ」

本当に面倒臭そうにそう答え、ふわぁ〜あとアクビをする。

その態度に、相手の学生達は更に頭に血が上って来る。

「フざけんなっ！」

「何が通り名だ、このクソが！ 『無敵の鬼神 名場保』 なんて、てめえのツレが勝手に流してるだけだろうが！」

「……誰がクソだ、こら」

自分で温厚だなど言っておきながら、そんな些細な一言で保の目付きが変わった。

そして数分後……。

ポンポンと制服に付いた埃を払うと、

「もう来んなよ？ わざわざ痛え思いする事もねえだろ」

保はそう言い残して、ゆっくり土手を上がって行った。

背後の川原には、累々と横たわる気絶した男達の姿が……。

「ナバホ……あんた、またやったの？」

土手を上がり切った所で、女の子が呆れ顔で保に言った。

スラリと伸びた背は、保と大して変わらないように見える。

「……お前は一体いつになったら俺の名前を覚えるんだ？」

「覚えてるからちゃんと呼んでるんじゃない、ナバホって」

「どこが『ちゃんと』だっ！ 俺の名前は名場保だ！『ナバ

ホ』じゃねえっ！」

「そのままじゃない。それにそっちの方が、なんか強そうで良くない？」

「……」

ナバホ……いや、保は嫌な顔をしながら、女の子を避けるようにして歩き出した。

「ちよっと待ちなさいよお！ せっかく人が心配して来てあげたのに、無視すんなっ！」

女の子は、そう抗議しながら保の後を追った。

保の歩調は女の子には速過ぎるようで、ポニーテールの髪が歩みに合わせてユラユラ揺れる。

「いい加減、俺に付き纏うのはやめろ！ このストーカー！」

「何よおっ！ そっちこそ、わたしの名前を覚えなさいよね！」

「だからストーカーと言っとなるだろうが」

「名前じゃないでしょそれはっ！ わたしには宇佐奈環って立派な名前があるんだから！」

「俺の名前をちゃんとと言えるようになってから言え！」

保と環は言い合いを続けながら、いつの間にかピッタリと歩調を合わせて歩いていった。

何だかんだと言いながら、結構息は合っているようである。

暫く言い合いを続けながら歩いた二人は、そのままの状態で学校内へと入っていた。

どうやら保は登校前に喧嘩をしていたようだ。

「けど、段々時間が短くなって行くわね。最短記録更新したわよ？」

「とつとと済まさねえと遅刻しちまうからな。　　つたくよお、朝っぱらからカラまれるなんて思わなかったぜ……早起きしても何の得もねえや」

「あら、真面目」

「遅刻すると、お前がギヤーギヤー煩いんだろぅが……」

「ギヤーギヤーなんて言ってないでしょ！」

靴を履き替えながらも、まだ二人は言い合っていた。

そしてそれは、お互いの教室の前まで続いた。

教室前で別れ、それぞれの教室内へと入ると、

「はあ……やっとな開放されたあ……」

保はグツタリとして机に突っ伏した。

そんな保の前に、一人の男子生徒が立った。

「どうした保、朝から疲れ果てて。フルマラソンでもしたのか？」

「するか、そんなもん。あいつだ、あいつ……」

話し掛けてきた男子生徒に、保は机に突っ伏したまま面倒臭そうに答えた。

精神的に疲れている時には、親しい友人との会話も面倒になるものなのだ。

「ああ、環か。お前も大変なのに見込まれたもんだな」

「恭一の幼馴染だろ？　何とかしろよ」

「お前だってそうだろ……」

恭一と呼ばれた男は、美浜恭一と言う。

長身に甘いルックスで、校内の女生徒の殆どと付き合いがある。

環、それに保とは幼稚園の頃からの友人なのだが、本人に言わせると単なるクサレ縁だそうだ。

「変なのと幼馴染にしゃがって……俺は神様なんか嫌いだよっ！」

「信じてもないクセに嫌うな。……ところで聞いたか？」

「何を？」

急に真剣な顔で話し始めた恭一に、保は訊き返した。

かなり確かな情報網を持っているらしく、恭一は毎日色々なネタを仕入れてくる。

と言っても、大抵口くさ話してはないのだが……。

「この間揉めた三條高校の連中、お前を狙ってるらしいぞ？ 昨夜、俺のダチから電話があった」

「三條って……ああ、三校か。カンベンしてくれよ鬱陶しい……」

ほら、やつぱり……と、保はウンザリした顔になった。

「だいいち、ありゃああいつらが悪いんだぜ？ 電車の中で飲み食いするわ、通路で座るわ座席で騒ぐわ……目障りな上に迷惑な真似してやがるからよ。おまけに爺さんが乗って来たつてのに席も譲りやがらねえ。あんなのを放置してたら俺達まで色眼鏡で見られちまうだろうが」

自分のした事で言われるなら仕方ないが、他人のした事で悪く言われるのは我慢ならないと保は言った。

「それにしたつて派手にやり過ぎたんだよ。連中、数を集めようとしてるらしいぞ、どうする？」

「ふーん、じゃあ助ける。どうせ恭一は女と遊ぶ以外に用事なんてねえんだから、暇だろ？」

「……それが人に助けを求める態度か？ たまには頭の一つでも下げて見せる」

「んじゃ、いーや。お前に下げると頭が乳になりそうな気がする」
プルプルと軽く手を振って、保は大きな欠伸を一つした。

恭一は呆れた顔をして保の頭を叩いた。

放課後、保と恭一が連れ立って校舎を後にしようとする、

「ちよつと〜！ 保、待ってよぉーっ！」

走って来た環に呼び止められた。

「……何だよ」

また煩いのに捕まったとしても言いたげに、保は嫌そうな顔をして振り返った。

と言っても本当に顔を向けただけで足を止める事はせず、そのままスタスタと歩き続けている。

「何で慌てて帰ろうとしてんの？」

構わず歩き続ける保にムっとしつつ、環は背中から話しかけた。

「今日は用事がある」

相手が纏まって来る前に、こちらから乗り込んで先にやってしまおうと恭一との話し合いで決めていた。

人数を集めようとしている連中を潰してしまえば、あとが楽だからだ。

「用事って？」

「用があるって事だ」

「だから！ その内容を訊ねてるんでしょーに！」

「国家機密だ」

と保が言った瞬間、環の蹴りが保の尻を捉えた。

「いてて！ てめえ、何しやがるっ！」

「どうせ、また喧嘩でしょう？ いつまでもそんな事してないで、少しは大人になりなさいよ」

「何を言うか。俺は今まで喧嘩なんてした事は無い」

「……あんた、堂々と嘘ついて後ろめたくないの？」

「ん〜……まあ、確かにこいつの場合は一方的にブン殴ってるだけだからなあ。普通、それは喧嘩とは言わんだろ」

今まで黙って二人の遣り取りを聞いていた恭一が、笑いながら言った。

「もっ……恭一が付いてて何で喧嘩なんてさせるのよ。しっかり監視してくれなきゃ困るじゃない」

「おいおい、俺は保のお目付け役じゃないんだぜ？」

「今日は付き合っただけ欲しい所があつたのにい……」

「一人で行け」

制服の肘を摘んでイジジする環を、保は腕を振り払って睨んだ。しかし、そんな事くらいで環が引き下がる筈も無く、

「じゃあ、三十分で終わらせてね？ 待っててあげるから」

ニコニコしながら自分の腕時計を指差した。

「人のタイムスケジュールを勝手に組むなっ！」

「あと十五分だからね！」

薄暗い路地を入った先にある寂れた喫茶店。

そこから少し離れた駐車場の一角から、先程と同じように腕時計を指し示しつつ環がニコニコ顔で言った。

当然、その視線の先には保がいるのだが、環に突っ込みを入れるほどの暇は無い。

何故なら、今はとても忙しいのだ。

「おい保……環の奴、本当に時間を計ってるぞ……」

「お気楽娘が……！」

恭一の情報で三校の連中の溜まり場を探し出すと、保は無言わさず相手の連中を表に引きずり出し、大立ち回りを始めた。
が……。

「ところで、気が付いてるか？」

「ああ。奴ら、どんどん集まって来やがるな」

「うゝむ、やはり奴らの地元はマズかったか？」

「先に気付けよ……。ま、全部やつちまえば同じ事だ。気合い入れるよ、恭一！」

「結局それが……」

とは言え、こちらが段々疲れて来るのに対して、相手は元気な奴が次々に現れる。

最初はフットワークでかわしていたものの、徐々に相手の攻撃が保と恭一に当たり始めた。

「イテテ……久し振りの感触。顔面にパンチもらったのなんて、何ヶ月振りだ？」

「たまには刺激になっていいだろ。少しは頭の血の巡りも良くなるんじゃないか？ 普段使わねえんだから、保は」

「てめえに言われたかねえっ！ 女の事しか入ってねえくせしやがつて、偉そうに言えた義理かっ！」

大真面目な喧嘩の最中だというのに、そんなふざけた会話が交わされている中、

「ねえ保、あと五分で終わる？」

まったく緊張感の無い環は、相変わらずタイムキーパーをしている。

「環っ！ てめえ、ちったあ状況を考えろっ！」

「いちいちリアクションするなんて、保も律儀だな」

「恭一！ てめえは口よりも手を動かせっ！ さっきから俺の後ろに回ってばっかじゃねえか、こらっ！」

「ほらほら、無駄な漫才で時間使ってる場合じゃないぞ！ 残り三分しか無いんだからね！」

そんな風に先程からいちいち時間を気にしている環に、相手の連中が気付かない筈も無く、

「お姉ちゃん、さっきからな〜に時間計ってたんだ？」

何人かが環にちよっかいを出し始めた。

「ん？ ああ、今日はね、これが終わってからデートなの。だから時間厳守なのさ」

「そりゃあ無理だ、あいつら今日から入院だからよ」

「よく見りゃ結構可愛いじゃん。……なあ、俺らが付き合ってやるよ。軽く運動でもしようぜ」

「あと一分……保く、雑魚相手に時間かかり過ぎく！ 愛の力でパワーアップしろお！」

環は相手を見殺して保にボヤいた。

そんな態度をとられた拳句に雑魚呼ばわりされては、相手が黙っている訳も無く、

「ザけんなっ！」

「拉致るぞ、コラ！」

あつという間に環を取り囲み、今にも襲い掛からんという体勢になった。

それを見た保は喧嘩の最中だという事も忘れたように、

「あ！ よせ、バカ！ そいつにちよっかい出すんじゃねえ！」

と、大慌てで環の方へ走り出そうとした。

だが、まだ大勢残っている三校の男達に行く手を遮られてしまう。

「どうしたよ、そんなに慌てて。……名場、もしかして、ありや

あお前の女か？」

「丁度いいや、てめえの目の前でひん剥いてやるよ」

保の周りを取り囲む男達は、ヘラヘラと厭らしい笑いを浮かべている。

どうやら環を人質にでも取ろうと考えているらしい。

「やめろっ！ そんな真似しようとしたら、お前ら明日の朝陽……

いや、今日の夕陽すら拝めねえぞっ！」

「いつまでハツタリかましてんだ、ボケッ！」

「おい！ 構わねえから、その女もやつちまえっ！」

「馬鹿野郎っ！ お前ら、俺の言う事聞けっ！ そいつにだけは手え出すなっ！」

無論、保の言葉などに耳を貸す筈も無く、三校の男達は環との距離を徐々に狭めて行く。

「うお、よん、さん、にい……」

しかし、自分に近付いてくる男達には見向きもせず、環はひたすらカウンタダウンを進める。

「俺達もか弱い女の子に手荒な真似はしたくねえんだけどさ。 ……」

…ま、恨むなら名場を恨んでくれよ」

「全員で輪姦（まわ）してやるぜ！」

「いち……ぜろ！」

「お母様！ それで、どうなったんですか！？」

利恵は目をキラキラとさせながら、テーブルの上に身を乗り出した。

まるで今から散歩に連れて行ってもらえる子犬のようなはしゃぎっぷりである。

「うん、それでね……」

「おいおい環、その先も話すのか？」

恭一が渋い顔をして、環の話を遮った。

どうも恭一としては、あまり話して欲しくなさそうな雰囲気だ。

「あら、ここからがいいんじゃない。 で、時間になっちゃったもので、わたしが……」

「おい利恵、いつまで話し込んでんだよ、もう行くぞ？」

二階から降りて来た涼が、居間で話している利恵に声をかけた。

しかし、利恵は話しが再開されるのを心待ちにしているので、涼の方には見向きもしない。

「もうちょつと待っててよお。 今、話しが佳境に入ったとこなんだから」

「何が佳境だ、今日は遊びに来たんじゃねえだろ？ 母さんも、いい加減にしろって」

「ん……まあ、しょうがないわね。 利恵ちゃん、続きはまた今

度ゆつくりね。 あんまり待たせると、うちの愚息がへソ曲げちゃうから」

「また愚息って言う……」

「えゝ？ 美浜さんの活躍だって聞きたいのに……」

「はは。 まあ、それはまた次の機会にね。 おい涼、お前可愛い彼女捕まえたな。 ボンクラ小僧にや勿体無いぜ」

恭一にからかわれて、涼はムスっとした顔になる。

この手のネタでからかわれるのが面白くないのだ。

だが……。

「お？ 何だ、その顔は。 ……そうか、どれだけ強くなったか俺に見て欲しいのか。 よし解った、表へ出る」

そう言つて恭一が立ち上がるうとすると、涼は両手をブンブン振りながら、

「ちつ、ち違いますよ！ そんな無謀な考え持つてませんって！」と、怯えた顔になった。

今でも恭一は、この辺で知らない者がいないほど名前と顔が通っている。

道で会つたチンピラでさえ、かしこまって頭を下げて避けて行くくらいだ。

いくら涼の腕っ節が強いといつても、まだまだ恭一の足元にも及ばない。

「冗談だよ。 じゃ、利恵ちゃん達は先に出てくれるか？」

「はい。 ねえ涼、ヒナちゃんは？」

「さつきから真と外で待つてるよ。 だから早くしろって言つたんだ」

涼達が外へ出て行くと、恭一と環は仏間に入り、仏壇の前に正座した。

こうして二人が仏間に揃うのは、随分と久し振りの事だ。

「早いもんだな……。 涼も、もう中二か」

ついこの間まで保に頭を小突かれていたような気がするのに……

と、恭一は思った。

しかし、確実に時は過ぎているのだ。

「恭一も老ける訳よねえ」

「お前も同じ年だろうが……しかし、やっぱり似てるよな」

「親子だもの。でも、似なくていい所ばかり似るのよね」

「やたらと喧嘩っ早い所、ズボラな所、肝心な事には鈍い所。どこもかしこも似て欲しくない部分ばかりだ。」

「そういうもんなんだな……。なあ、保」

恭一は笑って、仏壇の写真に向かって話し掛けた。

まるで写真の本人が、その場にいるかのように……。

「しかし……さっきの話し、しない方がいいんじゃないか？」

「楽しい思い出話じゃない」

「涼が衝撃受けるぞ？ お前一人で三十人も半殺しにしたなんて聞いたら」

あの時以来、その手の連中が保に仕掛けて来る事は一切無くなった。

『あんな恐ろしい女を手懐けてる奴は、もっととんでもなく強いに決まっている』

という噂がどこからともなく流れ始め、『無敵の鬼神』の通り名が完全に定着してしまったのだ。

……まあ、誰が流した噂なのかは、お察しの通りである。

「半分くらいにしとくわよ」

「半分ねえ……」

それにしたって一人でやる数ではない。

保が環のプロポーズを断らなかったのは、ひょっとしたらこれが原因かも知れないと恭一は思った。

「……そろそろ俺達も行こうか、墓参り」

「そうね。それじゃダリン、また向こうでね」

仏間を出る環と恭一の背中を、写真の中の保が笑って見送っていた。

雅純情物語（前編）

とある快晴の日曜日の早朝、登内大蔵は珍しく登内家本宅にいた。分刻みどころか秒刻みのスケジュールに追われる事が常であり、相変わらず忙しく飛び回ってはいるのだが、今日は大事な要件を抱えて美耶子の部屋を訪ねていたのだ。

が……。

「駄目ですね」

美耶子は普段通りの正座を崩す事も無く、大蔵を目の前にしてニコニコしながら拒否の意思表示をした。

と言つても、その言葉はいつものように優しく、調子も柔らかい。美耶子の事をよく知らない者が見たら、それは断っているように思えないだろう。

しかし、美耶子はこれ以上無いくらい本気で断っているのだ。

「わたしとて本意では無いのだが、色々と果たさねばならん義理もあるのだ。解ってくれ、美耶子。ここは一つ、この父を助けると思つてだな……」

大蔵は美耶子の点てたお茶を一口啜ると、もう一度姿勢を正して美耶子に言った。

「お父様をお助けするのは、SPのお仕事ではないのですか？」

「そういう助けではない！」

「では神部さんにお願ひしましょうか？」

『神部』とは、もう十年ほど大蔵の秘書していて、美耶子が小さい頃には一緒に遊んでくれたりもした女性である。

かなり優秀な人物である事は、大学在学中に登内ヘスカウトされた事からも判る。

「お前は……そのノラリクラリとした会話を何とか出来んのか？」

「わたしはお母様に似たのでしょうかね。お母様とは会話が弾みますから」

「……それは遠回しに、わたしとの会話はつまらんとおっしゃるのか？」

「あら？　わたし、そのようなつもりはありませんよ？　お父様は最近僻みっぽくなりましたねえ。　もうお歳という証拠でしゅうか？」

美耶子は時々その可愛らしい口から、ニコニコ顔のまま相手の心臓をえぐるような言葉を発射する。

しかしそれは、恐らく美耶子が怒り始めているサインなのだろう。心なしか、その笑顔も硬くなりつつあるように見える。

それを感じたのか、大蔵は強引に話を打ち切ろうと、

「とにかく！　時間は先程伝えた通りだ。　変更は無い！」

正座している自分の膝に乱暴に手を打ちつけ、立ち上がりながら美耶子に言い放った。

「わたしの答えも変わりませんよ？　お断り致します」

「……わたしの頼みは聞けんという事か？」

「今回の件に関して言えば、そうなりますね」

「わたしの命令が聞けんと言うのか、美耶子！」

「わたしはお父様に雇われている身ではありませんから、命に従う義務はありませんね」

「父親の言う事を聞けん娘がどこにおるかっ！　子供は黙って親の言う事を聞いておれば良いのだっ！」

どうも美耶子とは会話の波長が合わないらしく、大蔵はイライラが嵩じて、つい声を荒げてしまった。

普段、充分に美耶子と会話しているとは言えないのだから、それは仕方の無い事なのかもしれないが……。

「まあ！　そのような乱暴な物言いをなさるなんて……。　お父様は、もつとわたしの事を理解して下さっていると思っておりますのに……。　見損ないました」

世辞や愛想など、円滑な会話を成り立たせる為の、一種『無駄』
とも思える言葉を言わない美耶子だけに、相手に対する失望や幻

滅の感情は、当然ストレートに口に出す。

それらは全て『本心』から出ている言葉だ。

「う……い、いや、今のは少し言い過ぎた、すまん。　しかしな美耶子、わたしの立場という物も……」

「解りませんし、解りたくもありません。　右近はいますか？」

「これに控えてございます、美耶子様」

美耶子が一声かけると、大きな体躯に見合わぬ静かさで障子を開け、右近が姿を現した。

「お父様は、もうお引取りになられるそうです。　外までお連れしなさい」

「かしこまりました」

「こら美耶子！　話しはまだ終っておらんだろう！　右近、放さんか！」

「本日、わたしはお出かけしなければなりませんので、いつまでもお父様の世迷言にお付き合ひしている暇はありません」

美耶子は『出かける』という言葉を発した途端、今までの不機嫌そうな顔が一変し、とびっきりの笑顔を浮かべた。

いつも平和な笑顔でいる美耶子だが、今の表情はそれ以上だ。

その顔を見た大蔵の頭の中に、ある人物の名前が浮かんた……

「出かける？　ま、まさか……あの浦崎とか言う若造と出かけるのではあるまいな！？」

もう何度耳にしただろう……『浦崎琢磨』　という忌々しい名前を……。

大蔵にとつて、美耶子も雅も手放したくない大事な娘だ。

その内の一人の心を独占している男……。

大蔵は、ある種『嫉妬』にも似た気持ちを抱いているのだらう。

「お父様、お言葉に品位が欠けていらつしやいますよ？　琢磨様は素晴らしい殿方です。　そのような表現は控えて下さいましね？」

「許さん……わたしは絶対に許さんぞ！　そんな何処の馬の骨とも

判らん男に、登内家の長女をいい様にされてたまるかぁーっ！
…ええい、右近！ いい加減にその手を放さんかあっ！

「お父様！ 琢磨様は浦崎流宗家の総領ですよ！ そして、その腕前は超一流。清廉潔白、眉目秀麗、文武両道と、まさに非の打ち所の無いお方です。今のお言葉は取り消して下さい！」

「そんな人間がこの世におるか！ 人は誰でも醜い部分の一つや二つは持つておるものだっ！ お前はその男に騙されておるのだ、目を覚ませ美耶子！」

言ってしまったから、大蔵は『はっ』とした顔になった。
恋をしている時、その相手を悪く言われれば誰でも当然怒る。

それは美耶子も例外では……いや、美耶子は殊更に……。

「あ……待て、美耶子！ 今のはわたしが悪かった、取り消す！」

「左近！ 左近はいますかっ！」
後悔先に立たず……。

コンコン……と申し訳なさそうに、ドアを小さくノックすると、大蔵は部屋の主の許可を得て、そっつと部屋の中へと入った。

「あれ？ 珍しいね、お父さんがアタシの部屋に来るなんて」

丁度、お気に入りの曲をパソコンで編集しているとこだった雅は、椅子に腰掛けたまま腰を捻り、上半身だけを大蔵の方へ向けて言った。

「うむ……まあ、色々と事情があつてな……」

あれから大蔵は右近と左近の鉄壁のガードにより、美耶子の部屋へ一歩たりとも近付けなくされてしまったのだ。

勿論、大蔵は登内家当主として道を空けると命じたのだが、いかな大蔵の命令とは言え、美耶子と雅直属のSPとなっている二人には通用しない。

その辺りでは主人同様、融通が利かない二人なのである。

おまけに……。

「これ以上わたしの邪魔をなさるなら、お父様とは親子の縁を切りますっ！」

とまで言われてしまったのは、娘に甘い大蔵の事、もう何も言う事は出来ないのである。

「で、何？」

「雅……一つ、わたしの頼みを聞いてはもらえんかな？ たった一つだけで良いのだ」

美耶子に頼んだ時よりも、はるかに低姿勢である。

雅の部屋にはいくつも椅子が並んでいるというのに、大蔵はそれに腰掛けもせず、こそこそと雅の顔を窺っている。

「お父さんがアタシに頼み事なんて益々珍しいね。まあ、アタシに出来る事だったら、別に構わないわよ？」

「そうか！ 引き受けてくれるか！ さすがは雅……立派な娘に成長してくれて、父は嬉しいぞ」

「な、何泣いてるのよ、気持ち悪いなあ……。で？ その頼み事って何？」

「ん？ ああ……実は今日、人に会って欲しいのだ」

「今日？ あ、じゃあダメ」

プルプルと右手を左右に振りながら、雅はアッサリと大蔵の頼みを断った。

「何故だ！？ たった今、頼みを聞いてくれると言ったばかりではないか！」

「アタシにだって都合があるでしょ？ いきなり今日って言われても無理よ」

「そ、それはそうだが、わたしには今日しか時間が無かったのだから仕方あるまい？」

「それはお父さんの都合でしょ？ それと同じよ。アタシ、今日はお出かけるんだもん」

雅は、美耶子と同じ表情を浮かべながら言った。

もつとも、双子だから基本的には同じ顔なのだが……。

「そ……その顔！ まさか、お前まで男と出かけるのではあるまいな！？」

「何よ、お前までって……ああ、姉さんも今日は出かけるって言うてたっけ」

「あ、相手は誰だっ！ 返答次第では、登内家の全部隊を出動させるぞっ！」

「はあ？ 何バカな事言ってるのよ……」

「なら、誰と会つのか言いなさい！ それとも、わたしに言えないような相手なのかっ！」

「うるさいなあ、もう……。相手は宇佐奈君よ、お父さんも知ってるでしょ？」

「うさな？ 宇佐奈と言うと……ああ、彼か」

宇佐奈涼……雅を暴漢から救ってくれた男。

そればかりか、美耶子と雅の間にあつた深い溝を埋めるきっかけを作ってくれたという、いわば大蔵にとっても大恩人である。

「あの一件の後、恩にも着せず、礼も不要と言い切りおつたな。

今時珍しく男気のある若者だ」

「でしょ？ その人に会うつていうのに、何か問題ある？」

「た、確かにそれ自体に問題は無いが……今日でなくてはいかんのか？ 来週では……」

「そんなのダメよ！ やつとの事で利恵の目を掻い潜って、何とか約束を取り付けたんだから」

「利恵？ ああ、お前の一番の親友だと言っておつたあの子か。

快活で、なかなか楽しい子だな。ああいう子を友達に持つのは良い事だ」

じゃじゃ馬な雅を上手く乗りこなしている利恵を、大蔵は心底気に入っている。

一度、登内の養女にという話を持ち出して、雅からどやされた事があるくらいだ。

「しかし、何だ？ 掻い潜ってだの、何とか取り付けただの……穏やかではないな」

「へ？ お、お父さんには関係無い事だから気にしないでね？ おほほほ。……あつ！ もう時間無いや、早く着替えなきゃ。お父さん、そういう訳だから、ごめんね？」

「……すまん雅、今日は諦めてくれ！ メイド部隊、集合せいっ！」
大蔵が一声叫ぶと、大勢のメイドが雅の部屋へと入って来ると同時に、一斉に雅を取り囲んだ。

総勢、ざっと二十名といったところだろうか？
それぞれ手に色々な物を持っているという事は、事前に打ち合わせをしてあったと思われる。

「ちょ、ちよつと、何よ！？」

「メイド部隊、早速作業にかかれ！ SP部隊は雅が逃げられんように、窓と出入り口を封鎖せいっ！」

大蔵の号令に合わせ、各部隊は迅速に行動を開始する。

まさに、一糸乱れぬとはこの事だろう。

メイド部隊の何名かが、大きな目のパーテーションで雅を覆い隠すようにすると、他のメイド達が総がかりで雅の部屋着を剥ぎ取り、着せ替え人形よろしく雅を着替えさせにかかった。

その間、SP部隊はそれぞれ雅の脱出口を潰しにかかっている。

「やだつてば！ アタシ、今日は出かけるんだって言って……こちら！ 放しなさいよ！」

「ささ、雅様、御召替えを」

「ちよつと、やめなさい！ アタシの命令が……いやあー！ 変なところ触らないでよっ！」

「許せ雅……わたしには、こうするより他に道が無いのだ……！」

「右近！ 左近！ いないのっ！？ 助けに来なさいよーっ！」

「生憎だったな、雅。その二人なら、美耶子の傍から離れられんそうだ」

「また姉さんかあーっ！」

子供の頃からいつでもそうだ。
マイペースな美耶子の失敗や悪戯の余波は、必ずと言って良いほど雅に押し寄せて来る。

あの時だって……。

それは、二人が幼稚園生の頃……。

「おかしいですね……こちらで良いと思ったのですが……」

「だから、やめようって言ったのに……」

高原の避暑地。

都会で育った子供にとって、そこで目にする物の全てが珍しく、刺激的だ。

ましてや日頃、何をするにも、どこへ行くにも、必ずお供の者が付いて回るような家に生まれた二人にとって、それは尚更であったろう。

「もう少し先まで行ってみましょう。もしかしたら大きな道に出るかもしれません」

「うん……」

普段、忙しく仕事で世界中を飛び回っている父。

その父に連れて行かれたり、父のいない間の会社運営を任される母。

二人には、プライベートの時間など無いに等しい。

その結果、当然の如く、子供達と過ごす時間も奪われてしまう。

その罪滅ぼしのつもりなのだろう、夏休みに入っすぐ、大蔵は一家揃っての旅行に出かけた。

と言っても、決して仕事を放り出して来た訳では無い。

山のような案件を抱えたまま、ここに来ているのだ。

美耶子や雅が散歩に行こうと誘っても、大蔵は部屋から出られない

い事が殆どだった。

せつかく家族揃って来ているというのに、これでは普段と何も変わらない。

そんな時、美耶子は自分の頭に浮かんだ計画を実行に移した……。

「雅、探検しましょう」

雅が大人しく部屋で本を読んでいるところへ、美耶子がニコニコしながらやって来た。

その顔は普段と同じに見えるが、どうも何か企んでいるようだ。

「たんけん？」

「そうです。少し行った所に洞窟があるんです、それを見に行きましょう」

「どうくつ？ でも、危ない所に行ったらいけないんだよ？ ……」

お父さんに叱られるよ？」

「だから、みんなに内緒で行くんです」

決して危ない事をしてはいけない、決して勝手に何処かへ行つてはいけない。

普段厳しく言い付けられている事を、美耶子は敢えて無視した。

美耶子にとって、それは大蔵に対するささやかな反抗だったのかもしれない。

「でも……内緒で行ったらいけないでしょ？ やめようよ……」

内緒……確かに魅力的な響きではあるが、あとで叱られる事が判っている雅には、すぐに頷く事は出来なかった。

「大丈夫ですよ、お姉ちゃんが一緒なんですから、ね？」

「でもお……雅、いい子にしてるって、お母さんと約束したんだもん……」

「探検は楽しいですよぉ？ 雅だって色々な物を見てみたいでしょう？」

本の中では人跡未踏の地を旅する物語や、魔界に足を踏み入れる物語なども読んだ。

そのどれもがワクワクするようなお話ばかりで、雅はいつか自分

もそんな風に探検したいと思っていたのだ。

「さあ、一緒に冒険の旅へ出ましょう！ お姉ちゃんと一緒なら、怖い物などありません！」

「う、うん……」

雅は、その甘美な誘いに抗えなかった。

しかしその結果は……。

「お姉ちゃん！ 雅、もう帰りたいよお！」

「そう言われても……わたしも、どちらへいったら良いのか判らないのです……」

「お腹空いたあ、お菓子ちょうだい」

「さつき雅が食べたのが最後の一つです。 もうありません」

「うええ…… 足が痛いよお…… もう歩けないもん！」

本当は足など痛くないのだが、幼い雅が頼れるのは目の前の姉だけだ。

いつも大抵の事が自分の思い通りになる雅は、あまり我慢という物をしない。

今も美耶子に甘えようとして地面に座り込み、足を投げ出している。

こうしていれば、美耶子が何とかしてくれると思っているのだろう。

（どうしましょう……。 でも、ここでわたしが泣いてはいけません！ わたしは、お姉ちゃんなのですから！）

しかし、その姉も雅と同じ年。

懸命に姉として気を張ってはいるが、不安なのは雅と同じだ。

小さな二人にとっては険しい山も、大人にとってはどうという事も無い程度に荒れている土地。

美耶子の言っていた洞窟も、実際は単なる小さな横穴で、こういった場所ではそれほど珍しい物でもない。

それでも二人にとって、初めて誰も共を付けずに出かける大冒険であつた。

最初の内はただ楽しいばかりで、胸の高鳴りが更にその気持ちを大きくしていたが、疲れが増すにしたがつて段々と寂しさが募り、親が恋しくなつて来る。

持つて来たお菓子も食べ尽くしてしまつたし、徐々に陽が傾き始めている事もあつて、二人の不安は一層大きくなつた。

「……あ！ あそこに小さなお家がありますよ、あそこで少し休みましょう。 ほら、雅、頑張つてもう少し歩いて下さい」

美耶子の指差す先に、小さな小屋のような建物が見える。

……いや、建物と呼ぶには、あまりにも粗末な出来映えである事を考えると、恐らく地元の子供が造つた、自分達の隠れ家といったところだろう。

しかし、他には家らしい物は見当たらず、『人の匂い』がするのほそただけなのだ。

二人は迷わずそこへ向かつた。

「うわあ……何とも粗末な家ですねえ……」

壁や床は隙間だらけで、天井も骨組みにただ板を乗せてあるだけだ。

天井という物はもつと高い場所にあるのだとばかり思っていた美耶子は、すぐに手が届きそうな位置にあるそれを見て不思議そうな顔をしている。

空調設備などあろう筈も無く、柔らかなソファもテレビも無い。

小さな窓にはガラスの代わりにビニールが張られていて、部屋の真ん中にはテーブルではなく、不恰好に板を打ち付けた台があるだけだ。

二人にとって、ここは初めて見る異空間だつた。

「やはり出ましようか？ ここは、あまり良い環境とは言えないようですし」

「ほんとに、もう歩けないよあ……ひつく……疲れちゃつたよあ……」

……」
「……仕方ありません。誰かが迎えに来るまで、ここで待ちましよう」

二人は椅子代わりなのだろう木の箱に腰を下ろした。
当然、座り心地は最悪で、固い上に、何だかチクチクする……。

「お迎え？ お母さん、来てくれる？」

「来るとしたらSP部隊か、メイド部隊でしょうね。お父様方はお忙しいですから、お外にお出になる事は無いと思います」

「ええ？ そしたら、お父さんに言い付けられちゃうよお！ 叱られちゃうよお！」

「お父さまは、わたしたちがいない事など、とうに気付いてらっしゃると思いますよ？」

朝からこの時間まで子供達がいけないのだ。

大蔵が部屋にこもっているといっても、他の者達が騒がない筈が無い。

もしも二人に何かあったら、責任問題になってしまうのだから当然だ。

「ふえ？ 誰にも内緒って言ったじゃない！ お姉ちゃんの嘘つき！」

「内緒にしても、いずれ秘密は露見するものです。人の口に戸は立てられません」

美耶子が堂々と自分の言った言葉を翻すところは、昔から変わっていないらしい。

それも、いかにももつともらしく……。

「雅、いい子にしたのに……いい子にしたのにい！」

「大丈夫ですよ、雅。叱られる時は、わたしも一緒ですから」

「全然大丈夫じゃないもん！ 叱られるのやだあ……うええ……」

「あらあら、泣かないで下さい雅……わたしまで悲しくなっています……」

「お前ら、何やってんだ！」

怒ったような声のする方へ二人が顔を向けると、小屋の出入り口の所に男の子が二人立っていた。

見た感じだと小学三年生か、四年生といったところだろうか？

「ここは俺達の家だぞ！ 勝手に入るなよな！ それじゃ泥棒と同じだぞ！」

小さい方の男の子が、ムっとした顔で雅に向かって言った。

今まで男の子から怒鳴られた事など無い雅は、それだけで萎縮してしまっている。

「ご、ごめんなさい……」

「まあ！ わたしの妹に何という事を言うのです！ 無礼な言葉は赦しませんよ！」

いや、言われているのは美耶子も一緒なのだが……。

「何が無礼だ。 お前ら 『ふほーしんにゅー』 で訴えるぞ」

きつと覚えたての言葉なのだろう、小さい方の男の子が変な発音で言った。

「まあまあ、いいじゃないか。 鍵も無いんだし、別に入られたって困らないだろ？」

「お前は女の子には甘いんだからなあ……」

どうやら背の高い男の子の方が立場が上らしく、小さい男の子はそれきり黙ってしまった。

背の高い男の子は、にこにこしながら二人に話しかけて来た。

「ねえ、君達どこから来たの？」

「それが判らなくなってしまうして……」

「迷子か……地元の子じゃないみたいだ。 なあ、駐在さんと呼んで来ようか？」

「駐在さんはやめた方がいいな。 あの人は怖いから、そっちのチビがもつと泣くぞ？」

「み、雅はチビじゃないもん。 レディーなんだから……」

本当はもつと大きな声で言い返したかったのだが、また怒鳴られたら嫌なので、雅は美耶子の後ろから囁くように抗議した。

「それなら、僕のお父さんがいいかな？　かなり優しいと思うけど？」

「じゃあ俺が行って来るよ。お前は、そいつらの相手でもしてろ」
小さい男の子は表に置いてあった自転車に跨り、走り去った。

どうやら美耶子達のような小さい子の相手は苦手らしく、ここから逃げたかったのが本音だろう。

かなり慣れているのか、悪路にハンドルを取られる事も無く、どんどん加速している。

「一時間もすれば誰かが来てくれるよ。　それまで泣かないでお話しようか？」

笑顔を絶やさず、グズる雅に嫌な顔一つせず、男の子は色々な話を二人に聞かせた。

最初は戸惑い、警戒の色を見せていた二人も、段々と男の子の話に引き込まれて行った。

その後、SP部隊と共に帰った二人は大蔵から大目玉を貰ったのだが、雅は今日会った男の子の事が、ずっと頭から離れなかった。はにかんだような、少し悪戯っぽい微笑みを浮かべながら、ずっと雅に話しかけてくれていた男の子。

それは、雅の初恋であったのかもしれない……。

「御堂智仁（みどうともひと）　です」

「と、登内雅です……」

目の前に立つ男性を見て、着物姿の雅は何やらぼくっとなつている。

長身でスマートな体型に、軽く後ろへ流すように真ん中で分けられた、艶やかでさらさらの髪。

顔は至って普通……な筈も無く、かなり整っている。

かと言って、にやけた優男かと言えば、スーツが綺麗な逆三角形になっているところを見ると、そうでもないようだ。

世間一般で言う所の『いい男』である。

「立ったままというのも変ですから、座りましょうか」

「え？ あ、はい……」

智仁は即座に雅の後ろに廻ると、適度な間隔に椅子を引き、雅が腰を下ろすのに合わせて、静かに椅子の位置を整える。

（スムーズで無駄の無い動き……。 な、なんか、カッコいいかも……）

登内系列のホテルのスカイラウンジで、二人は向かい合う形で席に着いた。

一見すると、まるでお見合いをしているようにも見えるが……。

（……ハッ！？ いけないいけない！ アタシったら、何を見とれてるのよ！）

「月並みな質問で恐縮ですが、雅さんのご趣味は？」

……お見合いだ。

「心配するな、まとまらなくて良いのだ」

ここに来るまでの車中で、大蔵は雅に笑いながら言った。

「当たり前よ！ まとめられてたまるもんですか！ アタシ、まだ十六なんだからね！」

これから向かう先でお見合いをさせられると聞き、雅は大慌てで車から降りようとしたのだが、まさか高速道路で飛び降りる訳にもいかず、ムスツとしたまま足を……。

「おまけにこんな格好させられて……姉さんじゃあるまいし！ あゝ苦しい……」

組みたかったのだが、着物を着せられてはそれも出来ないの
で、余計にムスツとなった。

本人はお気に召さないようだが、どこに出しても恥ずかしくない

ほどこに、雅は美しく飾られている。

一応、雅も美耶子と共に様々な場所へと呼ばれる事があるので、その為に仕立てられた友禅振袖。

桜に毬の柄の物である。

と言つても、窮屈だからと嫌がつてドレスばかりだったので、これを着た事など今回が初めてなのだが……。

「無理矢理予定を変えさせられて、無理矢理着物着せられて……アタシ何か悪い事したのかなあ？ 誰かに恨みでも買つてるのかなあ？ アタシの人権は完全に無視されてるのねえ……損害賠償請求の民事訴訟でも起こしてやろうかしら」

「そう怒らんでくれ……わたしとて本意ではないのだ」

「これが怒らずにいられますか！ 大体、本意じゃないなら、こんな話持つて来ないでよ！ せつかく今日は宇佐奈君と……」

雅は窓の外に目を向けたまま、ブツブツと文句を言い続けている。それはそうだろう。

やっと涼と二人きりで出かけられると思つていたのに、結局それを自分から断る羽目になつてしまったのだから。

「姉さんも姉さんよ！ 妹の幸せの為に尽くすのが姉つてもんではない？ なのに、自分の幸せだけを求めるなんて……赦せないわ！」

それを言つたら、姉の幸せの為に尽くすのが妹の役目だと言いつ返されそうである。

何と言つても双子なのだし……。

「わたしも美耶子の方が向いていると思つたのだが……。美耶子なら絶対に縁談がまとまる事は無いだろうしな」

「……アタシ、暴れてもいい？」

「頼む……なるべくなら穏便に済ませてくれんか？ 相手は決して悪い人物ではないのだ」

登内家に持ち込まれる縁談は多い。

その殆どは、政財界でもかなり上の地位にいる者の縁者だ。

しかし、どれも大蔵のお眼鏡に適う者では無く、全て大蔵が断つ

ていたのだが……。

「何で今回に限って受けたりしたのよ！ 迷惑だわ！ 不愉快だわ！ 理に適わないわ！」

「そうポンポン言うな……相手側からの断つての希望でな、仕方無かったのだ」

「マシンガントークは父親に似たんでしょうよ、アタシはがさつですからねーだ！ ……で？ 相手はこの誰なのよ。アタシは、それすら聞かされてないんですからね！」

「御堂智仁。 御堂家の御曹子だ」

「御堂？ どつかで聞いた事あるなあ……？」

「……一之瀬の縁者だ」

大蔵は忌々しそうな顔で言った。

出来れば一之瀬の名を口にしたいは無いのだろう。

何しろ登内グループ最大のライバル……と言うより、目の上のたんこぶといった感のある一之瀬コーポレーション。

その総帥、一之瀬棗（いちのせなつめ）は、大学時代から事ある毎に大蔵と張り合っている間柄なのだ。

二人の妻もやはり大学の同期生なのだが、こちらは至って仲が良
い。

二人が夫の海外渡航に付いて行くのは、現地で一緒に買い物をして歩いたり、観光したりするのが主目的である。

「一之瀬の縁者？」

（……あ、そうだ！ 美奈さんの従兄だ！）

どこかで聞いた名前だと思ったら、何の事はない。

以前、美奈とプライベートチャットをしている時に、その名が出たのだ。

しかしその時、別の事も話題に上がっていた……。

「お父さん、つかぬ事をお伺いしますけど……まさか、またつまんない賭けなんてしてないよね？」

「な、何の話だ？」

「だって、前にお父さん『賭けに負けたペナルティで、一之瀬の娘に縁談を世話してやったわ』って、楽しそうに笑ってた事あったじゃない」

「そ、そうだったか？ いやあ、最近歳のせいかな、昔の些細な事は憶えとらんなあ……」

「……やったな？ またやったな、お前！ しかも負けたなあっ！？」

「お、お前とは何だ！ それが父親に対する口の利き方かあっ！」

「うるさい馬鹿者！ お前なんか勘当だっ！ 今この瞬間から、父でも娘でもないわっ！ 二度と登内家の敷居を跨ぐ事は許さんから覚悟せいっ！」

「お前の言う事がーっ！」

（まったく……あのタヌキ親父は口クナ事しないんだから！）

思い出しただけでも腹が立つ。

雅をここへ送り届けると、そのまま本社へ直行してしまった大蔵の顔が浮かんで、雅の表情が陰しくなった。

仕事があると言っていたが、恐らくは雅の怒りを恐れて逃げたに違いない。

「あの……雅さん？」

「何よ！」

「失礼、お気に障りましたか？」

大蔵との遣り取りを思い返してムカムカしていた雅は、ついウツカリ智仁を怒鳴ってしまった。

いくら意にそぐわない席だと言っても、智仁には何の罪も無い。雅は慌てて、

「あ！ ごめんなさい、違ってます。 ちょっと嫌な事を思い出しちゃったもので……」

と、顔を赤らめながら謝った。

「そうでしたか。では話題を変えましょう」

「あの、その前にお訊きたい事があるんですけど」

「やあ、これは嬉しいな。僕に興味を持って下さったんですね？
いいですよ、何でも訊いて下さい」

ちよつと受け答えにズレがあるような気がする……。

やはり、この人の相手は美耶子の方が向いているのではないかと、雅は引きつった笑いを浮かべながら思った。

「今日のお話、御堂さんの方から父に申し入れられたって聞きましたけど……どうしてです？」

雅は舌を噛みそうになりながらも、何とかつつかえずに言い切った。

これでは、お嬢様になるのは、やはり無理そうである。

「そうですね……まず、お顔を拝見したかったのと、直接お会いしてお話しをしたかった……といったところでしょうか」

「……よく解らないんですけど？」

自分で言うのも何だが、登内家の娘と縁談を組んでおきながら、理由がそんな事とは。

たかがその程度の事の為に涼との約束を反故にしまったと思うと、先程まではいい男に見えていた智仁の事が、急に憎たらしく思えて来た。

「だいいち、アタ……わたし、御堂さんの事を知り……存じ上げませんし」

日頃使っていない言葉を使うのは難しく、雅の言葉は徐々にボロボロになって行く。

別に良い所を見せようとしているのではない。

やはり初対面の相手、しかも年上に対しては、それなりの言葉を使おうとしているだけだ。

もっとも、涼と初めて会った時には、そんな余裕も無かったが……。

「そうですか……」

「……？ あ……何か？」

雅は、智仁が急にしょんぼりしたように思えて、自分が何か気に触るような事を言ってしまったかと気になったのだが、

「いえ、何でもありません。……そうだ、今日は天気も良い事ですし、少し外に出ませんか？」

智仁は急に明るい顔になって言った。

「え？ ええ、それは構いませんけど……」

「良かった。では車を回して来ますので、雅さんは正面玄関でお待ち下さい」

「あ、はい、解りました」

大蔵は本社の会長室で、椅子に腰掛けたまま忙しく机を指で叩いていた。

普段はそんな事をしないので、何かあったと誰が見ても判るだろう。

「会長、そんなにお気になさるのでしたら、おやめになったら如何です？」

大蔵の秘書である神部女史が、大蔵にお茶を淹れながら言った。

無論、雅の見合いの事を言っているのだ。

本来ならば今日は休日なのだから出社の義務は無いのだが、大蔵が出て来ると聞けば即座に顔を出す。

たまにはゆっくりしろと大蔵に言われても、これを変える気は無いようだ。

「……このわたしに、棗に頭を下げると言うのか？」

「イライラしているよりも、その方が精神衛生上良いと思います」

「ふん！ そんな真似をするくらいなら、最初からこんな下らん事はせんわ！」

淹れられたばかりのお茶を乱暴に飲もうとして、大蔵はその熱さに目を白黒させている。

「下らないだなんて……雅様にとっては重大な事なんですよ？ 失

礼を承知で敢えて言わせて頂きますが、少々女性を軽く見ておられませんか？」

「そんな事は無いっ！……大事な娘を軽く見る事など、する訳が無かるう？」

「会長……私は『女性』と申し上げたんですよ？」

大蔵は何か言おうとしたが、すぐにその言葉を飲み込んだ。

そう、雅はもう『女性』なのだ……いつまでも小さな子供ではない。

恋もすれば、人を愛しもある。

結婚する事も、もう可能な年齢なのだ。

「娘達がそれを望んだら……わたしは笑顔で頷くのが正しいのか？」

神部

「私には経験の無い事ですので解りかねます。強いて言うなら、

会長のお嬢様方への信頼と、父親としての愛……その兼ね合いでの判断でしょうか」

「小難しい事をアツサリと言っな、お前は……」

「恐れ入ります」

神部女史はにっこりと微笑みながら、軽く頭を下げた。

「あの……どこまで行くんですか？」

雅は乗り心地の良い助手席から、智仁に声をかけた。

一応、丁寧な言葉遣いをしてはいるが、もう既に普段の雅の口調になってしまっている。

美耶子に成りすまして悪戯をしている時には平気なのに、どうもこういった場合には、すぐに素の状態に戻ってしまうようだ。

「何処でも。雅さんのお好きな場所へお連れしますよ」

「アタ……わたし、あまり遠出はしたくないんですけど……」

「御心配無く。ちゃんと今日中にお宅までお送りしますから」

「いえ、別にそういった心配をしてる訳じゃ……」

雅は急に怖くなった。

智仁がその気になれば、雅一人くらい思いのままにする事は可能なのだ。

例えば智仁が美奈の従兄とは言っても、男である事に変わりはない。その心の内に、自分を襲おうとした男達と同じ物があつたとしたら……。

涼や真一郎、それに琢磨など、例外的な存在と一緒にには出来ないのだ。

だが、雅の警戒心とは裏腹に、智仁はそういった素振りを微塵も感じさせず、終始にこやかな笑顔を浮かべ、本心から楽しそうに雅に話しかけて来る。

「それにしても……素敵なレディーになりましたね。いや、昔からそうだったかな？」

「え？ 昔からって……？」

「まだ思い出してもらえないのか……そんなに印象が薄かったのかなあ？ 僕って、そんなに変わりましたか？」

「え……？」

美奈の親族で会った事のある人間など、雅の記憶には無い。

大蔵と棗の関係を考えれば、それは至極当然の事だ。

「叔父から話を聞かされた時には、正直驚きました。まさか、あの時会ったチビちゃんが、登内さんのお嬢さんだとは思いませんでしたからね」

「え？ え？」

「そう言えば、もう自分の事を『雅は』と言わなくなっただけですね」

「あの……もしかして？」

「どちらだと思えます？」

智仁は、少し悪戯っぽい表情を浮かべて雅に微笑んだ。

憶えがある……この優しい笑顔には、確かに見憶えがあつた。

「少し背の高い方の……アタシにずっと話しかけてくれてた……？」

「正解です」

素敵な青年に成長した、初恋の相手との再会。

しかも、それがお見合いの席だ。

雅は、もう何をどうして良いのやら、すっかり解らなくなっていた……。

雅純情物語（後編）

「びつくりしました……」

夕陽に映える海の見えるカフェテラス。

デートの場所としては在り来たりだが、智仁としては健全な場所を選んだ結果なので、これは仕方の無い事だろう。

向かい合わせに席に着き、少し喉を潤したところで、雅は改めて言った。

「御堂さんが、あの時の男の子だったなんて」

「最初に話してしまつたらつまらないと思って黙っていたんですが、あまり意味はありませんでしたね」

微笑みながらそう言つと、智仁はコーヒーを一口飲んだ。

そんな仕草の一つ一つも絵になっている。

「本当に話しがたかったただけなんですか？」

それだけなら、何もわざわざお見合いの席など設けなくても、普通に会つて話せばいいだけの事だ。

一之瀬の縁者なのだから、美耶子の事も雅の事も、すぐに判るだろうに……。

「そうですね……まあ、お見合いですから、完全にそれだけという訳ではありませんが」

「でも、もしかしたら姉が来たかもしれないんですよ？ それでも同じ事を言つんですか？」

「え？ それは違いますよ」

智仁はカップを置くと、意外そうな顔をして言った。

「僕は最初から雅さんとお会いしたかつたんですから」

「でも、父はそんな事、一言も……」

「おかしいな……何か行き違いがあつたのかもしれませんが」

そう言えば大蔵は、この見合いをまとめるつもりは無いと言っていた。

その為には美耶子が適任だと……。

（あのクソ親父……元々アタシが絡んでる話だったんじゃないか！
どうして小細工する前に、正直に言わないかな！）

一之瀬に頭を下げるのは嫌だし、見合いが纏まってしまうのも嫌だ。

かと言って有耶無耶にしてしまう訳にもいかないし……という事で、目下のところ琢磨一筋になっている美耶子を使おうと考えたのだろう。

それなら話が進む事も無いだろうし、仮に進んだとしても琢磨を排除出来るくらいに思っていたかもしれない。

（姉さんに知られたらタダじゃ済まないだろうな、これ……）

「あはは……うちの父は、意外に抜けてる所がありますからね」
雅としては笑うしかない。

まさか他人の前で、実の父親を貶す訳にもいくまい。

「雅さんは、お父様と仲が良いんですね」

「どうでしょう？　あまり顔を合わせる事ありませんけど」

「いいえ、お父様の事を話されている雅さんの顔を見れば判ります。本当に楽しそうだ……きっと、お父様の事が好きなんでしょう」
小さい頃は、ずっと寂しい思いをした。

いつも自分の相手をしてくれるのは、美耶子か、お付の者だけだった。

父も母も、殆ど自分を構ってはくれなかった。

『大人の事情』を理解出来るようになるまでは……『美耶子との溝』が埋まるまでは、もしかしたら大蔵を憎んでさえいたかもしれない。

でも、今は……。

「そうですね。結構、好きなのかもしれません」

考えてみれば、大蔵は頭ごなしに雅を否定した事など無かった。何度も怒鳴られ、叱られはしたが、それはどれも雅が筋の通らない事をしたり、言ったりした時だけだ。

基本的には娘に甘い、優しい父なのだ……。

そういう事を考えられるくらいには、雅も大人になった。

「良い事ですよ、そう言えるのは。……ところで、どうでしょう？」

「何がですか？」

「僕は雅さんの相手として、相応しいと思われませんか？」

「へ？ あ……」

そうだ。

今はお見合いの真っ最中なのだという事をすっかり忘れていた。決して懐かしい相手との再会を喜ぶ席ではないのだ。

「いや、どうと言われても……」

「それとも……今、何方か想いを寄せる相手がおられるとか？」

「え！？」

いる……確かにいる。

恩人であり、そして親友の恋人でもある人。

恋焦がれている相手……自分と美耶子を一目で見分け、一人の間人として扱ってくれた、また別の意味でも特別な存在がいる……。

でも……。

「雅さんのお年頃なら、恋愛の一つもされていて当然ですから」

「……どうでしょうね」

恋愛とは言えないだろう……片想いとも違う気がする。

上手く表現出来ないが、そういったレベルの物とは違う気さえるのだ。

「では、僕が名乗りを上げても差し支えありませんか？」

「いや、それはちょっと……」

「何か問題が？」

「いえ、問題という訳じゃないんですけど……」

雅は、今日はずっと曖昧な答えしか返していない自分に気が付いた。

別に智仁に嫌われたとて何ら問題は無いのだが、何故かそれは嫌

なような気がしていた。

（アタシ全然変わってないんだ……。いつもこうやって、誰かが答えを出してくれるのを待ってるんだ……）

いい加減に生きている訳じゃない。

でも、自分自身で出した答えに縛り付けられるのも、何となく違うような気がしている。

いずれそうしなければいけないのだろうが、今はまだ自由でいたい……。

「すみません、普段の通りの言葉遣いでいいですか？ そうしないと、思った事がすんなり出て来ない気がするんです」

「ええ、構いませんよ。普段の雅さんを見せて下さい」

雅は目を閉じて一度深呼吸をすると、いつもの調子で話し出した。「アタシね、お見合いなんてするつもり全然無かったのよ。今日だって本当は出かける予定があったのに、お父さんにどうしてもって頼まれちゃってさ。アタシ、嫌だって断ったのに無理矢理こんな格好させられて……。参っちゃうわよ」

「それは災難でしたね」

「アタシまだ十六歳よ？ そんな若さで人生決められちゃったら敵わないわよ」

「ごもつともですね」

「御堂さんだって、まだ二十歳でしょ？ お見合いするよりも、恋愛した方がいいんじゃないかな？」

いつもの調子で話せた事で、自分としてはしっかりと断りの言葉を言えたつもりだった。

しかし……。

「恋愛ならしていますよ？」

「え？」

恋愛しているという事は好きな相手、もしくは交際している相手がいるという事だ。

それなら智仁も雅同様、この場には義理で来ているのだろうか？

雅はそう思ったのだが……。

「僕は雅さんに恋をしていますから」

「え？ え？」

「初めて逢ったあの時から、僕は貴女に恋をしています」

「あ、あの、でも……」

「僕にとつて、あれは初恋だったと思います。 おかしいでしょうか？」

「べ、別におかしいなんて事は無いけど……」

「初恋は実らない物だとよく言われますが、それは恋愛に関して未熟だという事が原因でしょう。 お互いに何をどうして良いのか解らないから、上手く事が運ばない。 互いを思い遣る事さえ、時には負担になってしまったりするから……でも、僕達はその辺も上手くやって行けると思うんです」

いつの間にか、会話の主導権が智仁に移ってしまっている。

「勿論、今すぐにと言うつもりはありません。 雅さんが大学を出てからでも結構です。 社会人としての経験もしたいと仰るなら、それも認めたいと思っています」

「いや、だから……ちょっと待ってください？」

「ええ、僕は待ちます。 でも、出来れば僕としても三十前には身を固めたいので」

「そっちの待つてじゃなくて！」

十八番のマシガントークも不発のままでは、智仁に押し切られてしまいそうだ。

雅は強引に話し始めた。

「御堂さんの気持ちは解ったけど、じゃあアタシの気持ちは？ そういう事は考えないの？」

「考えていますよ？ だから僕は待つと言っているんです」

「だって、今……」

「三十前には身を固めたいというだけですから、それまで雅さんには時間があります。 その間、僕とお付き合いをしながら、相互理

解を深めて行きましょうという事です」

「いや……あのですね……」

それでは何の解決にもならないではないかと雅は思った。
だいいち、先の事など判らないと言いながら、智仁は既に心を決めている様子だ。

雅にしてみれば、たまった物ではない。

相手を待たせたまま自分の好きなように生きるなどという事は、雅には出来そうもない。

「人の価値観は移ろいます。 誠実さとは無関係に」

「え……？」

「そう言えば、今日は出かける予定がおりだったとか。 ……もしかしたらデートでしたか？」

「デートと言うか……まあ、相手はそうは思わないだろうけどね」
「片想い……ですか？」

「そういう事は訊かない方がいいよ？ 相手によつては怒られるから」

普段通りに話す雅を見つめながら、智仁はクスリと笑った。

「何？」

「いや……不意に、あの頃の雅さんが重なったような気がしたものですから……」

「アタシって、そんなに変わってないのかなあ？ 結構素敵なレディになったつもりんだけど……」

「そうですね。 ……今はまだ答えが出せなくて当然でしょう」

そう言つと、智仁はスーツの内ポケットから名刺のような物を取り出し、雅に手渡した。

「これ……」

「僕のプライベート用の携帯電話の番号です。 雅さんにだけお教えしておきますから、その気になったらかけて下さい。 番号はずつと変えずにおきますから」

「え？ それって……」

プライベート用だと言いながら、雅以外には番号を教えていないと言う。

つまり、これは雅の為だけに用意された電話という事になる。

「そろそろ帰りましょうか。送ります」

雅はそのまま何も言えず、智仁の車に乗り込んだ……。

部屋の電話が鳴ると、雅は面倒臭さそうな顔をして電話の所まで歩き、通話ボタンを押した。

勿論それは直接かかって来た物ではなく、家の者が取り次いだ物である。

するとそこから聞こえて来たのは……。

『おお、雅！ どうだった？ 上手く断れたか？』

大蔵だ。

ずつと気にかかっていたのだろう、今にも受話器から顔が出て来そうなほどの勢いだ。

「ねえ、会社になかったでしょ、今どこから？」

『ん？ ああ、今はバーミングハムだ』

「何よ、今度はイギリスなの？」

『何を言つとる、アメリカだアメリカ。アトランタの近く……つて、そんな事はどうでもいい！ ちゃんと断ったのかと訊いとるんだっ！』

「さあ？ 気になるんだつたら一之瀬さんに訊いてみれば？ もしくは御堂さんに直接」

雅は受話器を持ったままベッドに横になると、ふわぁ……と大きな欠伸を一つした。

『またお前はそういう事を言う……あ、ところで美耶子は帰っておるか？』

「知らないわよ、アタシついさっき帰って来たばかりだもん。

姉さん、今日はデートなんでしょ？ ……泊まって来るんじゃない

のお？」

『何ーっ！？ ゆ、許さん！ それだけは何がどうあっても絶対に許さんからなあっ！』

「煩いなあ……そんな事アタシに言っただけじゃないでしょ？ ま、浦崎君は紳士だから優しくしてくれるだろうし、姉さんも安心して任せられるんじゃない？」

『な……なななな何を任せるとっ！？ わたしの目の黒い内は、そんな真似はさせんぞおーっ！』

「あゝもう、煩いってば！ アタシ疲れてるんだから、もう切るよ？」

そう言つと、雅は問答無用で電話を切ってしまった。

またかかつて来るといけないと考えたのか、大蔵からの電話は一切取り次がないようにと指示を出し、携帯電話の電源も切ってしまった。

「携帯電話……か」

手の中のそれを見つめて、雅はポツリと呟いた。

「待ってる……なんて言われてもねえ……」

雅はベッドから降りると机の前に立ち、そこに置かれている一枚の名刺を見た。

「……」

手に取り、もう一度じつと見てみる。

けれど……。

「叶わないかもしれない……多分叶わないだろうけど、アタシはアタシの感じたまま、思うままに好きになった人を追いかけてみたいんだ。 だから……」

一度……二度……。

細かく名刺を千切ると、そのまま屑籠へと静かに落とした。

「さよなら、アタシの初恋……」

後悔するだろうか……？

何年後……何十年後かに今日の事を思い出して、自分を馬鹿だと

思う日が来るのだろうか？

でも、それでもいいと雅は思った。

今は自分の信じた道を進もう。

例え、それが勝ち目の無い物だったとしても……。

雅が屑籠の中を見ながらそんな事を考えていると、部屋のドアをノックする音がして、顔を覗かせたのは……。

「雅、今帰りましたよ」

「あ、姉さん！ も……姉さんのせいで、今日は大変だったんだからね！」

雅はドアのところまでツカツカと歩いて行くと、美耶子の頬を両手で挟んで、グリグリと動かしながら言った。

柔らかい美耶子の頬が、それに合わせてプニプニと動く。

「右近と左近を同時に使わないでよ！ いざって時に困るでしょ！」
しかし、そんな事をされているというのに、

「今日は色々な場所を廻って来たんです。お天気にも恵まれましたし、とっても楽しかったですよ」

と、美耶子はまったく動じる様子が無いどころか、上機嫌のままだ。

どうやら今日一日、本当に楽しかったのだろう。

「人の話を聞きなさい！」

今度は頬を摘んで引っ張ってみた。

「そうそう、お土産に和菓子を買って来たんです。わたしの部屋で一緒に食べませんか？ 良いお茶もありますし、きつと美味しいですよ」

だが、やはり何の効果も無い……。

きつと幸せの絶頂にいる時、人はどんな苦痛にも耐えられるものなのだろう。

「だからあ！ アタシの話を聞きなさいっての！」

「そんなにプリプリすると小じわが増えますよ？ 一体何を怒っているのですか？」

「もういい……アタシも姉さんみたいになりたい……」

諦めて美耶子の頬から手を放し、雅は疲れたように顔を左右に振った。

こんな風にマイペースで生きられたら、どんなにか楽だろう……。

「なれますよ。だって、わたし達は双子ですもの」

「……やっぱりいいや。アタシはアタシで行く」

アタシは、アタシのままで……。

小さな奇跡

「ヒナ」

何の変哲も無い朝。

雛子と一緒に小学校へ登校する為、涼は佐伯家を訪れた。
だが……。

「おはよう、涼君」

玄関から出て来たのは、雛子の母、明日美であった。

涼は、いつも優しい雰囲気をもった明日美の事が大好きだ。
だが、このところずっとその優しさには陰りが見えた。

子供である涼には判らなかったが、何となく様子が違うな……と
いくらいには感じていた。

「おはよー、おばさん。ヒナは？」

「ごめんね、涼君。雛子、今日もお布団から出て来ないのよ」

ここ数日、雛子は学校へ行っていないかった。

そればかりか、家から一步も外へ出ないのだ。

普段は雛子と一緒に登下校するのを恥ずかしがって避けている涼
が迎えに来るのは、そういう理由からなのだ。

それに、あの日から雛子は……。

「どうして？」

「それが、小母さんにも解らないの」

「……じゃあ、一人で行くね？」

「はい、行つてらっしゃい。気を付けてね？」

「うん！ いってきまーす！」

ガチャガチャとランドセルを鳴らしながら、涼は走って学校へと
向かった。

明日美は涼の後姿を見送ると、小さく溜息を吐きながら玄関のド
アを閉めた。

そのまま雛子の部屋へと向かい、布団を被ったままの雛子に声を

かける。

「雛子」

明日美が呼びかけても、雛子は返事をしない。

いや……したくても出来ないのだ。

何故なら、今の雛子は喋る事が出来なかったから……。

「どうしたの？ 学校好きだったでしょ？ 涼君、お迎えに来てくれたのに」

「……」

「学校で何かあったの？」

「……」

しかし、雛子は布団から顔を出さず、明日美の問いかけにも何も反応をしない。

あまりしつこく問い詰めるのも逆効果かと、明日美は諦めて部屋を出る事にした。

階段を下りて居間へ入ると、明日美はソファに腰を下ろし、深い溜息を吐いた。

雛子がこうなってしまったのには、自分にも責任の一端がある。

明日美は、あの日からずっと、そう考えていた。

保がこの世を去った、あの夏祭りの夜からずっと……。

「あれから、もう一年が経つのね……」

何故、自分は雛子を保だけに任せてしまったのか。

もしも自分か夫が一緒に行っていたなら、保が事故に遭うような事にはならなかった筈だ。

仕事があった事など、言い訳にもならない。

現に、こうして自分が休んでいたって、何も変わらずに会社は運営されているし、新薬の研究だって進んでいるではないか。

勿論、夏祭りに行くからといって休暇など取れる訳もないが、家庭を犠牲にしてまで働く理由が、果たしてあったのだろうかと明日美は考えているのだ。

「環さん……」

環が笑顔で接してくれる度、明日美は罪悪感にも似た気持ちで、胸が締め付けられるような思いに駆られる。

もし自分が逆の立場だったら、きっとあんな風には笑えないだろう。

相手を恨んで、罵って……。

「……やめよう」

そこまで考えて、明日美は首を強く左右に振り、気持ちを切り替えようとした。

こんな事を考えていたって、雛子の声が戻って来る訳でもないのだ。

ただ、雛子の身体自体に障害がある訳ではない。

要は心の問題なのだから、極力普段通りの生活を続ける事が肝要なのだ。担当医は言っていた。

「普段通りの生活……か」

しかしそれは、雛子を孤独の中に戻す事を意味する。

早朝から深夜まで、一日中たった一人で家の中にいる……そんな生活をさせる事を意味するのだ。

明日美は両手で顔を覆い、再び深い溜息を吐いた……。

涼は学校から帰ると、すぐに佐伯家を訪れた。

そして二階に駆け上がり、雛子の部屋へと入る。

毎日こうして雛子の部屋へ行く事は、既に涼の日課になっているのだ。

その両手には明日美から貰ったケーキとジュースがある。

「ヒナ、まだ寝てんのか？ ネボすけだなあ」

涼に言われると、眠っていない事をアピールするように、雛子は掛け布団を少しずらして、少々不機嫌そうな顔を覗かせた。

ネボすけの涼に言われた事が悔しいのだろう。

「またそんな顔する。ブスになっちゃうぞ？」

ケラケラ笑いながら言う涼に対し、雛子はプウ！　と頬を膨らませ、再び布団を被ってしまった。

「ほら、今日も練習するんだから、顔出せよ」

今まで野球やサッカーに費やしていた時間（まあ、大部分はケン力だが……）を、涼は全て雛子の為に使っている。

それが解る雛子は被っていた布団を外し、ベッドの縁に座り直した。

涼は雛子の机から椅子を引っ張って来るとそこへ座り、コホンと軽く咳払いをしてから、雛子に向かって大きく口を開け……。

「じゃあ行くぞ。『あ』」

「……」

雛子は涼の口の動きを真似て、自分も口を開け、発音しようとする。

だが、やはり雛子の口からは何の音も出て来ない。

「そうそう、そんな感じ。『い』」

「……」

「うん、昨日よりもいいよ。『う』」

「……」

涼は雛子の動き一つ一つにコメントを付けながら練習を続ける。

実際には何の意味も無いのかもしれない。

だが、雛子が自ら声を出そうと努力する姿勢を見せるのは、こうして涼と一緒にいる時だけなのだ。

雛子にとって、父よりも、母よりも、涼の存在が大きいのだ。

「……今日はこれくらいにしよう。あんまりやると疲れちゃうからね」

短気な涼が癇癪も起こさず、五十音の最後までニコニコしながら終えた。

これは、殆ど奇跡に近いような出来事だ。

雛子の発声練習に付き合う事で、涼にも若干の成長が見られるのかもしれない。

涼にとつても、雛子は大事な存在なのだろう事を窺わせる。

「なあヒナ、何で学校に行かないんだ？」

「……」

「誰かにイジメられるのか？ だったら俺に言えよ。 そんな奴、俺がブつとばしてやるからさ！」

確かに雛子が喋れなくなつてからというもの、クラスの女子の一部から陰湿なイジメを受けている。

最初はクラスの間みんなも同情してくれていたのだが、さすがに一年もの長期に渡ると、徐々にそれを疎ましく感じる者が出て来るようになった。

だが、雛子が学校へ行かないのは、それが直接の原因ではなかった。

自分が喋れないのがいけない……。

自分がシツカリしていないのがいけない……。

雛子は、自分が他人に迷惑ばかりかけているのが嫌で、自分の存在そのものが嫌で、何もかもが嫌になつているのだ。

両親が暗く沈んでいるのも自分のせい……。

涼が遊ぶ時間を犠牲にしているのも自分のせい……。

保が死んだのも自分のせい……。

生まれて初めて見た環の涙……それも自分が流させた物。

生まれて初めて見た涼の涙……それを流させたのは自分。

大好きな人を苦しめ、悲しませたのは自分……。

雛子は、そうやって自分の心を切り付け続けているのだ。

「あ、さっきおばさんがケーキくれたんだっけ。 なあ、一緒に食べようぜ」

でも、こうして涼が毎日来てくれる。

その事が雛子の心を軽くしてくれるのも事実だった。

だがしかし、それを嬉しく感じる心を、雛子はまた恨めしくも思う。

結局、雛子は心の中で問題を処理し切れないのだ。

「……ヒナはさ、大きくなったら何になりたいんだっけ？」

雛子が考え込んでいると、不意に涼が言った。

思い切りケーキを頬張っていた為、涼の口の周りにはクリームが
たくさん付いている。

「……？」

将来の夢……いつか涼には教えてあった筈なのにと、雛子は首を
傾げて涼を見た。

「何だっけ……お嫁さんじゃなくて……あ、お母さんか？」

雛子はコクリと頷いた。

なりたい職業もたくさんある。

けれど、雛子が一番になりたいのは何の変哲も無い、ごく普通のお
母さん……優しい母親になりたいと思っているのだ。

「でさ、この間俺のお母さんが言ってたんだけど、お母さんになる
には、お父さんよりも強くないとダメなんだって」

「……？」

「お母さんは『命』を産むんだから、負けちゃダメなんだって。
今度ここに来た時、ヒナに教えてあげなさいって言われてたんだ」

「……」

「俺にはよく解ないけど、確かに俺のお母さん、強いもんな」

涼は、そう言って頭を掻きながら笑った。

雛子にも、涼の口を借りた環の言葉の意味はよく解らなかった。

けれど……何となく、絡まった心の中の鎖が一つ外れたような気
がした。

翌朝、宇佐奈家の玄関の前には、ランドセルを背負った雛子の姿
があった。

少し背伸びをしてインターフォンを押すと、応対に出た環に向か
って雛子はニツコリと微笑んだ。

「あら！ おはよう雛子ちゃん。相変わらず可愛いわね」

環は雛子の元へ歩み寄ると、いきなり抱きしめて頬擦りを始めた。別に珍しい光景ではない。

環は雛子に会つと、必ずこれをする。

「も……いっそ、うちの子になっちゃいなさい！」

雛子は環に抱きしめられても、いつもなすがままになっている。

それは、環の温もりが心地良いのと、安心出来るような匂いのせいだ。

「……お母さん、何してるの？」

ランドセルを手に持ち、玄関まで出て来た涼は、相変わらずの環の行動に渋い顔をしている。

「あら、我が愚息。これは朝のご挨拶よ」

「俺、そんなのされた事無いけど？」

「だって、雛子ちゃん専用のご挨拶だもん」

「……」

「さあ！ 今日も元気に勉学に励んでらっしゃい！」

雛子を開放した環は、涼の頭をペシ！ と軽く叩き、満面の笑顔で二人を送り出した。

どうやら、これが涼専用のご挨拶らしい……。

「まったくもう……ヒナは、あんなお母さんになるなよな？」

暫く歩いた所で、環に声が聞こえない事を確認してから、涼は頭を摩りながら言った。

それを聞いて、雛子は笑った。

自分が目標にしている母親像が環だと知ったら、涼はどんな顔をするだろう？ と思いながら。

「……あれ？ 雛子じゃん」

「あ、ホントだ」

「宇佐奈も一緒だ……珍しい」

通学路の途中にある大通りの手前で、三人の女の子が涼と雛子に

気付いて、二人を見ている。

信号待ちをしているので、二人の周りには何人かの人も立っているのだが、子供は涼達だけだ。

「雛子ってさあ、な〜んかウジウジしてて、見てるとムかつくんだよね」

「そうそう。せつかく休むようになって、せいせいしてたのに」「いいじゃん。また休むようにしちゃえば」

三人は嫌な笑みを浮かべ、涼達に近付いて行った。

「ひ〜なこ」

三人の内の一人が雛子のランドセルに凭れ掛かるようにして、後ろから押し掛かった。

一瞬、雛子はビク！　　として後ろを振り返り、その後、急にオドオドした様子で下を向いてしまった。

「ずっと休んでたから心配してたんだよ〜？」

「どうしたのお？　風邪でもひいてたのお〜？」

「お前ら、ヒナの友達か？」

「そうよ。　ねえ雛子、アタシ達と一緒に行こうよ。　女同士の方がいいでしょ？」

「はいはい、アンタは一人で行きなよ」

そう言うと、女の子達はグイグイと涼を歩道の端へと押しやった。

「な、何だよ、押すなよ！　危ないだろ！」

「男のくせに何ビクビクしてんのよ。　車なんて来てないじゃん」

「何こいつ？　超ヘタレ〜」

普段、男子相手には無敵の強さを誇る涼も、相手が女子では殴る訳にもいかない。

『自分よりも弱い者に暴力を振るうのは、卑怯者のする事だ！』

と、生前の保に徹底的に教育されたからである。

涼も自分自身そう思っている為、自分よりも強い者が、多人数相手（それもやはり男限定）　以外には、決して力を振るったりはしない。

女の子達は涼が大人しくしているのをいい事に、調子に乗って更に力を込めて涼を車道へと押し出そうとする。

「よせつてば！」

車道……そこは、保が命を失った場所。

例え違う道であったとしても、涼にとってそこは父を殺された場所なのだ。

しかも自分の目の前で……。

幼い涼には、そこは『怖い場所』なのだ。

「あ、車が来たっ！」

こちらに走って来る車を見つけた一人の女の子が、涼の傍でわざと大きな声を出した。

それは、もっと涼を脅かしてやろうという、些細な悪戯心からの事だった。

だが、その一言は、涼に対して予想以上の効果をもたらしてしまった。

目の前で車に跳ね上げられ、人形のように空中を舞う保の姿が涼の記憶の中でフラッシュバックすると、涼の身体は硬直し、足がもつれたようになり、そのまま車道へヨタヨタした足取りで出てしまった。

それに合わせたように信号が青から黄色へと変わり、赤になる前に交差点を通過しようとする車が加速した。

「え……？」

誰もが、それを見ても何も出来なかった。

目の前で何が起こっているのかは理解出来ても……瞬時に何をすべきかは解っても、身体が動かないのだ。

と、その時、

「涼ちゃん、危ないっ！」

聞き覚えのある声と共に、小さな手が強い力で涼の手を掴み、歩道へと引き戻した。

次の瞬間、今まさに涼が出ていた場所を、一台の車が猛スピード

で駆け抜けて行った……。

「……ヒナ？」

倒れこんだ涼が自分の下に見たのは、大きく目を見開いた雛子の顔だった。

「怪我してない？ 痛い所、無い？」

「ヒナ、お前……」

涼が立ち上がり、雛子の手を引いて立たせると、雛子はキツと振り返り、

「どうしてこんな事するのっ！ 危ないって判ってるのにっ！」
猛然と女の子達に食って掛かって行った。

「え？ あ、あの……それは……」

「もしも涼ちゃんに何かあったら、絶対に赦さないからっ！」

「べ、別に何も無かったんだから、いいじゃない……」

「謝りなさいよっ！ 謝れっ！」

今の今まで喋れない相手と高をくくってイジメていたのに、それが突然、物凄い勢いで挑みかかって来たものだから、女の子達は三人とも対応出来ないでいる。

「い、行こう！」

「うん！」

「あ、待てえっ！ ちゃんと謝れっ！」

リーダー格の女の子が走り出すと、残る二人も後を追って走り出す。

その背中に向かって雛子は更に文句を言うが、女の子達は振り返りもせず、そのまま学校の方向へと走り去ってしまった。

尚もそれを追いかけようとする雛子の腕を後ろから掴み、

「ヒナ……声……」

涼は怒る事も忘れ、ポカンとした様子で雛子に話しかけた。

「え？」

「だから、お前、今喋ってるって……」

「あ……」

今まで自分でも気付いていなかったのか、涼に言われて初めて自分が喋っている事を認識した雛子は、信じられないといった顔をして、『あーあー』と、確かめるように何度も声を出した。

「声、出た……」

「出たな」

「……涼ちゃん！ ヒナ、お家に帰る！」

「え？ だって学校……」

「お母さんとお話するの！ たくさんお話するの！」

一年間……ずっと話せなかった事が山ほどある。

親と一緒にいる事自体が殆ど無い雛子にとって、この一年間に無くしてしまった機会は、あまりにも多い。

明日美が家にいられるのは、自分が喋れない間だけ……その時間は、今日で終わってしまうのだ。

「……じゃあ、俺も一緒に行くよ」

あまりにも雛子が興奮してしまっているので、涼は心配になったのだ。

もしもこれで再び喋れないような事になったら、雛子はきつと立ち直れない……そう思って……。

だが、そんな心配は杞憂に終り、雛子は明日美に対し、何時間も捲し立てるように喋り続けた。

いつも大人しい雛子の姿は、そこからは想像出来ないくらいだった。

そして今日ばかりは、この涼のルール違反に関して、環は何も言わなかった。

それはまだ残暑の厳しい、九月のある日の出来事だった……。

Virtual Wars (前書き)

このお話は第一部で涼達が海に行った時の物です。

Virtual Wars

「雅、いるんでしょ？ 返事しなさいよ」

利恵は雅の部屋のドアをしきりにノックするのだが、当の雅からは何のリアクションも無い。

時々物音や声があるので、中にいるのは間違い無いのだが……。

「ねえ、雅ってば！」

ちよつと怒ったように再び声をかけると、

『キッ！ また負けたあつ！ もうっ！ 利恵のせいだからね！』
部屋の中から雅も怒ったように答えた。

「何言ってるんだかこの子は……開けるわよ？」

雅の返事も待たずに利恵が部屋のドアを開けると、雅はノートPCの前で頭を掻きまわっているところだった。

どうやら相当イライラしているようだ。

「……何してるの？」

「見て判んないの……？」

「判る訳無いでしょ？」

利恵は苦笑しながら雅に近付き、その背後から雅のPCを覗き込んだ。

するとモニターには三つに分割された画面構成があつて、向かつて左側には大きくゲーム画面が。

その下には小さくアイテムを表示する画面、そして向かつて右側に幾つもの会話が表示されている画面があつた。

何の会話なのか利恵にはサッパリ解らなかったが、それを目で追つていくと一番最後の行には、

『十年早くてよ』

というメッセージが表示されていた。

「何これ」

「チャット画面よ」

「いや、そうじゃなくて……」

「ぬぬぬぬ……もう一回勝負よ！ 今度は負けないんだから！」
雅が再戦メッセージを打ち込むと、それはそのままチャット画面へと反映される。

つまり、相手にもそれがリアルタイムで伝わるといふ事だ。

どうやら相手も受けて立つようで、画面全体が薄暗くなると同時にチャット画面が消え、何やら勇ましいBGMが鳴り始めた。

「で、何をそんなに夢中になってるわけ？」

「オンライン対戦！」

「なあにい……あんた海に来てまでそんな事してんのぉ？」

利恵は呆れ顔で言った。

雅がゲーム好きなのは知っていたが、いくら夜だとは言え、せっかく海に来ているというのに、わざわざゲームなどしなくても……
と思っっているのだ。

「呆れた。ねえ、もうやめにしてお風呂行こうよ」

「まだ戦いは終わってないわ！」

「だから終わりにしなさいって言ってるの」

「イヤ！ アタシ、このゲームで掃部関君以外に負けた事無かったのよ！？ それなのに……それなのにいいい……！」

「負けたの？」

「……十五連敗中」

利恵が画面を覗き込むと、プレイした事の無い利恵にさえ、雅が劣勢に立っているのが判るほど圧倒的な差がついている。

まあ、雅のキャラの体力ゲージが少ないのだから、誰が見ても判るのだが……。

「相手の人、相当強いみたいね？」

「どんな奴よ、アタシをここまで追い込むなんて……あつ！」

雅が焦りの色を浮かべたと同時に相手の放った弾が当り、雅のキヤラは血飛沫を上げて倒れた。

残りゲージはゼロ……雅の負けである。

「うつきゃーっ！　また負けたああーっ！」

「グロいゲーム……さあ、もう終わりにしなよ」

「ヤダヤダヤダ！　勝つまでやるううっ！」

「ダ〜メツ！　はい、お風呂に入りましょ！」

ダダをこねる雅を引き摺るようにして、利恵はお風呂場へと向かって歩き出した。

「雅ちゃん、ゲームなんてするんだ？」

「ま〜、ムキになっちゃって大変よ」

先に浴場に来ていた雛子は、利恵から話を聞いて意外そうな顔をした。

茶道、華道といった、いわば『静』の美耶子に対して、身体を動かす事の好きな雅が『動』であるとの認識なのだが、それが身体を使わないゲームに興じているとは思っていなかったのだ。

雅がやるなら、ダンスゲームなどの身体を使う種類の物だとばかり思っていたのだが……。

「真君の影響かな？」

「真君も好きだからねえ、ゲーム」

何度か真一郎の部屋へ遊びに行った事があるが、行く度にソフトが増えていて、バイト代を何に使っているのか問い質したくなったものだ。

その時、雅は随分熱心に色々と真一郎に質問していた。

元々好きではあったのだろうか、そのせいで更に深みにはまったとも思える……。

「負けた……負けた……負けた……」

雅は湯船に浸かりながら、まだ悔しそうにしている。

相当の負けず嫌いだかと、利恵は苦笑した。

「ゲームってそんなに面白いのかしらねえ？」

「う〜ん……わたしはした事無いから解ないけど、夢中になって

る人って多いよね」

「単なる時間の浪費にしか思えないけどなあ？」

モニタに向かって延々と指を動かしているくらいなら、その時間を使って走った方がいい。

だいいち雅のように瞬きもしないで画面を見つめていたら、あっという間に視力が落ちてしまいそうだ。

「あーっ！ 思い出しただけで悔しいーっ！」

雅はザバツ！ と湯船から立ち上がると、大股で歩きながら浴室を出て行った。

「……お下品」

「どこ行くんだろ？」

「どうせまたネット対戦とやらをするんでしょ？ もう何言っても無駄みたいだから放つところ」

「そんなに面白いなら、わたしもやらせてもらおうかな？」

「……え？」

雛子が対戦ゲーム？

そりゃあパズルやボードゲームみたいな物なら、雛子のような子がやっても別におかしくはない。

それどころか、雛子も結構負けず嫌いな部分があるから意外とハマるかも知れない。

けれど……。

「雅のアレは勧められないなあ……」

「そうなの？」

どうしても、雛子が夢中になって対戦相手のキャラを撃ち殺す場面が想像出来ない。

と言うより、そうなってしまうたら嫌だし、そんな事になったら『何で止めてくれなかったんだ！』と、涼や環に恨まれそうだ。

「ヒナちゃんは、ヒナちゃんのままできてね？」

「え？ う、うん……」

訳も解らず、とりあえず頷く雛子であった。

「おはよおおお……」

翌朝、目の下に隈を作った雅が食堂に入って来ると、先に食事をしていた一同はその手が止まった。

「どしたの？ 雅ちゃん」

真一郎は、隣に座ってグッタリする雅に問い掛けた。

「悔しくて眠れなかったのお……」

「悔しい？ 何で？」

「ほら、話したでしょ？ 例の対戦……ゲーム」

モソモソとパンを干切って口に入れながら言う雅を、

「食べながら喋るものではありません。 お行儀が悪いですよ？」

と、隣の席で美耶子が注意するのだが、雅の頭の中は対戦ゲームの事でいっぱいなのか、全くノーマークアクションである。

「あんた、まさか夜通しやってたんじゃないでしょうね？」

向かいの席から、利恵が声をかけた。

「違う……やろうと思って待ってたのに、相手が入って来なかったのお……」

どうやら肝心の相手が、ゲームサーバにアクセスして来なかったらしい。

それを待っている内に夜が明けてしまったのだと言って、雅は眠そうな目を瞬かせた。

「勝ち逃げなんて許さないんだからあ……今夜、絶対にリベンジしてやるう！」

「今夜も来なかったら？」

「来るまで電腦世界に留まってるっ！」

「ゲームするのって大変なんだあ……」

何も解っていない雛子が、利恵の隣で呟いた。

やはり、雛子はゲームには向いていないようだ。

「おい真、何だよ、その対戦ゲームって」

「お前、知らねえのか？ 何とも時代に取り残されてるねえ……ネットを使って世界中の奴と対戦出来るんだよ。そのくらい、今時、幼稚園のチビから爺ちゃん婆ちゃんまで知ってるぜ？」

「つつても、たかがゲームだろ？ じつと座ったままコチヨコチヨやってるなんて、俺の性には合いそうもねえな」

「そう言う奴に限って、意外にハマったりすんだぜ？ それに、ゲームだけって訳でもねえんだ。色んな情報交換をしたり、コミュニケーションツールとしての役割もある。使い方さえ間違えなきゃ、そんなに馬鹿にしたもんでもねえぞ？」

「ふうん……面白えのか？」

「実際にやってみなきゃ解んねえだろうな。面白いか面白くないかなんて、人伝に聞いても意味ねえだろ。判断するのは自分なんだからよ」

成る程、確かにそうだ。

涼は食事を続けつつ、以前に見た真一郎のゲーム画面を思い出していた。

今日の浜茶屋は暇だ。

客引きのポイントゲッターである美耶子は病院で琢磨に付き切りだし、真一郎は、お婆さんの様子を見に行つてまだ帰つて来ていないし、その次に控える雅は……。

「寝不足で炎天下になんか立ったら死んじゃう……」

と、店の中から一步も出て来ないでいる。

それで中の事をやっているのかと思えば、ダラダラしていてちつとも役に立っていない。

「ホントに……うちの娘と来たら……！」

「利恵ちゃん、わたしも呼び込み手伝うよ」

「ダメよ。 ヒナちゃんが外に出てたら、料理が間に合わなくなっちゃうもん」

お客さんが少ないとは言え、ゼロではないのだから注文は入る。琢磨がいればともかく、料理に不慣れな利恵達だけでは、それを捌き切れないだろう。

「俺が出ようか？」

涼がそう提案すると、即座に利恵に却下された。

「何で？」

「今以上にお客さんが来なくなりそうだから」

「……可愛い事言っね、お前」

「でしょう？ 自信あるもん」

「真君が帰って来るまで、待つしかないね」

「それより雅よ。 まったくもう……」

いつの間にやら厨房の作業台に突っ伏し、扇風機の風を受けて眠っている雅を見て、利恵は頬をピクピクと引き攣らせた。

「今の内に別荘に戻って、パソコン叩き壊しちゃおうかしら……」

「そ、そんな事しちゃ駄目だよ利恵ちゃん！ 雅ちゃん、あのパソコン大切にしてるんだから！」

金持ちの娘にしては、雅は物を大事にするタイプだ。

特に今メイン機として使っているパソコンには愛着があるらしく、新しい機種がどんどん出るというのに向に買い換えようとは思っていない。

色々な部品を買い足してはいるようだが、それでも本体はそのままである。

「冗談よ。 いくらわたしでも、人の物を壊したりはしないって」「……そうだったか？」

涼の部屋でエッチな本を見つけた時、利恵は問答無用で引き裂いた事がある。

それも何冊も……。

「あれって真のだったんだよな。 プレミア本なのって言って、

あいつ泣いてなかったか？」

「あんな物を涼の部屋に置いておくのが悪いの！ 大事な物なら金庫にでもしまっとけてのよ」

「出たな、自分ルール……」

「何よ。なんか文句ある？」

「ほら二人とも！ いつまでも話してないで、仕事仕事！」

雛子に言われ、二人は今日の仕事に取り掛かる。

だが、仕事をしながらも、涼は雅の様子が気になっていた。

「一睡もしないでいるなんて……ゲームってそんなに面白いのか？」

結局そのまま雅は起きる事も無く、今日の浜茶屋の売り上げはそこそこ……よりも、ちよつと低かった。

爽やかな風が吹くと、部屋のカーテンと共に長い髪が揺れた。

美奈は細い指で髪の乱れを整えると、テーブル上のPCに視線を移した。

「あら……この方、また私に挑むおつもりですね？」

チャット画面には『今日は絶対に勝つつ！』と表示されている。

どうやら相手は、やる気満々のようである。

「いいでしょう……。身の程を弁えないという事が、どのような結果を招くか……教えて差し上げますわっ！」

しなやかな指が目にも留まらぬ速さでキーを叩くと、アッと言う間に敵のキャラが蜂の巣にされて消え去った。

文字通りの瞬殺である。

「ですから先日も申しましたでしょ？ 私に勝とうだなんて十年早くてよ……と。ふふ」

美奈が余裕の表情を浮かべて紅茶を口に運ぶと、瞬殺されたのが余程悔しかったのか、再戦を求めるメッセージがモニターに表示さ

れた。

それを見た美奈は小さく溜息をつく、少し目を伏せて軽く首を左右に振った。

「困った方ね。 何度やっても、結果は同じですのに……」

紅茶の入ったカップをテーブルに置き、美奈がもう一度キーを叩こうとすると、少し慌てた感じのノックの音がしてドアが開いた。

「美奈、そろそろ……またネット対戦？ 早くしないと遅れるわよ？」

「あら、紫。 もう一戦するくらいの余裕ならありますでしょ？ 身の程知らずの愚か者には、思い知らせておかないと」

「ダメよ！ もう……そんな気持ち悪いゲームのどこが面白いのかしら」

紫は眉を顰めてモニタ画面を見遣った。

「敵を倒す爽快感は、何物にも代え難い物があつてよ？ 紫もやってごらんさないな」

「わたしはパズルやボードゲームの方がいいわ。 ほら早く！ 今日はプレゼンの講義もあるんだから！」

「仕方ありませんわね……敵に背を向けるのは私の趣味ではないのですけれど」

美奈は PC の電源を落すと、椅子から立ち上がった。

「そうだ、今度は真君と対戦してみようかしら？ 彼なら、きっと私を満足させてくれる筈ですもの。 早速メールを打っておかないと」

「美奈ったら！ 掃部関君の影響受け過ぎよっ！」

帰ったら真一郎によく言っておこう。

紫は、そう心に決めた。

「っ、強ええ……何者だ？」

真一郎は雅のキャラが瞬きする間に倒されたのを見て、我が目を疑った。

「ね？　ね？　ハンパじゃないでしょ？」

「こりゃあ、俺でも勝てるかどうか怪しいな……」

今までこのゲームで無敗を誇る真一郎も、今の様子に少々臆している。

かなり本気でかからないと、雅の二の舞を踏む事になるだろう。

「えゝ！　そんな事言わないでやってよおっ！　掃部関君、アタシの師匠なんだからあ！」

「あ……相手が落ちたぞ？」

「ええっ！？　あーっ！　また勝ち逃げしたあっ！」

雅は地団駄を踏んで悔しがすが、相手がいなくなってしまうとはどうしようもない。

ゲームセンターと違って、相手を呼び止める訳にもいかないのだ。その時、真一郎の携帯にメールが入った。

「お？　美奈さんからだ。えゝっと……何々？　『真君に教えて頂いたゲーム、とても楽しくてよ。今度、対戦しましょうね』」

か。　おおゝ、いいね。　美奈さん、少しは上達したかな？　早速レスを……っと」

「悔しいいいーっ！　掃部関君、練習に付き合ってよお！」

「仕方ない、今夜は掃部関流奥義を授けてやろう。　ちよっちコマンド入力複雑だけど、気合い入れて覚えるように」

「はい！　師匠、お願いしますっ！」

「よお！　ネット対戦って、どんな感じなんだ？　ちよっと俺にもやらせてくれよ」

今朝の会話で興味を持ったらしく、涼も雅の部屋へやって来た。こうして真一郎の弟子は、どんどん増殖して行くのだろう……。

桜舞う頃

公園……そこは子供達の社交場である。

見知らぬ子との出会いがあったり、お馴染みの顔との交流を深めたりする大事な場所なのだ。

だが、時にはトラブルもあったりして、その解決方法を学ぶ場でもあるのだが……。

「返してえ！ ヒナのおサルさん、返してよお！」

桜の咲く公園で、雛子が必死になっている。

何度も転んだのか服は砂で汚れてしまっているが、そんな事は気にせず、自分よりも大きな子に飛び掛る。

「何だよお！ ちょっと借りるだけって言ってるだろ！」

「いいじゃんか。 お前んち金持ちなんだから、また新しいの買ってもらえよ」

「そのおサルさんはダメなのお！ お願いだから返してえ！」

誕生日のプレゼントとして貰った大事なサルのヌイグルミ。

環に連れられて買い物へ行った際、おもちゃ屋さんのショウウィンドウに飾られていたのを見て、一目で気に入った。

涼がなければの小遣いをはたいて買ってくれたこれだけは、何がどうあっても盗られる訳にはいかないのだ。

「今日はあいつがいけないから助けてもらえないな。 ……ほくら、

もう泣くぞ？ こいつ、いつつもすぐ泣くんだけ」

「泣け！ 泣け！」

「……泣かないもん！」

雛子は泣きそうになりながらも懸命にそれを堪え、悪ガキ達に向かって行く。

しかし悪ガキ達は雛子の頭上でサルのヌイグルミを投げ合い、雛子をからかい続ける。

小さな雛子では、それを途中で奪い取る事など出来ないのだ。

するとそこへ……。

「ひっさあつ！ はいばあああ……キイイック！」

と、自分よりも大きな子に、背後から飛び蹴りをした男の子がいた。

蹴りは見事に背中に命中し、当たった悪ガキは前のめりに倒れた。

「何だよ、お前っ！」

その傍にいた他の二人はビックリして飛び退いたが、すぐに怒った顔をして男の子に向かって言った。

「女の子をイジめるような悪党に名乗る名前など無いっ！ だが、敢えて名乗るとするなら……愛と正義と真実の人とでも言っておこうか！」

「いって……ちくしょう！」

「やっちゃんえ！」

当然、すぐに三対一の喧嘩に発展する。

だが子供の喧嘩とは言え、ムキになって殴り合う分、その勢いは大人と変わらない。

そして、やはり三人の方が有利だ。

多少の反撃はするものの、飛び蹴りをした男の子は一方的にやられ始めた。

「やめてー！ やめてよお！」

雛子は慌てて止めに入ろうとするのだが、

「危ないから近くに来ちゃダメ！ 怪我するから離れてて！」

飛び蹴りをした男の子は、雛子に向かって怒鳴った。

「でも……でもお……」

駄目と言われても、そのまま黙って見ている事など出来ない。

かと言って加勢する事も出来ず、雛子がオロオロしていると……。

「待て待て待てええーっ！」
そこへまた一人、今度は小さな男の子が木の枝を持ってやって来た。

「三人がかりとは卑怯千万！ この僕が成敗してくれる！ そこへ

直れっ！」

「何だお前、バカじゃないか？」

「時代劇でも観てる、ばっか！」

「おのれえ……この僕を愚弄したな！ 覚悟！」

この援軍は強かった。

何しろ、たかが木の枝といっても男の子はそれを自在に操り、四方から打ち下ろすのだから相手はたまったものではない。

それも、ただ闇雲に振り回しているのではなく、相手の手や背中に確実にヒットさせているのだ。

その様子を見て、雛子はいつか保と一緒に観た時代劇の殺陣を思い出していた。

「いててて！ 武器を使うなんて卑怯だぞ、お前！」

「お前が言っなっ！ 三人がかりで女の子をイジメてたくせにっ！」

「何っ！？ 貴様ら、そんな卑劣な真似をしていたのか！ ならば容赦はせん……正義の刃を受けてみよ！ たああっ！」

「くそ……これでもくらえ！」

悪ガキの一人が枝を持った男の子に向かって砂をかけた！

運悪くそれが目に入ったらしく、途端に男の子の動きが鈍くなった。

「うわ！ ……くそ、何も見えない！」

「大丈夫か！？ ちくしょお……ほんとに汚い奴だな！」

「へん！ 勝てばいっんだよ！」

形勢が逆転し、雛子を助けに入った二人はいい様にやられてしまう。

今から保を呼びに行っても、戻って来る頃には男の子達はのされてしまっているだろう。

「やめてええ……やめてよおお……ヒック……ヒック……」

とうとう雛子は泣き出してしまった。

そして……。

「うわああーん！ 涼ちゃああーん！」

雛子が助けを求めて心の底から叫ぶと……遠くに砂煙が上がるのが見えた。

やがて、それはどんどん大きくなり、遂には公園へと雪崩れ込んで来た！

「ヒナを泣かしたのはああ……どいつだああーっ！」

怒号と共に現れたのは、ボサボサ頭の男の子。

だが、その顔を見た途端、今まで強気だった悪ガキ達の顔色が変わった。

「うわああっ！ 涼だ！」

「逃げろっ！」

「逃がすか馬鹿野郎ーっ！」

涼の足の速さと強さはハンパでは無かった。

逃げる三人をあつと言う間に捕まえると、次々に殴り、蹴り、とうとう三人共泣かしてしまった。

「へん！ この次にヒナを泣かしたら、こんなもんじゃすまないからな！」

「こらあっ！」

涼が鼻の下を擦って得意になっていると、大人がやって来て涼の頭にゲンコツを落とした。

……涼の父、保である。

「いてーっ！ 何すんだよお！」

「何すんだじゃねえっ！ 説教の途中で逃げ出しやがって！ それで何するかと思えば、また喧嘩かつ！ てめえは何で怒られてたのか判ってねえみてえだな、ああ？」

「だ、だって今、ヒナが泣いてたから……」

「言い訳すんじゃない！ てめえは罰として晩飯抜きだつ！ さあ来い！ 今から説教再開&追加だつ！」

「お、おじちゃん！ あのね、涼ちゃんは悪くな……」

「あらら、随分汚しちゃったなあ……あとでおじちゃん家においで。おばちゃんに綺麗にしておらうね？」

おずおずと雛子が話しかけると、険しかった顔を急に綻ばせ、保は雛子の目線に合わせて、しゃがんで話し始めた。

声まで変わって、まるでジキルとハイドの如き変貌振りである。

「う、うん、ありがとう……。あのね、おじちゃん」

「お？ おサルさんも汚れちゃって、可愛そうに……。よし！
ついでにその子も綺麗にしてもらおう」

「あ、あのね……」

「ごめんね。おじちゃんは、これからこのバカたれに、お説教しないといけないんだ。お話しは、またあとでね。オラ！ とつと来やがれっ！」

「わああーっ！ 放せえー！ 馬鹿野郎おー！ クソじじいー！」

「ほお……よく言った。褒美としてゲンコツを一ダースほどプレゼントしてやろう」

「そんなもん要らないよーっ！」

保は勢い良く立ち上がると、涼を抱え上げてそのまま連れて行ってしまった。

涼の叫び声がどんどん遠くなって行く……。

「行っちゃった……。あれ？ さっきの子達もいない……」

いつの間にか助けてくれた二人もいなくなつて、公園には雛子一人だけが残されていた。

暫くどうしようかと思案していた雛子だったが……。

「おじちゃんち行こう……」

今頃お説教の真っ最中であろう涼を救うべく、雛子はサルのヌイグルミを抱きしめ、宇佐奈家へと向かった。

さあ……と優しい風が吹き、桜の花びらを舞い上げた。

さあ……と優しい風が吹き、桜の花びらを舞い上げると、雛子

は目を閉じ、仄かに香る春の香りを胸一杯に吸い込んだ。

その桜の袂に敷いたビニールシートに座る雛子の膝に、舞い上がった花びらが何枚か落ちて来た……。

「……懐かしいなあ」

花卉を一枚拾い上げ、掌でそれを弄びながら、雛子は遠い日の記憶に浸っていた。

あれから何年もの時が過ぎて……けれど、気持ちに少しも変わりが無い。

成長していないという事とは違う、『そのままで良い気持ち』が変わらずにある。

「ヒナ、お待たせ。……何してんだ？」

「ちよつとね、昔の事を思い出してたの。……ねえ、涼ちゃんは憶えてる？　ここであつた事」

「この公園でか？　ん……色々たくさんあつたからなあ、全部は憶えてないな」

涼も雛子の隣に座って思い出す。

子供の頃の遊び場と言えば、この公園か、川の土手だった。

もっとも涼の場合は遊び相手と言うより、その殆どがケンカ相手だった。

「ほら、わたしが幼稚園の頃、大きい子にイジメられて……」

「ああ、俺が親父に大目玉食らつた時か……」

そう言つと、涼は保に食らつたゲンコツの感触を思い出し、懐かしげに頭を摩った。

石のように硬くて、子供の自分にも容赦無く食らわせるゲンコツ。当時は嫌で仕方なかったが、今思い出すと、それは妙に暖かかったように思える。

「俺が数学出来ないのは、あの時の後遺症だな、うん」

「単に努力が足りないだけです」

雛子はクスッと笑うと、

「……どうしてるかな、あの男の子達」

桜の木を見上げながら、ポツリと言った。

「お前を助けてくれたって奴らか？ 俺が行った時には、もういなかったんだよな」

「小学校では見かけなかったから、違う学区の子達なのかなあ？」

「たまたまここに来てたんだろうな。 今逢えたら、あん時の礼でも言いたいんだけどな」

「そうだね……」

今度は二人で桜を見上げる……。

あの時と少しも変わらない、見事な枝振りの桜。

昔から、ずっと二人を見守ってくれている桜……。

「おい！ おまつとさくん！」

「あ、真君」

「おいおい……何だよ、その荷物は？」

引越してもするかのような大きさの荷物を担いで、真一郎が涼達の傍へやって来た。

まるでギャグ漫画に出て来る泥棒のような感じた。

「花見と言えば宴会だろう？ で、宴会と言えば……！」

言いながら真一郎がその包みを開けると、中からは大量の酒が出て来た。

「さすが！ 気が利くね」

「またあ……しょうがないなあ、もう。 どうせ言っても聞かないだろうし……」

「そういふ事。 あれ？ 高梨は？」

「今日は友達と先約があるんだって。 言っのが遅い！ って怒ってたよ？」

「あちゃ……涼、あとの処理は任せたぞ？」

「ふざけんな。 ところでお前、持って来たのは酒だけか？」

涼は瓶を幾つかどけてみたのだが、お酒の他には何も出て来なかった。

「一番食う奴が食い物持って来ねえでどうすんだよ。 ヒナの用意

したのだけじゃ絶対足りなくなるぞ?」

「あ、余分に作ってあるから大丈夫。足りなくなったら、また取って来るから」

「真、取って来るのはお前の役目だからな」

「別に構いませんよ? 俺は人様のお役に立つのが趣味だからな」
そう言つと、真一郎はビニールシートの上にどっかりと胡坐をかいて座つた。

その視線は、まだ開けられていない重箱へと注がれている。

「何なら、今の内に持つて来ちまおうか?」

「あ、真君、念の為に言っておくけど、途中でつまみ食いなんてしちゃ駄目だからね? 中身の配置は全部頭に入ってるから、減つてたらすぐに判るんだから」

「……もしも中身が減つてたら?」

「みんなで一緒に食べる為に作つたんだから、勝手に食べちゃうような人には何も食べさせません」

真一郎は少しかだけ考え込むと、何かを閃いたのか、ポン! と手を叩いた。

「逆に中身が増えてた場合は?」

「……悪戯するような人には何も食べさせません」

恐らく涼の嫌いな物でも詰めるつもりだったのだろう。

チツと軽く舌打ちすると、真一郎はチラリと涼の方を見た。

「お前の考えそんな事なんて、ヒナにはとっくにお見通しだよ」

「この俺様が悪戯なんてすると思うか?」

「しない訳がないな」

「愛と正義と真実の人、掃部関真一郎様に何を言つか」

「シャレと冗談と勢いの人の間違いだろ?」

「……あれ?」

笑いながら言い合う二人を見て、雛子は少し首を傾げた。

真一郎の言つた台詞に、何となく聞き覚えがあるような気がしたのだ。

いつ頃、どこでだったろう……？

「琢磨の奴、早く帰って来ねえかなあ……一緒に花見したかったぜ」
「今度帰るって手紙を出して来たくらいだし、そう遠くない内に逢えるだろ。それに、ここの桜は律儀に毎年咲いてくれるんだ、焦る事ねえよ」

「それにしても、いい枝振りの木だな。チャンバラやったら面白そうだ」

「真君、無闇に枝を折っちゃ駄目だよ？ チャンバラするなら、落ちてる枝を使いなさい」

「冗談だよ。琢磨相手じゃ、枝でもデンジャラス過ぎ」

「……あれ？」

枝でチャンバラ……？

何だろう……何となく記憶にあるような……。

「ヒナ、さつきから何を呆けてんだ？」

「え？ ……ううん、何でもない。さ、お花見始めよう」

「では！ 早速、俺様の新作宴会芸をご披露しよう！」

「早えよ、お前は！ まだ呑んでも食ってもいねえだろうが！」

桜が舞う……。

優しく……静かに……。

二人

「美奈！」

上げた右手を大きく左右に振りながら、笑顔で自分の名前を呼んだ紫に気付き、美奈は大学の正門を入った所で足を止めて振り返った。

いつかどこかで、こんな事があつたような気がする。

あれは、いつの事だっただろうか……？

「ふふ……」

「何？ 人の顔を見て笑ったりして」

小走りに近付いた自分を見ながら笑う美奈に、紫は不思議そうな顔をして訊ねた。

「別に。 ちょっと昔の事を思い出ただけです」

「昔の事？」

昔と言っても、二人の付き合いはそれほど古くない。

高校一年生の時からだから、今年で五年目である。

何か美奈に笑われるような事をしたかしら？ と、紫が首を傾げていると、

「丁度、高校の入学式の日……でしたわね。 誰かさんが私に喧嘩を売ったのは」

薄笑みを浮かべたまま、美奈は言った。

相変わらず気品に溢れた表情ではあるが、その中に『可笑しくてたまらない』といった感情がある事は、紫にはすぐ読み取れた。

「ああ、その話？ もういい加減に忘れなさいよ」

「生憎と私は記憶力が良いものですから」

「まったく、つまらない事ばかり憶えてるんだから……」

さすがに思い出すと少し恥ずかしい。

けれど、それは紫と美奈を結び付けてくれた、大事な思い出もある。

咲姫女子高等学校。

その名は全国に鳴り響く、まさに名門中の名門である。

通う生徒の家柄も、その成績も、普段の生活状況も、何もかも全てが入試合否の対象となる。

そこにはコネクションや義理のある無しは介入する余地が無い。

勿論、裏口入学など論外である。

教職員に対してもその厳しさは徹底されており、一切の妥協は許されない。

もつとも、だからこそ親としては安心して、この全寮制の高校へ娘を送り出せる訳なのだが……。

「えーっと……」

小さな紙切れを手に、紫は何度も顔を上下させ、メモと学舎を見比べていた。

大き目のバッグの紐が肩に食い込んで少し痛い。

勿論、中には着替えや、必要最低限の生活用品を入れてあるのだ。全寮制なのだから、これは当たり前前の装備である。

あとで宅配便で送ってもらう事も考えたのだが、部外者が校内へ何か運び込む場合には煩雑な手続きが必要な為、少々面倒なのだ。

紫は少し紐の位置をずらし、もう一度メモを確認する。

「今いる場所がここ……入学式は西側の講堂で……となると、こっちは北だから、寮があるのは反対方向よね……」

しかし、あまりにも広い学校の敷地内では、おいそれと目的の場所を見つけるのは困難に思えた。

何しろ、『とりあえず行ってみて、違っていたから引き返す』などという事をしていたら、かなり余計な時間を食ってしまう。何故なら、咲姫女子高等学校の敷地内には、小さな町が出来上がっていると言っても過言では無いのだ。

購買部と言えば、通常の高校では小さな窓口か、小屋程度の大き

さの建物であるのが常だが、ここでは何軒もの店が建っている。体育館や講堂、専門の教科の為の建物も複数建てられているし、銀行や病院まであるのだから……。

この中から目的地を探し出すのは、例えば地図を持っていたとしても、不慣れな者にとつては至難の業である。

「あれ？　ここはさつき通ったわよね……？　どうしよう、迷っちゃった……」

要所要所にはガードマンも配置されていて、紫は何人かに訊ねながら歩いていったのだが、それでもなかなか目的の寮には辿り着けない。

確かに教えられた通りに歩いた筈なのだが……。

その時、各所に設置されているスピーカーから、入学式が始まる旨の放送が流れた。

「嘘っ！　もうそんな時間なの！？」

一旦、荷物を部屋に置いて、それから入学式に出る予定だったのに、これでは荷物を抱えたまま出なければなくなってしまう。

指定の鞆ならともかく、こんなに大きな物を持って講堂に入っていくのは、ちよつと恥ずかしい。

きつともう講堂には、たくさん生徒が集まっている筈だ。

そんな状況では、入った途端に注目を浴びるのは必至である。

「そんな変な印象付けされるの、やだなあ……」

その時、大きな黒塗りのベンツが焦っている紫の脇を通り、少し先で停まった。

運転手が即座に後部のドアを開けると、そこからは漆黒の長い髪を春の風に靡かせた、長身の少女が降りて来た。

「うわ、綺麗な人……上級生かな？」

紫がその姿に見とれていると、少女のその端正な顔立ちに似合わない切れ長の眼が運転手に向けられた。

「早乙女、私は正門前で停めるようにと言った筈です。　何故こんな所まで車を走らせたのです？」

「も、申し訳ございません。ですが、少々時間に遅れてしまいましたので……」

余裕を持って出発したというのに、途中で事故があった為、渋滞に巻き込まれてしまったのは運転手の不幸だった。

なまじ大きな車のせいで小回りが利かず、裏道を使う事が出来なかったのだ。

「私の命には従えない……そう取っても構いませんのね？」

「い、いえ！ 決してそのような事は……！」

何て勝手な人なんだろうと紫は思った。

運転手さん（早乙女さんというらしい）は、気を利かせただけではないか。

きつとお金持ちの我侭お嬢様なんだわ……と、紫の中での少女の評価はかなり下がった。

「明日から……いえ、たった今から私の専属からは外れて頂きます。よろしくて？」

「お嬢様！ それだけは……どうかお許し下さい！」

「運転をする人間など掃いて捨てるほどいます。貴方でなくてはならない理由がありません。お父様には私の方から言っておきます」

これは、もしかしたら事実上の解雇通告ではないだろうか？

（そんな無茶な！ たかだか一度、言う事を聞かなかったくらいで……）

それに命令違反と言ったって、今回の事は逆にありがたいと言って良いような事ではないのか？

「あ、あの！」

声をかけてから、紫は「しまった！」と思った。

自分は全く関係の無い人間ではないか。

ちよつと腹が立ったからといって勢いで声をかけてしまったが、このあと何をどう言えばいいのだろう？

「……何か？」

紫の声に振り返った少女は紫の顔を一瞥して、つまらなそうに言い放った。

それが逆に紫を落ち着かせ、言葉を放つきっかけを作った。

「ちょ……ちょっと乱暴なんじゃないですか？ それじゃ、あんまりだと思いますけど」

「……あら、それは私に言っただけじゃあるのかしら？」

口元に小さく笑みを浮かべて言う少女を見て、紫は一瞬たじろいだ。

迫力が違う……。

怖いとかいう類の物ではなく、圧倒されそうな威厳があるのだ。

だが、ここで引き下がったのでは声をかけた意味が無くなってしまふ。

「そ、そうです！ その人にだって、言い分はあると思うんです。

貴女の言い様は、あまりにも一方的です」

「随分と居丈高ですね。この私に向かって、そのような口を利いた方は貴女が初めてですわ」

「それは貴女には不幸な事ね……。何でも自分の思う通りにして来たんでしょけど、世の中全てがいつまでもそれを認めてはくれないわ」

「随分と御立派な御意見をお持ちですこと……ご両親のご教育の賜物ですかしら？」

くすくすと笑いながら少女は言った。

紫は真剣に話しているというのに、何だか少女の方は、それを軽くあしらって楽しんでいるみたいだ。

紫はカチンと来たのか、更に言葉を紡ごうと、一歩少女に近付いたのだが、

「ちょ、ちょっと君！」

運転手が慌てて紫と少女の間に立った。

「いい加減にしなさい！ お嬢様に向かって何て事を言っただ！」

「で、でも……」

「この方は一之瀬美奈様。　一之瀬コーポレーション総帥のお嬢様だぞ！」

「い、一之瀬!?!」

踏み出した紫の足がそのまま止まった。

一之瀬と言えば、かの大企業　『登内グループ』　と双璧を成す、国内最大の企業体ではないか。

しかも、その名は海外にも轟き、各国首脳ともコネクションがあると聞く。

当然、国内の政財界にも大きな影響力を持っている筈だ。

「……」

美奈は、じつと紫の顔を見ていた。

紫は、美奈が勝ち誇ったような顔をするかと思っていたのだが、美奈の表情は変わらない。

むしろ今まで以上に冷たい目をして紫を見ている。

一之瀬のご令嬢……そんな人の機嫌を損ねたら、せっかく苦労して合格した咲姫への入学を取り消されるかもしれない。

いくら建前では立派な事を言っているにしても、いざ権力者が乗り出せば、すぐに掌を返してしまうのが世の常である。

「た……」

『大変失礼しました』

その台詞はウンザリするほど聞かされた。

誰も自分を見ない……一之瀬の名前を聞いた途端に、誰もがまるで違う人になる。

ついさっきまで　『美奈さん』　と呼んでいた人達が、一之瀬の名を聞くと　『お嬢様』　と呼び方を変える。

自分が一之瀬の姓を名乗っている限り……いや、一之瀬の血が流れている限り、自分は　『美奈さん』　にはなれないのだ……。

(どうせ、また……)

美奈は静かに目を閉じた。

「例えどんなに大きな家のお嬢様でも、人一人の人生を左右する権

利があるとは思えません！ 貴女は考えを改めるべきです！」

紫は胸を張って言った。
構わないと思った。

例え入学を取り消されても、自分の信じる言葉を曲げるのは嫌だった。

「貴女……本気で仰ってる？」

「勿論です！」

「私は一之瀬美奈ですわよ？ それを承知の上で、そう仰るの？」

「貴女が誰でも関係ありません。今この場では、同じ咲姫女子の生徒です」

ほんの少しの間だけ、美奈は紫の顔をじっと見つめると、すぐに運転手を見遣り、

「……早乙女」

と、静かに声をかけた。

「は、はい！」

「ご苦勞でした。車は所定の駐車場に入れておきなさい、後程連絡を入れます。そうしたら、またここまで迎えに来なさい」

「……はい！」

運転手は美奈に一礼するとベンツに乗り込み、紫の方を見てから小さく頭を下げて走り去った。

「私の前だからといって遠慮する事はありませんのに……」

美奈はクスツと笑った。

「遠慮って？」

「貴女にお礼が言いたかったんでしょうけれど、私の前だから言い難かったんでしょうね」

「お礼なんて……わたし、別に何も……」

紫が困った顔をするのと同時に、入学式開始の合図がスピーカーから聞こえた。

「あ！ 入学式が始まっちゃった！ どうしよう……」

「あらあら……一生に一度の高校の入学式に遅刻だなんて、一之瀬

の長女としては恥ずべき行為ですかしら？」

「あ、貴女も新人生だったの！？ ごめんなさい、わたしのせいで……」

「でも……」

美奈は、紫の肩に手をかけ、

「それをサバタージュしてしまうのも、一生に一度の思い出になると思いませんか？」

ちよつと小首を傾げるようにして言った。

その仕草は先程までとは違い、どこことなく悪戯っぽさを感じさせる物だった。

「そ、それは、そうかもしれないけど……」

「時には悪い事をするのにも勉強ですわ。それが自らの意思で行われ、自らの意思で責任を取る覚悟があるのなら」

「物は言い様ね。……でも、それもいいかもしれない」

紫はクスッと笑った。

この人は、決して金持ち然とした傲慢な人ではない。

それどころか、話してみれば親しみ易く、とても優しい人だ……
そう思えた。

「お名前、聞かせて下さる？」

「あ、わたししたら……ごめんなさい。わたし、阿達紫って言います。よろしくお願いします、一之瀬さん」

「美奈……と、呼んで下さると嬉しいわ。勿論、呼び捨てで結構ですわ。私達は同級生なのですから」

「じゃあ、わたしの事も紫って呼んで」

「……ええ、喜んで」

美奈は笑顔を浮かべた。

それは優しい、安堵にも似た笑顔だった……。

「結局、早乙女さんをすぐに呼んで、そのまま学校から出て行っ

やうんだもん。しかも、わたしまで無理矢理乗せて……驚いたわ」「思い立ったら即行動。というの、面白いと思いませんか?」「掃部関君みたいな事言って……。元々、美奈と掃部関君は波長が合うように出来てたのね、きつと」

「人は出会うべくして出会うものですわ。私と紫のようにね……」初めて紫が『美奈』と呼びかけながら手を振ってくれた、高校一年の春。

今でもハッキリと思い出せる、懐かしく、そして素敵な思い出……。

「久し振りに、今日はこのまま何処かへ出かけましょうか?」

「駄目よ。今日は落とせない講義があるんだから」

「随分と真面目になりましたのね。高校一年生の頃の紫は、もっと碎けた感じでしたのに……寂しいですわ」

「何言ってるのよ。美奈こそ段々子供っぽくなってるわよ? 昔

はもっと大人だったのに」

「あら、私は変わっていなくてよ? 昔からこうです」

「そうだったかしら……?」

重ねた月日の分だけ思い出が増えて行く。

それはもう戻る事の無い日々……けれど、永遠に変わる事の無い日々。

色あせる事の無い日々……。

真夏の夜の……（前編）（前書き）

高校一年の夏、涼達が海へ行った時のお話です。

真夏の夜の……（前編）

どんよりと曇ったバカンス後半のある日。

琢磨と美耶子は、何やら朝から顔を突き合わせている。

勿論、琢磨と一緒になのだから、琢磨の入院している病室である。

「よし、終わった」

「わたしも、これで終わりです」

こんな静かな個室を提供されて、ただ寝ているだけでは勿体無いと、琢磨は夏休みの宿題を片付けていたのだ。

この天気では海の人出も少なく、浜茶屋も開けられない為、見舞いに来ていた美耶子もそれに参加する事にした。

「しかし……俺の身の周りの物をどうやって持ち出したんです？」

拉致同然（と言うか、完全な拉致なのだが……）に海に連れて来られたというのに、着替えどころか祖父の形見の木刀や、夏休みの宿題まで……。

琢磨は、ずっと疑問に思っていた事を訊ねた。

「それは至極簡単です。琢磨様のお住まいのオーナーはわたしですもの、当然です」

美耶子は、それがさも当たり前のように答えた。

「……はい？」

「マスター・キーはわたしが管理しておりますので、出入りは自由なんです」

「しかし、それは……いえ、何でもありません……」

何も言うまい……。

美耶子に悪気は『全く』無いのだ……。

「き……汚ねえっ！ 汚ねえぞ、涼！」

真一郎は、涼を指差して思い切り非難した。

「何が？」

「お前、宿題殆ど終わってるじゃねえかつ！　どういう事だっ！？」

「ここに連れて来られる前に、ヒナに無理矢理やらされた」

「涼ちゃん、どうしてそんな嫌な言い方するのぉ……？」

登内家別荘でも、この天気では海で遊ぶ訳にもいかず、それなら夏休みの宿題を片付けようという事になり、全員居間に集まっているのだが……。

「お前はいつだって俺の心の友でいるって約束したじゃねえかつ！　それなのに……それなのにいいい……！」

「俺だって好きでやった訳じゃねえ」

言いながら、涼は雛子の顔をジッと見た。

まあ、確かに雛子に脅されて無理矢理やらされたのは事実だ。

「だってえ……ああでもしないと、やらないんだもん……」

「だいいち、何でこんなもんがここにあるんだ？」

涼は利恵と雅を交互に見ながら言った。

その目には、ありありと『ふざけんな』という感情が籠められている。

「お母様に言われたんだもん、遊び呆けさせないでって。だから涼の部屋から持って来たの」

「そうそう」

利恵が言うと、雅もそれに追従する形で相槌を打った。

「何が『そうそう』だ。無断で俺の部屋に入りやがって……」

「無断じゃないよ？　ちゃんと、お母様に許可とったもん」

「そうそう」

「俺の許可はとってないだろうが！　まったく……おまけに、どこかで見たようなパンツだと思ってたら……」

不思議に思っていたのだ。

何故、こんなに自分の持っている服や下着と、そっくり同じような代えがあるのか。

全部、涼の物を持って来ていたのだから、当たり前だったのである。

「早く気付くべきだった……」

「気付いたって、どうしようもないと思うんだけど？」

眉間に皺を寄せている涼を見ながら、利恵はしれっと言った。

「やかましい！ 気分の問題だっ！」

「アタシ、ドキドキしちゃった」

「そういう意味じゃねっつの……」

無駄だ……こいつらには何を言っても無駄だ……。

涼は頭を抱えなくなった。

まあ、いつまでもそんな話をしていても仕方ない。

既に宿題を終えている雛子をリーダーとして、一同は黙々と宿題に取り掛かった。

当然の如く、雛子は一番最初にノルマを達成し、続いて利恵、雅と順調に宿題を終らせた。

そして、そのまま二時間ほどが経過して……。

「終わり……っと」

「お疲れ様、涼ちゃん。 どう？ あの時やっておいて良かったでしょ？」

「ああ。 やっぱ最初に少しでもやっくとくと、あとが楽だな」

「うつつ……まだ半分も終わらない……」

「ホレホレ！ 頑張れ真の字！」

あと宿題が終わっていないのは真一郎のみとなった。

利恵にハッパをかけられつつ、何とか頑張っていた真一郎だった。

「雛子ちゃん、ちょっとだけ見せて！ やっぱ自力じゃ不可

能だよ……」

「ダメだよ真君。 宿題は自力でやらなきゃ意味無いんだから」

「雛子ちゃんの意地悪……あ、そうだ！ 琢磨の見舞いに行かない

「や」

「こらこら、無粋な真似するんじゃないの。そんな事考えてる暇があるなら、少しでも手を動かしなさい」

「……高梨のアホ」

真一郎が言うと同時に、ベシ！　と利恵のツツコミが真一郎の頭に入った。

ベテラン芸人コンビのような、見事なタイミングの突っ込みである。

「いてててっ！　傷口が開いたらどうすんだっ！」

「大方、見舞いに託けて宿題を見せてもらおうってハラでしょ？」

「イヤ〜ン……バレてた？」

「ギャグやる余裕があるなら宿題やりなさい！」

痛む頭を気にしつつ、真一郎は再び宿題と向き合った。

「あゝあ、もうすぐ夏休みも終わりかあ……」

涼達より一足早く宿題を終えた雅は、自室で足早に去って行く夏休みを惜しんでいた。

本当は空いた時間を使ってゲームでもやろうと思ったのだが、部屋に入った途端に、何となくその気も失せてしまった。

「うゝん……明後日には、もう帰らなきゃいけないのよね。でも、まだ宇佐奈君にアタック出来てないしな……」

ゴールデンウィークに引き続き、雅は何とか涼との仲を進展させようと考えを巡らせていた。

しかしながら敵は手強い。

既に涼の伴侶状態になっている利恵。

完全無欠の幼馴染である雛子。

そして、何より鈍感な涼本人……これが一番の強敵のようなものだ。

「ちょっとは気付いてくれるのかなあ……アタシの気持ち……」
机に突っ伏すと、雅は呟いた。

「アタシだつて……好きなんだよ……」

こうして静かに涼の事を考えると、今まで感じなかった切なさがかみ上げて来る。

このまま大人しくしていたのでは、まず間違い無く、今までとは何も変わらない関係のままだろう。

せつかくこうして海に來ているのだから、少しは大胆に行動してみてもいいのではないだろうか？

現に美耶子は、琢磨に対して積極的にアピールしているではないか。

その甲斐あつてか、何となくいいムードになっているし……。

「よゝつし、今夜よ……今夜、行動するのよ雅！ 姉さんに負けてられないわっ！」

雅は机の引き出しから紙とペンを取り出すと、何かを作り始めた……。

「肝試し？」

夕食が終わると、雅は突然、肝試しをやらうと言い出した。

まあ、雅が突然何かを思い立つのは初めてではないので、利恵としてはそれほど驚きもなかったのだが……。

「面白そうじゃん、やろうぜ」

「えええ……？ わたし、やだなあ……」

ノリノリの真一郎とは対照的に、怖がりの雛子は心底イヤそうな顔をしている。

「肝試しねえ……。わたしは構わないけど、どこでやるの？ この辺に墓地なんてあつたっけ？」

「やだよ利恵ちゃん、夜のお墓なんて！ 前を通り過ぎるのだって怖いのに、中になんて入れないよおっ！」

雛子は既に泣きそうな顔になっている。

そしてすぐ、助けを求めるように涼の顔を見た。

「ヒナがこんなに嫌がつてるんじゃ、やめた方がいいかな？」

涼としては別に肝試しをやる事自体に異議は無かったが、雛子を泣かせてまでやるつもりは無い。

いくら何でも、それでは楽しめないだろう。

（ふ〜ん？ 佐伯さんには甘いんだ……。 こういう 『女の子の子』 してる子がいいのかな？）

雅の心に 『涼は大人しい女の子が好き』 と一瞬メモされたが、それはすぐに消去された。

もしそうなら、利恵と付き合う筈が無いのだから。

「大丈夫よ。 だいいち夜のお墓なんて、アタシだって嫌だもん」

「そんじゃ雅ちゃん、他にどこかい場所でもあんの？」

真一郎も涼と同様、雛子が嫌がる事はしない方針だ。

だが、こういったイベント関係は好きなだけに、何とかしてやりたいとは思っているようだ。

「ふふ〜ん。 実は、ここからちよつと行った場所にね、素敵な伝説があるのよ」

「伝説って……？」

雅の言葉に、今まで怖がっていた雛子が興味を示した。

（思った通り！ 食いついて来たわね、佐伯さん）

雛子のようなタイプは、この手の話に弱い。

雅は、そう睨んでいたのだ。

一人でも不参加者がいては、企画そのものがポシャってしまう可能性がある。

特に雛子が危ないと踏んでいた雅は、対雛子用に、この話題を用意していたのだ。

その狙いは見事的中した事になる。

「今ここで教えちゃうとつまらないから、それはあとで教えるわ」

「あ、でもさ、五人だぜ？ ペアにならねえよ」

「それは大丈夫。 ちゃんとクジを作って来たから」

「な〜んか怪しいわねえ……。 用意周到って感じじゃない？」

利恵は胡散臭そうに、腕組みをしながら雅を見た。

雅の言動や行動から、何か嫌な空気を感じ取ったのだろう。

（うつ！……この子、何でこんなに勘がいいのよ！）

「や……やゝねえ、利恵ったら！ 姉さんと浦崎君がいないんだから、そんなのすぐに気付くじゃない」

「それもそうか……。で？ クジって？」

利恵が思いの外すんなり納得してくれた事にホッとして、雅は先を続けた。

「男性陣のどつちかに二回行ってもらうのよ。そうすれば、ちゃんとペアになれるでしょ？」

「あ……ね、ねえ！ だったら、わたし留守番してるよ。その方が話が早いでしょ？ ね？ ね？」

雛子は、これ幸いと留守番を買って出たのだが……。

「いいのおお？ 佐伯さああん……。一人ぼっちで、ずうううと待つていられるううう……。？」

首を斜めに曲げつつ、少し上目遣いになると、雅は声を低目に震わせながら言った。

それも弱々しく、抑揚も無くだ。

「や……やだ、雅ちゃん！ 何でそういう喋り方するのぉ！」

「気分をおお……。盛り上げよう……。と思つてえええ……。？」

「行く！ 一緒に行くから、もうやめてよぉっ！」

「はい、決まり！ それじゃ早速クジ引きしましょ！」

雅は嬉しそうにクジを差し出した。

「んじゃあ、ちよつくら行ってくる」

「行つて来まゝっすう！」

雅は嬉々として、涼の腕を取って歩き出した。

まだ別荘の敷地内ではあるが、雰囲気充分に辺りは静まり返り、木々のざわめきがやけに大きく聞こえる。

「ちょっとおっ！ そんなにくつつかなくても歩けるでしょっ！」

「だあってええ……雅、怖いんだもん」

「……まだ別荘の敷地から出てないでしょうが」

「怖いものは怖いのおお」

そう言つて、雅は更に涼にくつ付いた。

それを見て、利恵は更に怒り出す。

……いつもの展開である。

「雅いいい……！」

しかし、いくら利恵が怒ろうとも、くじ引きで順番を決めたのだから仕方が無い。

「利恵の顔の方が怖い……。さ、宇佐奈君、行こ」

フンと勝ち誇つたような顔をして、雅は涼を引っ張るようにしながらスタスタと歩き出し、二人の姿は、あつと言う間に雑木林の中に消えて行った。

「ガルルルルル……！」

「どうどう。落ち着け、高梨」

「わたしや馬かつ！」

「八つ当たりすんなよお……」

「何だかヒンヤリして来たね。……お天気、大丈夫かなあ？」

星ひとつ出ていない空を見上げて、雛子は不安そうに呟いた……。

真夏の夜の……（中編）

「風が出て来たな……」

「肝試しの雰囲気バツチリだね」

相変わらず涼の腕を取ったまま、雅は涼の顔を見上げるようにして言った。

「呑気な事を……。雨でも降って来たら厄介だろうが」

「それはそれで、また楽しめるわよ」

「楽しかねえって」

「アタシは楽しいの」

肝試しの最中とは思えないほど、雅は笑顔だった。

「風が出て来たね……」

涼と雅の消えた方向を見ながら、雛子は誰に言つとも無く呟いた。

「そうだなあ……。雨、降んないといいけど……」

「フン！ ずぶ濡れになって、風邪でもひけばいいのよっ！」

今現在、利恵はとても腹の虫の居所が悪い。

今の台詞に同調しても反論しても、絶対に怒られるだろう。

真一郎と雛子は互いに顔を見合わせて、溜息をつきながら頷きあった。

「そう言えば……。さっき雅ちゃんの言つてた『伝説』って、どんなお話しなんでしょうね？」

「どうせ雅の作り話に決まってるわよ」

「いや、そうでもないぜ？ 婆ちゃんからも、そんな話し聞いたからな」

「そうなの？」

真一郎の言葉に、利恵が反応した。

涼の影響だろうか、古い言い伝えや昔話などに、最近ちょっと興味があるのだ。

「地元では有名な話とか？」

「若い人間は殆ど知らないみたいだけどな」

「ねえ、聞かせて聞かせて」

雅の睨んだ通り、雛子は目を輝かせてワクワクしている。

どうやら肝試しの最中だと言う事も忘れているようだ。

雛子とまではいかないが、利害も期待しているような顔だ。

「ああ、いいよ。確か、こんな話だったな……」

真一郎は静かに話し始めた……。

その昔、或る村に紗奈（さな）という美しい娘がおった。

誰にでも分け隔て無く優しく、村の誰からも好かれておった。

紗奈には良助（りょうすけ）という幼馴染がおって、毎日一緒に畑仕事に精を出しておった。

二人ともそれはそれは仲睦まじく、村の誰もが末は二人が夫婦（みようと）になると信じて疑わなかったそう。

ところが、ある嵐の晩に、道に迷った一人の娘が一夜の宿を求めて良助の下を訪れた。

人の良い良助は『それは、さぞお困りであろう』と、夕餉（ゆうげ）と寝床を娘に用意してやった。

だが……嵐の去った翌朝から、良助はまるで人が変わってしまったように、紗奈に辛く当るようになった。見ている者の方が胸が痛くなる程に……。

それでも紗奈は、いつも笑っておった。

『良助さんの為ですから』

そう言って、男でも音を上げるような仕事も一人で黙々とこなしておった。

嵐はとうに去ったというのに、娘はいつまで経っても良助の家から出て行かないだ。

そればかりか、まるで良助の嫁のように、毎日、良助の傍におる。機を織り、絵を描き……それは大層な値で売れたそう。

良助はすっかり贅沢に慣れ、もう畑仕事もせなんだ。

それでも紗奈は笑っておった。

笑いながら、一人で畑仕事をこなしておった……。

その夏、日照りが続き、村には飢饉が訪れた。

食料扶持を減らす為、娘達が町に売られて行く。

紗奈も例外でなく、愛しい良助の名を叫びながら、泣く泣く町へと売られて行った。

良助は、それでも家から顔も出さなんだそう。

紗奈がいなくなると、いつの間にか娘も消えておった。

良助は己が愚かさによやく気付き、来る日も来る日も紗奈の名前を呼び叫ぶ。

だが、紗奈はとうに売り飛ばされておるのだから、村に姿がある筈もない……。

村から架かる一本きりの橋。

名前など無いその橋の遥か向こうに、紗奈の売られた町がある。

良助は、消えた娘の残した幾許かの銭を手し、その橋を渡って町に行った。

紗奈を買い戻す為に……。

良助が橋を渡ってすぐ、みすばらしい身なりの娘が橋を渡って村に来た。

誰もが最初、判らなんだ。

それが、やつとの思いで町から逃げ帰って来た、やつれ果てた紗奈だと……。

紗奈は、それからずっと良助の帰りを待った。老いさらばえ、足腰が立たぬようになって、それでも良助の帰りをただひたすらに待った。

良助は……帰って来なかった……。

いつからかその橋は、男衆には『戻り橋』。女衆には『還らずの橋』と呼ばれるようになったそうなの……。

「……そのどこが『素敵な伝説』なんだ？」

雅から話を聞いた涼は首を傾げた。

どう好意的に解釈しても、身勝手な男のせいで不幸になった、哀れな女の話ではないか。

同じ男として、聞いていて少々腹が立つたくらいだ。

「でね、その橋をカッブルで渡ると、永遠に結ばれるんだって」

雅はニコニコしながら言った。

「何で？　だって二人は逢えなかったんだろ？　それなら別れちゃう橋なんじゃないのか？」

「紗奈さんはね、そんな辛い思いをさせたくないって、一緒に橋を渡る男女を結びつけるんだってさ」

「へえ……」

何ともお人好しな人だな……と感心しながら歩いていると、その内、一本の橋の前に辿り着いた。

「雅、この橋渡るのか？」

涼は立ち止まって雅に訊ねた。

「そうよ。で、渡った先の小さなお社に、お供えをして帰るの」
「ふうん……じゃ、とつとと行くか」

「哀しいお話だね……」

この手の話に弱い雛子は、少し目を潤ませながら言った。
感受性が豊かなのか、想像力が逞しいのか、物語の中に入り込んでしまうのだ。

「ま、伝承だからホントかどうかは怪しいけど、その時代には人身売買なんて当たり前にあったそうだから」

「なんか、その話してさ……」

涼と雛子の話しのようだ……と利恵は思った。

じゃあ、嵐の晩に現れた娘は自分？

そのせいで、涼が雛子に辛く当っている……？

「そんな訳無いじゃない……わたし、そんな気全然無いんだから……」

「ど、どうしたの？ 利恵ちゃん」

「あ……うつん、何でもない……」

そこで利恵は、ふとある事に気付いた。

何だか嫌な予感がする……。

「ねえ真君、その橋ってどこにあるの？」

「この近く」

「まさか……！？」

「当り」

「何で早く言わないのよっ！」

利恵は猛然と真一郎に掴みかかった。

しっかりと手がクロスして、真一郎の首が絞まっている……。

「グエッ!? だってこんな話し、どこにだって転がって……苦し……」

「ヤーン！ 雅の狙いってこれなんじゃない！ 二人が結ばれちゃ

「つたらどうしてくれんのよおっ！」

「落ち着け、落ち着いて……お願いだから……」

きつと自分と涼が一緒の組になるようにクジに細工して、最初にスタートするようにしてあったに違いない！

利恵は昂奮して、益々真一郎の首を締め上げる。

「真君のバカーッ！」

「死ぬ……死んじゃうって……」

「あ！ 降って来たよ、雨」

ポツポツと、空から水滴が落ちて来たかと思つたら、それはすぐに全ての音を掻き消す豪雨となった。

そして、遠くからゴロゴロという音が近付いて来たかと思うと……。

ピカッ！ つと視界がホワイトアウトし、次の瞬間、鼓膜を突き破るかのような大音響と共に空気が震え、地面が細かく揺れた。

「キヤアアアーツ！」

雷鳴に負けないくらい大声で、雅が悲鳴をあげた。

しゃがみ込み、耳を両手で塞いでいるが、振動が身体を伝わり、嫌でも雷が鳴っている事を雅に伝えて来る。

「……今は近かったな。どこかに落ちたんじゃねえか？」

「怖いーっ！ 怖いよーっ！ アタシ、雷ってダメなのーっ！」

「木の傍には寄らない方が無難だな」

涼と雅は生い茂った木の葉で、多少なりとも雨を凌ごうと考えていた。

だが、ここまで雷が鳴っていると、却ってそれは危険そうだ。

涼は雅の手を引き、木の傍から離れようとした。

「うえええん……宇佐奈君、怖いよおお……」

冗談でも何でもなく、雅は本気で怖がっている。

声が震えているのは、雨に打たれたせいだけではあるまい。

「大丈夫だから。ほら、こっちに来い」

「う、うん……」

雅の肩を掴んで引き寄せると、ヒンヤリとした感触が涼の手に伝わって来た。

「さすがに冷えてるな……。どこか雨宿り出来る所は無いか？」

「確か、この近くに陶芸の小屋があったと思う……」

「よし、そこまで走るぞ！」

涼は雅の肩を抱きかかえるようにして走り出した。

「ひえええ、濡れた濡れた……」

「もうビツシヨリ」。利恵ちゃん、着替えよう？」

「大丈夫かな……涼と雅」

急な雨に慌てて別荘に戻った利恵達三人だったが、川に飛び込んだ後のように全身ズブ濡れになっていた。

「あれ？ 風邪ひけって言ってたんじゃないかっただけ？」

真一郎が意地悪くそう利恵に言つと、利恵は、フン！ とそっぽを向いてしまった。

それと同時に再び雷鳴が轟くと、その音に別荘の窓がビリビリと震えた。

「きゃああっ！」

「近いわね……。どこかに落ちたんじゃないかしら」

「わたし、雷って嫌い……」

耳を塞いで小さくなる雛子とは対照的に、あまりこいつった物には恐怖を感じないのか、利恵は冷静に状況を分析している。

「涼の頭の上だったたりして。いい具合にローストされそうだな」

「……真君にも特大のを落としてあげようか？」

「心配だな、涼達……。大丈夫かな？」

「よろしい」

真一郎と冗談を言い合いながらも、利恵は涼が心配で仕方なかった。

（涼……。大丈夫だよ……。？）

「琢磨様、ご覧になりましたか？　また光りましたよ」

病室の窓にへばり付くようにしながら、美耶子がはしゃいでいる。まるで花火見物でもしているかのようである。

「綺麗ですねえ……」

「美耶子さんは、雷は平気なんですか？」

「はい。ご存知ですか？　落雷に遭う確率より、交通事故に遭う確率の方が高いそうですよ？」

「は、はあ……そうなんですか……」

「はい」

琢磨の訊きたかったのは、そういう事ではないのだが……。
まあ、怖くないと言うのだからそれで良いだろう。

「別荘のみんなは大丈夫でしょうか？」

「別荘には避雷針も設けて御座いますから、心配御無用です」

「は、はあ……そうなんですか……」

「はい」

さつきから琢磨の訊きたかった事とは、微妙に違った答えばかりが返って来る。

だが、まあ大丈夫だろう。

別荘には真一郎も涼もいるのだから、いざという時には二人が何とかしてくれる。

肝試しをやっている事など知らない琢磨は、そう思って安心して
いた……。

「大丈夫か？　雅」

「うっ……寒い……」

夏に使う別荘と言えば、涼しい場所に建てられているものである。

そんな場所でズブ濡れになれば、当然、冷えもする。

何とか小屋へ辿り着きはしたものの、さすがに涼の身体も冷えていた。

「しかし……何にも無いな、ここは」

その小屋は地元の人が建てたのか、電気も通っておらず、部屋の中に囲炉裏が設えてあるだけだった。

扉には鍵がかかっていたのだが、それは涼が叩き壊した……。

「とりあえず火を起こさないとな。このままじゃ風邪ひいちゃうよ」

焼き物を焼く為の小屋なら、何処かに火種になるような物が置いてあるだろう。

涼があちこち探すと、マッチが一箱見つかった。

だが……。

「マッチだけじゃ意味ねえな。何か燃やす物が無いと……」

小屋の奥の方に薪があるのは見える。

だが、種火を点けてからでないと、いきなりでは火は点かない。

「しょうがねえ、緊急事態だ」

涼は部屋の一角に敷かれていた畳（休憩用だろうか？）を細

かく篦り、それに火を点けた。

やがて囲炉裏には赤々と火が点る。

「これで良し……と。本来の使い方とは違うけど勘弁してもらおう」

「あつたかい……」

「雨足は……当分弱まりそうもねえな。もう少し薪を持って来と

くか」

そう言つて、涼は薪を取りに席を立った。

一人残された雅は膝を抱えた格好で、囲炉裏の火を見ながら呟いた。

「……服、乾かさないと。でも……」

涼が戻つて来た時、自分が下着姿だったら涼はどんな反応をする

だろう？

いきなり襲い掛かって来る？

「うつん、違う。きつと、アタフタして『バ、バ力野郎！早く何か着ろっ！』って言うだろうな。顔を背けてさ……」

そんな光景が容易に想像出来て、雅はクスリと笑った。

シャワー室の一件の時もそうだった。

相手に魅力が有る無しに関係無く、そういう反応をする男なのだ。「珍しい生き物。でも、そういう所も好き。大好き……大好きなんだ……」

考える……涼の事を……。

それだけで、雅の中に在る涼に対する気持ちが、どんどん大きくなって行く。

「伝えたいな……好きって気持ちを……」

「何が好きだった？」

いつの間にか、薪を抱えた涼がすぐ傍に立っていた。

「えっ！？ あああ、あの……」

「ハラ減ったか？ 何か食い物の事でも考えてたんだろう？」

「ち、違っわよっ！ アタシが考えてたのは……」

『宇佐奈君の事よ！』……そう言いたかった。

なのに、何故か言えなかった。

いつもの自分なら、そんな事くらい苦も無く言えるのに……何故か今は言えなかった。

「……何でもない」

「変な奴」

涼はつまらなそうにそう言つと、抱えていた薪を足下へと並べ始めた。

（へ……変な奴ですってええっ！？）

別に悪意があつて言つた訳ではないのだろうが、涼の一言に、雅は力チンと来た。

「……悪かったわね、変な奴でっ！」

雅は急に腹が立って来た。

自分がこんなに想い、悩んでいるのに、『変な奴』の一言で片付けられてしまった……。

「何怒ってんだ？」

「宇佐奈君が怒らせるような事言っただけでしょ！？」

「何か言ったわけ？」

「今、変な奴って言ったじゃない！」

「そんなに怒るような事かあ？……まあ、気に障ったなら謝るよ。悪かった」

一言詫びると涼は雅の隣に座り、一緒に囲炉裏の火にあたった。仄かな灯りに照らされた涼の横顔を見て、雅は自分の胸が高鳴るのを感じた。

「あ……あの……」

「ん？」

「服……このままだと風邪ひいちゃうかも」

「ああ、そうだなあ……。昼間ならスグに乾いちまうけど、夜だし、雨降ってるしなあ……」

窓を叩く雨の音は激しさを増すばかりで、一向に止む気配を見せではないなかった。

未だ雷鳴も重く響いている。

「ぬ……脱いじゃおつか？」

「放せえええーっ！」

「落ち着けて、高梨ーっ！」

「利恵ちゃん！ダメだつてばあっ！」

真一郎と雛子は、必死になって利恵を押さえている。着替えを終えて、今の今まで大人しくしていたのに、突然、利恵が外に出ると言い出したのだ。

「こんな夜の豪雨の中を、涼達を探しに行くなんて出来る訳無いだろっ！ お前の方が遭難しちゃうぞ！」

「ヤダッ！ 絶対に行くっ！ 今、変な胸騒ぎがしたああーっ！」
恋する乙女の勘は鋭い……。

「大丈夫だよ！ 涼が雅ちゃんに妙な気を起こす訳無いって！」

「雅が変な気を起こした場合はどうするのよっ！」

「涼ちゃんは相手にしないってば！」

「根拠はっ？ ヒナちゃん、その根拠は何っ!？」

普段なら雛子の言葉に素直に頷くのに、今回ばかりは全く効力が無い。

根拠はと詰め寄られても、幼馴染としての勘とか、長年見て来たからとかしか言い様が無い。

……しかし、それでは今の利害は納得しないだろう。

「だ、大丈夫だから！ とにかく大人しくしてて！」

もう勢いで黙らせるより他に無い。

「何で二人とも邪魔するのよぉ……涼の貞操の危機なのよぉ？」

「そんな……大丈夫だってば、利害ちゃん」

「そうそう！ そんな事になる訳無いって！」

「……絶対？ 保障してくれる？」

雛子も真一郎も、大きく『うんうん』と頷き、ありったけの根性を搾り出して、輝くような笑顔を作った。

……つもりだった。

「何よ、その能面みたいな笑顔は……」

「し、失礼な！ このアイドル顔負けの笑顔に向かって！」

「アイドルに顔が負けてる笑顔ぉぉ……？ 当たり前的事言わないでくれない？」

「……どうしてこう顔に似合わず毒舌なのかな、こいつは」

そして……また一際大きな雷鳴が響き渡った。

真夏の夜の……（後編）

「ぬ……脱いじゃおつか？」

雅がそう言ったと同時に、先程よりも大きな雷鳴が轟いた。途端に雅は耳を塞いで丸まってしまふ。

「キヤアアッ！ もうヤダアッ！」

「そんなに雷って怖いかな？」

「怖いよお！ だって、あんなに光って、あんなに大きな音で……
当たら死んじゃうんだよっ！？」

雅は耳を塞いだまま、情けない顔をして言った。

普段の強気はどこへやら、今の雅はまるで子供のようなのである。
そんな雅がおかしいのか、涼は楽しそうに笑いながら囲炉裏に薪をくべた。

「笑わなくてもいいじゃない……」

「ところで、さっき何か言ったかな？」

「え？ う……ううん、何も言わないよ？」

「そっか」

雅の一世一代の勇氣は、結局、雷によって邪魔されてしまった。

（おのれ雷めええ……！ だからあんたは嫌いなものよ！）

そこでまた雷鳴が轟き、雅は両手で固く耳を塞いだ。

雅は益々雷が嫌いになった……。

「そっだ、さっきの話しただけさ」

「……」

「……おい、雅」

「え？ 何？」

つんつんと肩を突付かれて、雅は涼の顔を見た。

とは言っても、ギョッ！ と耳を押さえているので、涼が何か言っている事しか判らない。

「……耳から手え放せよ」

涼はジェスチャーで、雅に耳から手を放す様に伝えた。

雷鳴を警戒しつつ、恐る恐る雅は耳から手を放す。

「な……何？」

今にもまた雷が鳴るのではないかと、雅は不安そうにしている。

「さつき橋の手前で引き返しちまつたろ？ それで思ったんだけどさ、橋を渡り切らなかったカップルはどうなるんだ？」

「さ……さあ？ その橋に来る人達は渡るのが目的だもん。渡らなかつた人の話しなんて聞いた事無いよ」

「そりゃそうだな……」

雅が何を企んでいたのか、涼には大よその見当がついている。

いくら悪戯好きな雅でも、普段なら怖がる雛子を無理矢理誘う筈が無い。

となれば、大方肝試しに託けて、自分とくっ付こうとしていたのだろうと。

まあ、さすがに橋の話しまでは判らなかつたようだが。

「紗奈は不幸だったのかな？ それとも……」

「……判んない。でも、幸せじゃなかつたよね」

「そうだな……」

「やまないね、雨……」

激しく窓を叩く雨を見ながら利恵は言った。

雷は鳴り止んでいるが、風は未だ強く吹き付けいて、まるで別荘全体を揺さぶっているようだ。

「これだけ大きい建物でも、こんなに揺れるんだね」

雛子はココアを淹れて居間に入ってきて来ると、ソファに腰掛けている真一郎に渡しながら言った。

「でかい建物だけに、風当たりがキツイんだよ、きつと」

「……笑って欲しい？」

「いえ、結構です……」

上手い事を言ったつもりだったのだが、今の利恵にはお気に召さなかったようだ。

ギャグがスベった真一郎は、大人しく雛子の淹れたココアを飲む事にした。

「はあ……ゆったり……」

「寛いじゃって、まあ……」

「高梨も飲んで落ち着けよ」

「落ち着いてる場合じゃないっての……」

利恵が不機嫌そうに言ったのと同時に、真一郎の携帯電話が鳴った。

「ヘイ、真一郎です。 あ、美耶子ちゃん？ うん、こっちは別に大丈夫だよ」

「そうですか、それは良うございました。 琢磨様が心配なさっておいででしたので」

「あ、ただ……」

「何か？」

「雅ちゃんと涼が戻ってないんだ」

「戻って？ ……どういう事です？」

真一郎は、事の経緯を美耶子に説明した。

「……やまねえなあ、雨」

「……」

「雅、眠いのか？」

「うん、ちよっと……」

服はもう殆ど乾いてしまっているし、囲炉裏の火で小屋の中も大分暖まっている。

このまま眠ってしまったても風邪をひくような事は無いだろう。

「寝ちやえよ、無理に起きてなくていいから」

「でも……」

「俺の事は気にしなくていいよ。火を見ながら起きてるから、大丈夫だ」

「ゴメン……。疲れてるのかな？ アタシ……」

濡れて、走って、あれだけ叫べば疲れもするだろう。

そうでなくても、今日の雅ははしゃいでいたのだから。

雅は暫く座ったままの姿勢でユラユラすると、そのまま涼に凭れるようにして眠ってしまった。

「こら、人に寄りかかって寝るなよ。寝るならちゃんと横になれ

……と言つても、板の間じゃそもいかなえか」

だが、雅は既にスースーと小さく寝息を立てていた。

「……しょうがねえなあ、つたく」

涼はそつと雅の頭を抱えると、胡座をかいて自分の膝の上に置いた。

自分や真一郎なら雑魚寝でもどうという事はないが、お嬢様育ちの雅では、それは辛いだろう。

「足が痺れたら容赦無く降ろすからな」

涼は再び囲炉裏に向き直ると、火掻を使って囲炉裏の火を直した。

「どうでした？」

美耶子が電話を終えて病室へ戻って来ると、琢磨は心配そうにそう訊いた。

「雅と宇佐奈君が戻っていないそうです」

「戻って……と言つと？」

「肝試しの途中で雨に降られて、掃部関君達は別荘へ引き上げたそうなのですが……」

「そうですか……。では、どこかで雨を凌いでいるんでしょう」

しかし、美耶子は難しい顔をして考え込んでいる。

「どうかしましたか？」

「いえ……別荘の近くには、雨を凌げるような場所など無いのです。それに、雅は携帯電話を置いて出ています」

「では、二人は……」

「私、今から探しに行つて参ります」

探しに行くと言つても、当然美耶子一人で行く訳では無い。

先日の拉致の一件以来、美耶子には絶えずSPが付くようになった。

雅の搜索も、そのSP達が行うのだ。

「解りました……気を付けて」

「はい」

美耶子は出来るだけ静かに、そして急いで、琢磨の病室を後にした。

「ふわぁぁ……。さすがに俺も眠いな」

腕時計を見ると、もう時刻は午前二時を回っていた。

「と言つても、俺まで寝たんじゃ火が消えちまうし、何より点けっ放しじゃアブねえしな……」

と、涼が再び火を直そうとした時……。

『良助さん……』

「……ん？ 雅、何か言つたか？」

涼が視線を落とすと、雅は静かな寝息を立てて眠っている。

「気のせいかな……」

『良助さん……』

ゾクッ！ と涼の身体に悪寒が走った。

と言うより、ヒンヤリとした冷気が涼を包んでいるようだ。

「な、何だ？ この感じ……。それに、この声……空耳なんかじやねえぞっ!？」

『紗奈は嬉しいです、良助さん。 やつと帰つて来てくれたんですね……。 これでもう、ずっと一緒に居られるんですね……』

（さな？ 紗奈って確か、雅が言ってた橋の伝説の……）

涼がそう思ったのと同時に、目の前の壁に白い物が渦を巻き始めた。

さすがの涼も、これには腰が抜けそうになるほど驚いた。

「……おいおい、冗談じゃねえぞっ！ 雅っ！ 呑気に寝てる場合じゃねえっ！ 起きろっ！」

しかし、雅は全く起きる気配を見せない。

それどころか、涼の膝に乗っている雅の頭が、まるで岩のように重くなって来る。

涼が全力で立ち上がりうとしても、全然ビクともしない。

「くそっ！ ……おい！ 俺は良助じゃねえっ！ 人違いだっ！

俺は宇佐奈涼ってんだからっ！」

涼は、その白い渦に向かって、大声で怒鳴った。

『良助さん……また紗奈をいじめるんですか……？』

「だから！ 俺は良助じゃねえっての！」

『どうして……どうしてそんなに紗奈に辛く当るんです……？ 紗奈は、こんなにも良助さんを想っているのに……』

白い渦はそう言って、すすり泣くような声を上げた。

生きている人間相手なら慰めてもやりたくなるが、この状況ではそんな気分になれる訳もない。

「ちょ……ちょっと待ってくれよ！ ホントに人違いなんだから……」

『嫌です……紗奈はずっと待っていたんです。 もう待つのは嫌……』

逃げ出そうにも雅を置いていく訳にもいかないし、その雅が重しになっていて動ける状態でもない。

やはりここは、この幽霊（？）を説得する以外に、助かる術は無さそうである。

「そんな事言われてもなあ……俺、ホントに良助じゃねえよ。 ほんら良く見てみな？ 顔が違うだろ？」

そこにいる人に見せるかのように、涼は自分を指差して『な？
な？』などやっている。

さすがに馬鹿げているようにも思えるが、現実には目の前で起こっている事を認識してしまえば、こうせざるを得ないのである。

だが……。

『いいえ……貴方の心は良助さんそのもの……。私には解ります
……だから、貴方は良助さんです……』

相手には全く通じていないようである。

「俺の……心だあ？」

『貴方は想う人が在りながら、別の人を想っている……』

「何を言って……！」

『連れて行きます……あの時のように……。今度こそは永久に添
い遂げましょう……』

『涼……』

紗奈は、涼の腕を渦の中へと引き込み始めた……。

涼……涼……！

「涼！ しっかりしなさいっ！」

「おい、涼！ 目え開ける、コラ！」

「ん……。利恵……真！？」

涼はガバツ！ と起き上がると、左右を見回した。

暑い夏の陽の光が涼の顔を照らす……つまり、ここは外だという
事だ。

見ると、自分の周りには心配そうに自分を見下ろす、いつもの面
々が……。

「……紗奈は？ 紗奈はどうしたっ！？」

「はあ？ 何言ってるんだお前、寝惚けてんのか？」

「人に散々心配かけといて、女の夢見てるなんていい度胸じゃない

……」

呆れ顔の真一郎の隣りで、利恵は頬をピクピクさせている。

「夢……？ そうだ、雅は！？」

「あっち」

真一郎が指差す方に目を遣ると、仏頂面の雅が美耶子と一緒に立っていた。

「雅、無事だったか！」

「無事じゃない！ まったく……酷い目に遭ったわ」

「紗奈に何かされたのか？」

「紗奈あ？ 何言ってるのよ、宇佐奈君よ！ 落雷で吹き飛ばされたの憶えてないの？」

雅の話によると、雨が降り出してすぐ、雨宿りをしていた木のすぐ近くに落雷があつて、

その衝撃で、涼は吹き飛ばされたと言ふのだ。

言われてみると、見るも無残な木が何本がある。

「も……怖い我慢して、宇佐奈君が濡れないように岩の陰まで必死に引つ張ったんだからあつ！ お蔭でアタシが濡れるし、ドロで汚れるし……散々よ！ おまけに全然目を覚ましてくれなくて、心配したんだからね！」

「岩つて……小屋は？」

「そんなもんが都合良くある訳無いでしょ？ 漫画じゃないんだから……」

涼は段々頭が混乱して来た。

雅を引つ張つて小屋まで走つて、囲炉裏に火を点けて、雅が眠つて、紗奈に襲われて……？

「ちよ、ちよと待て！ 一体どこからが夢なんだ？ 確か、橋を渡ろうとしてたところで雨が降つて来て……」

「橋なんて無いわよ？」

「へ？」

雅が指差す方を見ると、そこは断崖絶壁になっており、『危険！』の文字が踊る立て看板の傍にはロープが張ってあった。

「危ないからそっちに行っちゃダメって言ってるのに、宇佐奈君、ボクっとして歩いて行くんだもん」

「だって、橋を渡った先のお社に……」

「お社は崖の手前の右側。ホントにどうしちゃったの？」

しかし、橋は確かにあった筈……。

涼は自分の顔をバシバシと叩き、考え込んだ。

「橋……そう言えば、ここには昔、橋があったそうです」

不意に、美耶子が思い出したように言った。

「けれど、あまりにも心中事件が多かったのと、新しい橋が出来た為に取り壊されたとか……」

「心中？」

「ええ。御爺様から聞いた話しでは、男女が一緒に渡ろうとする、何故か揃って身を投げてしまうのだとか……」

「婆ちゃんも言ってたな……。みんながみんなじゃないけど、やたらとそういうのが多かったって」

『連れて行きます……。あの時のように……。今度こそは永久に添い遂げましょう……。』

紗奈は、そう言っていた。

そこで涼は、ふと思った。

一本きりの橋……。そこで出会えなかった二人……。突然消えた娘……。待ち続けた紗奈……。

一つの考えが涼の頭の中でまとまった。

「紗奈は……。良助を橋から突き落とした……。のか？」

そこには、こんな言い伝えがあるそうだ。

紗奈の社は一緒に参れ、一緒に参るは夫婦の契り。

女が一人は神隠し、男が一人は生きては還れぬ……。

共に橋をば渡らんとせば、嵐起こりて黄泉の旅……。

「ところで、一体、今何時なんだ……？」

腕時計を見ようとすると、涼の腕にはクッキリと細い指の跡がついていた……。

激突 (Virtual Wars 2)

「会長！」

いかにも『仕事が出来そう』な感じの若い男性（三十代前半くらいだろう）が息せき切って部屋に飛び込むと、それを見て少々苛立ったように、会長と呼ばれた男が大きな机の向こうから、その若い男性を一瞥した。

見た感じは五十代前半といったところだろうか？

撫で付けた髪は白い物が混じり始めてはいるが、キツチリと後ろへ流され、スリムな体型で、英国製のスーツをそつなく着こなしている。

『紳士』といった形容がピッタリ来る感じだ。

「水無月君、もう少し静かに入って来られないのかな？ 物事は須く上品に、そしてスムーズに行う物だと教えてあつた筈だが？」

座り心地の良さそうな黒い革張りの椅子に身体を預けたまま、その性格を表すように整えられている口ヒゲを摩り、男はその年齢に見合わない、鋭い視線を水無月に向けた。

「も、申し訳ありません。ですが、緊急事態なのです！」

「ほう？ 君がそこまで慌てるとは珍しいな。それで、その緊急事態というのは？」

「登内による、我が社への買収工作です！」

「そうか……また始めおつたか、登内大蔵（とのうちたいぞう）め！」

「如何致しましょう、会長」

「無論、即刻反撃開始だ！ この一之瀬棗（いちのせ なつめ）を甘く見たらどうなるか、骨の髄まで思い知らせてくれるっ！」
棗はすぐさま受話器を持ち上げると、あちらこちらへと電話をかけ始めた。

しかしながら、その様子は一之瀬コーポレーションの総帥として

は、些か品位に欠けていたかもしれない……。

一方、登内グループの本社でも、幹部クラスの社員達が、何やらあたふたと駆け回っているところだった。

「はっはっは！ 一之瀬めが、今頃慌てても既に手遅れだ！」

こちらにも、やはり五十代前半であろうと思われる男が、大きな椅子に身体を預け、肩を揺らしながら心底楽しそうに笑っている。

「ですが会長、我が社の損失も樂觀出来ない物になる可能性があります。今回の件は、やはり手を引かれた方がよろしいかと……」

「控えんか、神部！ 差し出口を挟むでないわっ！」

「申し訳ありません……」

大蔵に一喝され、神部と呼ばれた秘書らしき女性（二十代後半くらいだろう）は、二、三步下がり、頭を下げた。

ウェーブのかかった栗色の長い髪が、頭を下げた時にフワリと揺れた。

その声の大きさと同様に、大蔵の身体は同年代の男性と比べたら、かなり大きな部類に入るだろう。

と言っても、大蔵は決して肥大漢ではない。

その大きさは、鍛えた結果による物だ。

羽織袴のその姿からは、短く刈り込んだ髪型や厳しい表情も相まって、『軍人』を連想させる。

「ふふふ……今回は私の勝ちだな、棗！」

「やった〜！ 今日はアタシの勝ちですよ、美奈さん」

雅のPCのモニタ画面には、悔しそうに地面を叩くキャラが映っていた。

どうやら雅は、美奈とオンライン格闘ゲームをやっていたらしい。チャット画面には、美奈からの再戦を求めるメッセージが表示されている。

「へっへ」。今日のアタシは絶好調ですからね、何度やっても負けませんよ」

早速それを受ける旨のメッセージを打ち込み、雅は再び画面に向かって集中し始めた。

一方、美奈はと言うと、

「うーん……今日の雅さんはお強いですね。このままでは、また負けてしまいますわ」

と、PCの前で腕組みをして、難しい顔で次の対戦のシミュレートを始めた。

「この間、特訓しましたからね。俺の教えたコンボを早速使ってるし」

「あら……貴方は私の味方をして下さらないのね」

後ろから覗き込む真一郎に対して、美奈は少し拗ねたような声を出した。

そう、今、美奈は真一郎の部屋にいるのだ。

「まさか！ 俺はいつだって美奈さんの味方ですよ」

「では、何か対処法を伝授して下さいませんか？」

「うーん……このままだと、今度は俺が美奈さんに太刀打ち出来なくなるなあ……」

そうは言いつつも、真一郎が美奈の頼みを断れる筈も無く、奥の手とも呼べる操作法を教えようとした時、

「ちよつと失礼」

美奈の携帯電話が鳴った。

とりあえず、電話が終るまで雅には待ってもらわなければならない。

美奈は、PCの前で電話を受けつつ、雅に対して少し待つようとメッセージを送った。

すぐに雅からの了解がチャット画面に出たのだが……。

「……何ですって！？ それで、お父様は……それでは駄目ですわ！ そんな対応の仕方では足元をすくわれます！ 水無月さん、私

が到着するまで持ちこたえて下さい」

美奈は電話を切ると、少し慌てた様子で立ち上がった。

「どうかしたんですか？ 美奈さん」

「ごめんなさい、真君。今日は、これで失礼させて頂きますわ」

「何かあつたんですか!？」

「……登内グループからの攻勢がかかっていますの。このままでは、一之瀬コーポレーションの存亡に関わります」

「登内から？ そうか、対立企業ですもんね……」

このところ、美奈と雅はネットを通じて仲良くなつてはいるが、それはあくまでも『個人』としてだ。

企業体としての登内と一之瀬は、相変わらず対立の図式を描いている。

「俺が送ります。車よりも、バイクの方が早く着けますよ」

「……そうですわね、お願いしてもよろしいかしら？」

「喜んで! ……つとその前に、雅ちゃんに言つとかないと」

真一郎は『今日は都合が悪くなったので、これでおしまい』

とメッセージを送り、美奈にヘルメットを手渡すと、アパートから飛び出した。

そして階段下の駐輪場からバイクを引っ張り出し、跨ると同時にエンジンをかけ、美奈を後ろに乗せると即座に走り出した。

その後を、美奈を乗せて来た運転手が慌てて車で追い始める。

『貴方のヘルメットは?』

「生憎、うちには一個しか置いてないんですよ」

『でも、それでは貴方が危険でなくて?』

「大丈夫! 美奈さんが一緒にいる限り、俺は不死身ですから! それより、しっかり掴まって下さいね!」

『……はい』

美奈は真一郎の腰に腕を回し、その広い背中に身体を預けた。

「どうしたのかな? 美奈さん。急に都合が悪くなったなんて……」

…」

PCのモニタの前で、雅は考え込んでいた。

普段の美奈なら、こんな風に慌てて中断するような真似はしない。いつもは忙しくても、それなりのメッセージを残してくれるのに、今日はかなりぞんざいなメッセージだった。

「何かあったのかな……？」

「雅、いますか？」

ドアを軽くノックしながら、美耶子が声をかけて来た。

「何？ 開いてるから入って来ていいわよ」

雅がそう言っていると、例の如く静かにドアが開き、美耶子が顔を出した。

「どうしたの？ 入ればいいのに」

「あまりゆつくりもしてられないのです。わたしはこれから本社の方へ行って参ります」

「本社？」

本社と言えば、当然、登内グループの本拠地である。

普段、美耶子も雅も滅多にそこへ足を運ぶ事など無い。

高校生である二人には、縁遠い場所なのだから当然である。

「先程、神部さんからお電話がありました。何でも、お父様がまた無茶な事をなさっておいでとか」

「……って事は、お父さん日本に帰って来てるんだ。今度は何したの？」

雅は軽く溜息を吐くと、またかと言う顔をした。

実際、大蔵は登内グループをここまでの大きさにする為に、かなり危ない橋も渡って来ている。

本人は楽しんでやっている節もあるが、雅には何が楽しいのだからサッパリ見当もつかない。

「またどこかの会社の買収を画策しておいでのようなですよ？」

「呆れた……一体どこまで大きくしようと思ってるんだろ」

「ですが、今回の相手は一筋縄では行かないらしく、お父様がムキ

になっておいでのようです。 取り返しがつかなくなってしまう前に、わたしが行ってお父様を諫めて参ります」

「ご苦労様。 まあ、お父さんは姉さんには弱いから、すぐに収まるでしょ」

「雅も一緒に行きませんか？ 久しくお父様ともお話ししてないでしょう？」

「あ、じゃあ佐伯さんも誘っていい？ 帰りにみんなどこか寄ろうよ」

「そうですねえ……それも良いですね。 では、ご連絡を差し上げてください。 わたしは車を回しておきますから」

「はい」

幸い、雛子も自宅で暇を持て余していたようで、雅からの誘いの電話に快く応じた。

話しの流れで涼も誘おうと雅は言ったのだが、生憎、涼はアルバイトに行っていて不在であった。

しかし、それは涼にとって、ある意味幸運だったかもしれない……。

「お嬢様！ お待ちしておりました！」

本社社屋の入り口付近で待っていた水無月が、美奈を見つけて駆け寄って来た。

その様子からも、のつぴきならない状況である事が見て取れる。

「状況は？」

脱いだヘルメットを真一郎に手渡しながら、美奈は水無月に問い掛けた。

ここに来るまで、かなりの時間、排気ガスに晒されていたにも拘らず、美奈の長い髪はそのしなやかさを失ってはいない。

「芳しくありません。 会長も意固地になっておられる様子で……」

「水無月さんの進言にも耳を貸さないという事ね？」

「はい……。あとはお嬢様にお願ひするしかございません。プライベートのお時間を割かせてしまうのは申し訳無いのですが……」
「構いませんわ。ここが無くなってしまったら、プライベートどころではありませんもの」

美奈は二、三步進んだ所で足を止めると、急に何かを思い付いたように、バイクの向きを変えようとしている真一郎に声をかけた。

「はい、何ですか？」

「貴方のお知恵をお借りしたいの。よろしいかしら？」

「俺の知恵……ですか？」

「お嬢様！ お言葉ですが、素人にそのような真似が出来る筈が……」

……
水無月は慌てて言ったが、

「彼は有能です。何しろ、この私が認めた唯一の殿方ですから」

美奈は涼しげな表情のまま、真一郎の腕を取りながら薄笑みを浮かべている。

「こ……こちらの方が……ですか!？」

水無月が驚くのも無理は無い。

体格は良いが、どう頑張ってみても、目の前の男は成人しているようにも見えない。

美奈の知り合いだというのなら大学生くらいだろうか……？ と水無月は思った。

と同時に、今まで男など近付けようとしなかった美奈が、唯一認めた男というのにも興味が湧いた。

「いかがかしら、真君。それとも自信が無い？」

「どうですかね？ まあ、面白そうではありますけど」

「結構です。では、行きましょう」

「美耶子お嬢様！ 雅お嬢様も……ご足労をおかけして、申し訳あ

りません」

さすがに登内グループ会長の秘書をしているだけあって、神部には美耶子と雅が一目で見分けられるようだ。

もつとも、最近の二人は着る物の好みが変わって来ているのか同じ服を着る事が少ないし、雅は髪を短くしているので、二人を初めて見る人間にも見分ける事は可能だろう。

「おつきな会社だね……ビックリしちゃった」

登内グループ本社社屋を見上げて、雛子は目を丸くしている。

通常、関係者以外は敷地内に入る事すら出来ないのだが、敷地の外から見てもその大きさには驚かされるだろう。

「まあ、本社だからね。それに、屋上にヘリポートなんて作ったもんだから、それなりの大きさが無いと困るんでしょ？」

「よろしければ後程ご案内して差し上げますよ？ 多分二、三機は空いていると思いますから、空のお散歩でも致しましょう」

「に、二、三機って……」

一体、普段は何機のヘリが常駐しているのだろうか？

「あの……そちらのお嬢さんは？」

「ああ、佐伯さんはいいのよ。アタシ達の友達だから。 帰りにどこかへ遊びに行こうと思って連れて来たの」

「あ、佐伯雛子です。 初めまして」

雛子がペコリとお辞儀をすると、

「そうですね、お嬢様の……。 私は神部と申します。 以後、お見知りおきを」

神部もそれに合わせて会釈をし、にっこりと微笑んだ。

業務用の笑顔とは違う、優しい微笑だった。

「じゃあ、さっさとお父さんを懲らしめて遊びに行こう」

「そうですね。 では、参りましょうか」

かくして、登内大蔵討伐隊は意気揚々と、会長室への直通エレベーターに乗り込むのであった。

「どうです?」

「うーん……こりゃあ、かなり形勢が不利ですね……」

「こらあ! 美奈、これは一体何の真似だっ!」

真一郎によつて椅子に括り付けられてしまった棗は身体を激しく揺さぶり、コンピュータの前に陣取る美奈と真一郎を、交互に睨みつけながら文句を言った。

さすがに大企業の会長ともなると、その視線には凄い迫力がある。「貴様! この私にこんな真似をして、タダで済むとは思っていないっ!」

棗は、その視線を真一郎にだけ向けている。

「そ、そう言われても、俺も美奈さんの命令には逆らえませんし……」

「お父様……例えお父様と言えど、この方に何かしたら」
美奈は、ツカツカと縛られたままの棗に近付き、

「私、容赦はしませんことよ……?」

ゾットするような冷たい視線と共に、棗の耳元で囁いた。

（こ、こういう所だけは、母親に似おつて……!）

棗が何も言い返さないのを了解したと受け取って、美奈は再び真一郎と共にモニタ画面に目をやった。

「ふむふむ……類似した事業を行う企業だけを対象にしてるみたいですね。けど、単に利益率増加だけを考えた物じゃ無さそうです」
「目的は何かしら?」

「それは判りませんが、少なくとも一之瀬コーポレーションにそれなりのダメージを与えるのが目的のように思えますね。いくら登内グループが潤沢な資金を保有してるとは言え、買収にあたつて一切の借り入れをしていません。だから、本気で潰しにかかっているとは思えないんですよ」

真一郎の分析を聞き、棗は『おや?』といった表情になった。
（ほう? この男……なかなかどうして、鋭い目を持っておるわ……）

…)

少し様子をみようと考えを変えた棗は、真一郎をじつと見始めた。果たしてこのあと、どんな行動をとるだろうか……？

「では、貴方ならどう対処します？」

「そうですね……俺なら、こうします」

「美耶子！ 雅！ これは一体何の真似だっ！」

先程よりも一層大きな声で怒鳴る大蔵を押さえつけているのは、右近と左近の両名だ。

当然、その命令を下したのは美耶子である。

「右近！ その手を放さんかっ！」

「申し訳ありませんが、そのご命令に従う訳には参りません」

「左近！ 貴様、私が拾ってやった恩を仇で返す気かっ！」

「いいえ。 お館様に受けた恩義……この左近、死んでも忘れは致しません」

「ならば私の命令に従わんかっ！」

大きな身体を左右に揺らし、大蔵は必死に逃れようとするものの、そこはさすがにSP部隊の要の二人。

そうそう簡単に逃げられない。

「恐れながら……我らは美耶子様と雅様直属のSP。 お二方以外の方の命令には従えません」

「そう条件付けされたのは、お館様であつたと記憶しておりますが？」

「ゆ……融通の利かん奴らめえ……！」

「我ら二人、身命を賭してお嬢様方を御護りするのが使命」

「例え世界を敵に回しても、お嬢様方の命には叛けませぬ」

右近、左近共に大蔵が引き取り、子供の頃から育てた、いわば息子のような者達である。

登内家SP部隊には、そういった境遇の者達が多い。

故に、大蔵に対する忠義心は、ビジネスとしてSPになっている者達とは一線を画す物がある。

しかしながら、それは大蔵の懐の深さを示す物でもあるだろう。

「さて、状況は……うわ、何よこれ！ 滅茶苦茶じゃない！」

コンピュータのモニタを見た瞬間、雅が絶望的な声を上げた。

どのデータを見ても、明らかに登内の側が圧倒的不利の状況に追い込まれている。

「おかしいですね……神部さんのお話しでは、こちらが幾分有利な展開だという事でしたのに」

「誰か向こうにキレ者がいるみたいね……どんどん押し返されてるわ。何とかしなきゃ……でも、ここから挽回するのは難しいなあ

……」

「うーん……あ、ねえ」

雅の後ろからモニタを覗き込んでいた雛子が、何かを思いついたように雅の肩を叩いた。

美耶子は……目の前で数字が変わることは判っても、それが何を意味しているのか解らず、ただ黙って見ているだけだ。

「雅ちゃん、ここの収支を調整してみたらどうかなあ？ それと、こつちの効率が悪いから、こつちのお店と合併させて……」

「成る程……佐伯さん、いつの間にそんな事が解るようになったの？」

「この間、真君が経営シミュレーションのゲームを貸してくれたの。意外と面白くて、徹夜しちゃった」

短距離走の時の再現だ……と、雅は思った。

とにかく雛子は飲み込みが早い。

おまけに、一度自分のモノにした事に更に磨きをかけ、一流の域にまで昇華させる技量を持っている。

「じゃあ佐伯さん、アタシに指示を出して。アタシは打ち込みに専念するから」

「うん、わかった」

「姉さん、そつちに結果をプリントアウトするから、どんどん計算しちゃって！」

「はい、解りました」

右近と左近に押さえ付けられながら、大蔵はその様子を感じて見ていた。

小さい頃、雅は大蔵に反発してばかりいた。

それは構ってもらえない寂しさから来る物だろうとは解っていたが、解っていないながらも、大蔵には娘を構ってやるだけの時間は取れなかった。

美耶子は、そんな雅を大事にしていた……父親の分まで。

その娘達が、こうして自分の職場に来て、父親にも勝るような仕事をしている。

「右近、左近」

「はい」

「何でしょう、お館様」

「娘と友達に茶を出してやってくれ」

「……かしこまりました」

「最高級の物をお持ち致しましょう」

ごくごく普通の町並みにはそぐわない、リムジン仕様の高級車が二台、女性と共に何人かの黒服の男を降ろすと、何処かへ走り去った。

「美晴（みはる）さん、お待たせしてごめんなさい」

一目見ただけで、その辺の主婦とは違う世界で生きているだろうと判る、そんな雰囲気醸し出している女性が、待ち合わせの相手の女性に微笑みながら歩み寄った。

「あらあら、馨（かおる）さん。それほどありませんよ」

見た目では判断出来ないが、二人とも年齢は四十代に手が届くかどうかといったところだろう。

「相も変わらず無粋な車しかなくて……ちょっとしたお出かけに使うには、少々気が引けますわ」

「ウチも似たようなものです。もう少し可愛らしい車があると良いのですけどねえ」

「しかも、出かける時には必ずお供がついて回りますし……。この状況は何とかしたいと、常々思っているのですけれど……」

「これも皆さんのお仕事ですから、仕方ありませんよ。ところで今日は棗さんは何をしておいでなのですか？」

「さあ？ 私、棗のする事には興味ありませんの。それより大蔵さんは、相変わらずお忙しいのかしら？」

「今日こちらへ戻ったと思ったら、すぐに何か始めていましたねえ」「まったく……二人が日本にいると、必ず始まりますわね」

馨はこめかみに手を当てると、やれやれといったように軽く首を左右に振った。

もうお判りだろうが、馨は一之瀬棗の妻であり、美晴は登内大蔵の妻である。

「いつその事、国外永久追放にしていましようか？」
美晴は胸の前で『ポン』と手を打つと、ニコニコしながら言

った。

「そうですね……その方が静かで平和かもしれませんわね、検討しておきましょう。では、そろそろ行きましようか」

「はい、参りましよう」

二人が歩き出すと、それに従うように黒服の男達も移動を始めた。今日は二人とも楽しみにしていた芝居が上演される。

大学時代の先輩が旗揚げした劇団の公演初日の舞台だ。

演目は、当時二人も在籍していた演劇部で演じた事もある物に、新たに書き起こしたストーリーを加えた物であると言う事で、二人の期待は弥が上にも高まるのである。

「どのようなお芝居になるのか、楽しみで昨夜は眠れませんでしたわ」

馨は、少し眠たそうな目をして言った。

「わたしもです」

それは美晴も同様のようで、おっとりした口調が更に緩い物になっている。

「けれど……殿方というのは、幾つになっても子供じみた所がありますのね」

「そうですね。でも、そこが良い部分なのかもしれませんよ？
そういった物の無い方には、失礼ながらあまり魅力を感じませんし」

「あり過ぎるのも良し悪しですわ……」

そう言う自分達とて、気分はすっかり大学時代に帰っていると云うのに、それはどうやら除外されるらしい。

「まあ、棗にとつては、会社もオモチャのような物なのでしょうね」
「度量が大きいのですねえ、棗さんは」

「あら、大蔵さんも同じようなものでしょう？」
「どうなのでしょう？でも、娘に甘い所は棗さんと同じかもしれませんね」

「そう言えば、美耶子さんは咲姫にいらっしやるかと思って楽しみにしてましたのに、黎明に進学されたのよね？どうして？」

馨が言うと、

「雅が黎明を選んだと知ったら、急に進路を変えてしまったんですよ。あの子は妹と一緒にいいと、小さい頃から言う子でしたからね」

美晴はクスクスと笑いながら答えた。

「小さい頃に一度お会いしたきりですから、私の事は憶えていないでしょうね。……そうだわ、今度は娘達も一緒に連れて来ましょうか？」

「それは素敵ですねえ。是非、そう致しましょう」

二人の前方に、目的地である小さな劇場が見えて来た。

「ふむ……」

「会長？ 如何なさいました？」

難しい顔をしてモニタを見つめている棗に、水無月は恐る恐る声をかけた。

話しかけるタイミングを誤ると棗の気分を害してしまうので、この辺は特に気を遣う部分なのだ。

「先刻の男……名前は何と言ったかな？」

「掃部関真一郎様とお伺いしましたが」

「全て調べ上げる。……あの男に関する事柄、委細構わず何もかも全てだ！」

「は、はい！」

棗に言われた事を即座に行動に移す為、水無月は会長室を後にした。

それは単に会長の命令だからだけではない。

水無月自身も、真一郎の事を知りたいという欲求に駆られたからだ。

あの美奈にあそこまで信用される男が何者なのか……それは美奈を知る者であれば、誰もが思う事であろう。

「美奈も、いよいよそういう年齢になったか……いざそうになると寂しいものだな」

そう呟くと、棗は秘匿回線の電話を手にした。

大蔵は椅子に深く腰掛け、夕暮れに染まる窓の外を眺めていた。

その目には一切の厳しさが無くなり、穏やかに年輪を重ねた父親の表情が漂っていた。

「神部……お前がここに来て、何年になるかな」

振り向く事も無く、大蔵は窓の外を見つめたまま言った。

「はい。お嬢様方が小学校に上がった年ですから、十年です」

「十年か……その間、私は父親らしい事を一つでもしたかな……」
「どうでしょう？ 今度お嬢様方に、お訊ねになってみては如何です？」

神部は、そう言いながらクスリと楽しそうに笑った。

「怖い事を言うな……」

大蔵が苦笑すると同時に、秘匿回線での着信を示す小さなランプが音も無く、大きな机の片隅に点った。

神部はそれを見ると軽く会釈をし、大蔵が何も言わない内に、無言のまま会長室を出て行った。

こついつた部分は、さすがと言うべきだろう。

「……私だ」

『いちいち偉そうに出るな！ このタヌキめ！』

「いきなり何だ？」

『今日の一件、いつもの貴様の手口では無かった。……誰か雇ったのか？』

「それは私の台詞だ。貴様では、あそこまでの対応は出来まい。

一体どこから引き抜いて来た？」

『フン！ 誰が貴様になど教えるものか！ ふふふ……あと何年後かには、登内グループなど跡形も無く消え失せるぞ』

「ふん！ その台詞、そっくりそのまま貴様に返してやるわ！ 数年後、貴様の泣きつ面が見られると思うと、今から楽しみで寝不足になりそうだわい！」

子供のように一頻り言い合いをしたあと、大蔵の方から電話を切った。

どうやら女性陣とは対照的に、男性陣の仲はあまり良くはないようだ。

「美耶子と雅……どちらが跡を継いでくれるやら。いや、連れて来る男にもよるか……私の眼鏡にかなう男を連れて来れば良いが……」

大蔵は少し寂しそうな表情を浮かべ、再び視線を窓の外へと向け

た。

夕日が照らす町並みを、小高い丘の上から眺めている男女がいる。その傍らにはタンクに流星のイラストが描かれ、それ以外の部分に漆黒の塗装を施されたバイクが停まっている。

「今日はごめんなさいね、私の都合で一日潰させてしまつて……」

「気にする事ありませんよ。俺は美奈さんのお役に立てて嬉しいんですから」

「……ありがとう」

美奈は少しだけ真一郎との距離を縮め、その肩に頭を寄せた。

優しく吹いた風が、美奈の髪の手と共に真一郎の鼻腔をくすぐった。

「貴方は将来、何かやりたい事つておありですか？」

「そうですね、たくさんありますよ。夢はテノコ盛りです」

「……その中には、私に関係する事も入ってますか？」

「勿論入ってます。……一番上に」

一瞬の沈黙の後、夕日が映し出す二つの影は、やがて一つに重なった……。

「雅様、無茶を仰らないで下さい！」

「何でよ！ あんなに広いんだから降りられるでしょ！」

美耶子の申し出を受け、雛子は空の散歩へと連れて来られたのだが、ヘリの中は、ある種パニックに近い状況に陥っていた……。

「どこでも着陸出来るという訳では無いのです。ちゃんと許可を得ませんと……」

「雅ちゃん！ タクシーじゃないんだから、気軽に止められないんだよお！」

「アタシはここで降りたいの！ 左近！ あんた、アタシの命令に

は従うって言つてたでしょ！ 命令よ、着陸しなさい！」

「時と場合によります！」

「むう……いいわよ、アタシがやるから操縦替わりなさい！」

「き、危険ですから操縦桿に触らないで下さい！ これはフライト・シミュレーターとは違うんですから！」

「世界を敵に回してもつてのは嘘だったのか、こら！」

「美耶子さん！ 雅ちゃんを止めてっつ！」

「佐伯様、お静かに願います。 美耶子様は、ただ今お休みになつておいでです」

右近の言葉に美耶子の顔を良く見ると……完全に熟睡している。

実に穏やかで平和そうな寝顔だが、今この瞬間にはそれが腹立たしくも感じられてしまう。

「な、何でこの状況でスヤスヤ眠れるの……？」

「左近、アタシにやらせなさいってば！」

「いけません！」

一方その頃……。

「あれ？ ヒナのやつ、いないのか？ 変だなあ……今日は晩飯作ってくれるって言つてたのに」

鍵のかかった佐伯家の玄関の前で、涼は立ち尽くしていた。

「参ったな……今日はお袋も出かけてていないし、食いに行くって言つても給料日前だから金が無いし……」

宇佐奈家の恒例として、日曜、祭日には一切の食料は備蓄されていない。

真一郎に奢ってもらおうと電話をしても、携帯電話の電源が切られているらしく、何度かけ直しても繋がらない。

かと言って、生活費を切り詰めている琢磨にタカる訳にもいかない。

最後の手段として登内家に電話をしても、美耶子も雅も不在であ

った。

「腹減った……ヒナ、早く帰って来てくれよう……」

こうして、何気ない日常は過ぎて行くのであった……。

美耶子乱心！？

それは何も変わらない、いつもと同じ朝の事。

「皆さん、おはようございます」

いつものように、美耶子が挨拶をしながら教室に入ってきた。クラスメイトの一人一人に頭を下げ、キチンと挨拶をしている。最初はこれに戸惑う者もいたのだが、『これが美耶子なのだ』という事が浸透してからは、当たり前前に受け入れられている。

「琢磨様、おはようございます」

「おはよう、美耶子さん。……ん？」

静々と歩み寄って朝の挨拶をする美耶子に、琢磨は不思議そうな視線を向けた。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いや、きっと俺の気のせいでしょう。ところで、今日は雅さんがまだ来ていないようですか？」

「あの子ったら風邪を引きまして……大事を取って、今日は欠席させたのです」

「そうですか。無理をして酷くしては大変ですから、ゆっくり養生させてあげた方がいいでしょうね」

「はい」

「ぐっも〜にん、えびばでい〜」

これまたいつものように、真一郎が浮かれながら教室に入ってきた。

元気良くクラスメイトに挨拶をしながら、琢磨の傍へとやって来る。

「美耶子ちゃん、おっはよ〜ん。朝から二人して、仲良しオーラ全開ですな」

「おはようございます。掃部関君は今日も無駄にお元気ですね」
「……え？」

「朝の爽やかな雰囲気を粉微塵に打ち壊すその無粋さは、一体どこから来るのでしょうか？ 成長過程で何か問題でもあったのでしょうか？」

美耶子は静かにそう言うと、自分の席に腰を下ろした。

顔はいつものようにニコニコしているが、発する言葉には、かなり毒が含まれている。

真一郎は恐る恐る美耶子に近付き、顔を覗きこんだ。

「ねえ、美耶子ちゃん……今朝は機嫌悪い？」

「いいえ？ そんな事はありませんよ？」

「そ、そう？ 俺の気のせいかな？ なんか、笑顔の中に陰があるような気が……」

「相変わらず掃部関君は下らない事を仰いますねえ……脳が腐っているのですか？ それとも前頭葉が入っていらつしやらないとか。

あ、もしよろしければ、うちの病院に入院しますか？ 今ならベツドの空きがございますよ？」

「……」

どうやら美耶子の言葉に含まれている毒は致死量らしい。

真一郎は胸を押さえて俯いてしまった。

「み、美耶子さん、今のはちょっと……。いくら相手が真とは言え、少々言い過ぎですよ」

「あら？ わたし、何かいけない事を言いましたか？」

「確かに騒がしい奴ではありますが、何もそこまで言わなくても……」

……

「琢磨様、そんなつまらない事を気にするよりも、せっかく静かになったのですから、何かお話致しましょう」

「うわああん！ いいんだいいんだ、どうせ俺なんてええーっ！」

真一郎が両手で顔を覆って駆け出すと、丁度教室に入ってきた涼とぶつかった。

真一郎は、そのまま涼に縋り付き、その胸に顔を埋めた。

「何だよお前は朝っぱらから……気持ち悪いから離れろ！」

「だって……だって、美耶子ちゃんがああゝっ！」

「美耶子さんが何だよ？」

「俺をいぢめるんだよおおっ！」

「はあ？」

涼は真一郎を押し退けると、琢磨の隣で楽しそうに笑っている美耶子を見た。

「……？」

「俺は……俺は、もう立ち直れない……」

「じゃあ邪魔だから、その辺に埋まつてろ」

涼が真一郎にとどめを刺すと同時に、チャイムが鳴った。

そして、一時限目が始まってすぐの事。

「琢磨様……琢磨様……」

授業中だというのに、美耶子は小声で隣の席の琢磨をしきりに呼ぶ。

普段は授業中に私語などしない美耶子にしては珍しい事なので、琢磨は何事かと驚いている。

「どうかしましたか？」

「実は……わたし、最近悩んでいる事があるのです。相談に乗って頂けませんか？」

「それは構いませんが、今は授業中ですから、この時間が終わってからにしましょう」

「それではダメなのです！ 今すぐでなければ、この悩みは解決出来ません」

美耶子の必死な顔を見て、余程深刻な問題なのだろうと、琢磨は話を聞く事にした。

「それで、どうしたと言っんです？」

「琢磨様、お手を……」

「手？」

言われるままに琢磨が手を差し出すと、美耶子は即座にその手を

取り、あろう事が、そのまま自分の胸元へと運んだ。

「なっ！ ななな何をつ！？」

琢磨は慌てて手を引き戻し、狼狽しながら声を上げ、椅子を倒して立ち上がった。

当然、教室内の視線は琢磨に集中するし、そんな事をすれば教師も怒る。

「浦崎！ 何をしとるかっ！」

「すっ……すみませんっ！」

「何だ？ どうした、真っ赤な顔をして……熱でもあるのか？」

「い、いえ！ 何でもありません！ お騒がせして申し訳ありませんでした！」

あたふたと倒れた椅子を直し、顔を赤くしたまま座り直した琢磨を見て、美耶子は楽しそうにクスクスと笑っている。

「……？」

涼はその光景を見ながら、何やら考え込んでいた。

休憩時間に入って琢磨が席を立つと、美耶子もその後に続き、教室を出た。

真一郎は朝のショックからまだ立ち直れず、机に突っ伏したままだ。

まさかと思っていた相手から言われると、普段言われ慣れている言葉でも結構響くようである。

さすがに涼も気になつたらしく、真一郎の傍に付いている。

「美耶子さん、どこまで付いて来るんですか？」

「どこまでもです。 琢磨様の行かれる所全て、美耶子がお供致します」

「俺は、これからトイレに行くんですよ？」

「まあ！ それでは尚更お供しなくてはい！」

「そんな所まで付いて来てどうするんですっ！？」

「僭越ではございますが……お手伝いさせて頂きます」

「冗談じゃありませんっ！」

琢磨は美耶子から離れようと、全力で駆け出した。廊下を走ってはいけない……それは解っている。

決まりを守る事の大事さも理解しているのだが、今の琢磨はそれどころではないので仕方ない。

だが……。

「ば、馬鹿なっ!？」

「ほほほ。琢磨様、逃がしはしません」

琢磨が右に寄れば左側、左に寄れば右側と、美耶子は自在にコースを変えて、いつでも抜ける体勢になりながら琢磨に追走している。これはかなり余裕が無ければ出来ない芸当である。

「これは夢だ! そうに決まっているっ!」

いくら美耶子が早く走れるようになったとは言え、必死に走る自分の横に並べる訳が無い!

琢磨は走りながら自分の頬をバシバシと叩き、改めて隣を見たのだが……。

「夢ではありませんよ?」

やはりそこには、涼しげな顔をしている美耶子がいた……。

「うわあああーっ!」

恐怖にも似た感情が芽生えた琢磨は、意味不明な事を叫びながら更に懸命に走った。

そのままA組の前を駆け抜けて行く二人を教室内から見て、利恵と雛子が目を丸くしている。

「利恵ちゃん、今のって琢磨君だよな?」

「何やってるのかな? 琢磨君が廊下を走るなんて、涼が女の子追いかけるのと同じくらい、あり得ない光景よね……」

「誰かに追いかけられてるみたいだったけど」

「追いかけてる相手が問題ね」

「チラっとしか見えなかったけど、美耶子さんじゃなかったかなあ?」

「謎だわ……」

それから休憩時間の間中、琢磨は走り続けた……。

昼休みに入り、各生徒が食事の為の行動を開始する。

弁当持参の者、食堂へ行く者様々だが、基本的に涼達三人は食堂組だ。

「涼、早く行かんと混んでしまっぞ」

「さうで、今日は何食うかな？」

「俺は、あんまり食欲が無い……」

普段なら昼休み開始と同時に元気になる真一郎だが、今は席から立ち上がる姿にも全く力が無い。

ガツクリと肩を落としたその姿は、痛々しさまで感じさせる。

「何をそんなにグツタリしてんだよ、お前は」

「まだ今朝の事で落ち込んでいるのか？ まあ、あまり気にするな

美耶子さんも本心から言った訳ではあるまい」

「本心ですよ？」

いつの間にか三人の背後に立っていた美耶子が、琢磨の腕を取りながら言った。

「美耶子さん、一体どうしたんです？」

「何がですか？」

「今日の美耶子さんは変ですよ。何かあったんですか？」

「いいえ？ わたしは至って普通ですよ？ それより皆さん、よろしければ一緒にお食事しませんか？ 今日は我が家の料理人に、皆さんの分も作らせたのです」

「へえ、そりゃいいな。真、旨い物でも食べば元気も出るだろう
俺は野生児か……」

「あ、ついでに高梨さんと佐伯さんにも、声をかけてみましょう」
「ついで？」

何とも美耶子らしからぬ物言いに、涼も琢磨も不思議そうな顔をしている。

「さあさ、参りましょう」

美耶子は琢磨の腕を引っ張りながら、先頭に立ってA組へと向かった。

「……要らない」

利恵は嫌そうな顔をして言った。

「あら、どうしてです？　とっても栄養があるのですよ？」

「それは知ってるけど、わたしは要らない……」

「食えばいいのに。　旨いぞ？」

「真君には美味しいんでしょうけど、わたしには合わないのっ！」

「わたしは、高梨さんの身体の事を思ってお勧めしているのに……」
固辞する利恵を悲しげな目で見つめながら美耶子は言った。

「そ、それは有り難いんだけどさ、わたしどうしても苦手なのよ、それ」

「お前、そんなに苦手だったのか、バナナ」

パクパクと料理を頬張りながら、涼が言った。

今日の昼食は、トウロン、広東バナナの揚げ餃子、バナナフライに焼きバナナ。

デザートにはバナナパンケーキにチョコバナナと、バナナ料理のオンパレードなのだ。

おまけに飲み物に至っては、バナナミルクにバナナ紅茶と、完全にバナナ尽くしである。

屋上の床面一杯に（と言うのはさすがに大袈裟だが）　広げられた敷物の上にあるのは、どこもかしこもバナナだらけだ。

ちなみに、その全てをここへ運んで来たのは、右近、左近の両名である。

「ねえ、ヒナちゃん！　料理にバナナ使うなんて邪道だよね？」

「ふむふむ……トウロンに使うなら、やっぱりサバ・バナナの方が合ってるね」

「ヒナちゃん……」

雛子は相変わらず研究に余念が無い。

その為、利恵の言葉など耳に入らないようだ。

「琢磨君、何とか言ってよぉ！」

「バナナを使った料理など初めてだが……これはこれで、なかなか美味しい物だな」

「……食べてるし」

「高梨さんも、食わず嫌いはいけません。何でも食べないと大きくなれませんよ？」

「わたしは今のサイズで満足してるから」

「胸のサイズには、若干の不満がありだと仰っていましたよね？」

「また古い話題を持ち出して来たわね……で、でも、バナナを食べたからって、胸が大きくなる訳じゃないしさ。それに、食わず嫌いじゃないのよ？ 一度食べたけど好きになれなかったんだから、無理に食べたなら拒絶反応が……」

「好き嫌いは尚更良くありません！ 右近、左近、高梨さんを押さえなさい」

ズリズリと後退る利恵を、右近と左近が両サイドからシツカリと腕を掴んで押さえた。

動けない利恵に向かって、美耶子はバナナ片手に迫って行く……。

「誰だって苦手な物の一つや二つはあるでしょっ！？」

「では、頑張って克服しなければなりませんね。はい、あゝん」
「助けてええーっ！」

「ケホケホ……雅、何度ですか？」

布団の中から、少ししゃがれた声で美耶子が訊ねた。

「三十八度二分。やっぱり明日も休まないとダメよ、姉さん」

体温計をケースに戻すと、雅は美耶子の汗を拭い、額に乗せてあ

ったタオルを取り替えた。

吸い呑みで水を含ませると、喉が痛むのだろう、美耶子は少し辛そうにしながらも、コクコクと飲んだ。

「はあ……節々が痛くて、辛いです……」

「熱があるからよ。いい？ ちゃんと明日も大人しく寝ててよ？ 後の事はメイド長にお願いしておくから」

「心細いです……。 雅、明日は貴女もお休みして、傍にいて下さい……」

「子供じゃないんだから、風邪くらいで弱気にならないでよ」

「ああ……何て冷たい事を言う子なんでしょう……。 病気の姉を放っておくなんて、心が痛まないのでしょうか……」

美耶子は、今にも『よよよ』と泣き出さんばかりに言った。

「付き合ってられないわ……もう少ししたらお医者さんも来てくれるからさ。 注射の一本も射ってもらえば、すぐに治るわよ」

背後で美耶子は何か言っていたが、それには取り合わず、雅は後ろ手にドアを閉め、美耶子の部屋から出た。

途端に、雅の顔が緩んだ。

「うぷぷ……これで明日も楽しめるわね」

「そんな事だろうと思ったわ……！」

聞き覚えのある声に雅がハっとすると、何故かそこにはいつものメンバーが顔を揃えていた。

しかも利恵を筆頭に、真一郎も琢磨も怒った顔をしている。

「り、利恵！？ それにみんなも……な、何でここにいるの？」

「お見舞いに来てあげたのよ……あんたが風邪ひいて休んでるって聞いたからね！」

「あ……あははは、そ、そうなんだ！ ありがとう……」

雅はわざとらしく、コホコホと咳き込んで見せたりしたのだが……

…。

「もう具合はいいのかしらあ？ 雅ちゃん……？」

「も、もうすっかり！ スッキリ！」

自分で自分の行動を否定している事に気付いていない。
完全にテンパっている証拠である。

「雅、もう全部バレてるって。素直に謝っとけ」

涼に言われて観念したのか、雅は力無く項垂れた。

「あゝあ、こんな事なら誰も入れないように言っておくんだったわ」
「何よそれ……」

「そんなに怒らないでよ、可愛いイタズラじゃない」

「あんたねえ……全然反省してないわねっ!？」

美耶子なのだと最初に思い込まされたせいで、利恵でさえ騙されてしまったのだから、先入観とは恐ろしい物だ。

まあ、元々が一卵性双生児だし、見た目だけなら騙されても仕方ないだろう。

「でも残念だな、明日も楽しめると思ってたのにさ」

「雅ちゃん、それは無理だよ。涼ちゃん、最初から雅ちゃんだって判ってたみたいだもん」

雛子はクスクスと笑いながら言った。

「え？ そうなの？」

「ちよつとよく見りや見分けは付く。そう言つたろ？」

入学してすぐ、誰も見分けられなかった二人を完璧に見分けたのは涼である。

ましてや、もう親しくなつて随分経つたのだから、涼に見分けられない筈が無いのだ。

「ヒナちゃん、そろそろお見舞いの品を出してくれるかな？」

利恵に言われて、雛子がバスケットから取り出したのは……。

「……タマゴ？」

「雅に精をつけてもらおうと思って、たくさん茹でて来たの」

「……要らない」

「おっと、逃がさないわよ雅！ 真君！ 琢磨君！」

駆け出そうとする雅の両脇を、真一郎と琢磨が押さえた。

そのままガツシリと腕を掴み、雅の動きを封じる。

「ちょ、ちよつとお！　か弱い乙女に何するのよお！」

「食・べ・て」

殻を剥かれ、ツルツルとした真つ白い物体が雅の口元へと運ばれて行く。

勿論、それをしているのは楽しそうな顔をした利恵である

「ア、アタシ、ゆで卵はモソモソした食感が嫌……」

「食・べ・て」

「口の中が変な感じになるから嫌……」

「食・べ・て」

「ごめんなさい！　謝るから許してえ！」

「ダ・メ」

「嫌ああーっ！」

翌日、体調が戻った美耶子の代わりに、雅が学校を休んだ……。

想い、時を越えて（前書き）

いつも応援して下さいの皆様、ありがとうございます。
日頃のご愛顧に感謝の気持ちを込めまして、スペシャル読み切りを
公開させていただきます。

想い、時を越えて

ホールの中は熱気に包まれていた。

と言つても、別に何かの大会が開かれていて盛り上がっている訳では無い。

ホール内には大勢の人が集まっており、まだ春浅いこの時期にも拘らず、その体温のせいで室温が上昇しているだけなのだ。

空調設備は充実しているのだが、来場者の年齢層が比較的高い為、それを考えると無闇に冷房を入れる訳にもいかないのである。

という訳で、そこその温度に保とうとすると、自然に湿度が上がってしまうという結果になる。

除湿だけでは、やはり体感温度は下がらないのだ。

「本当はもつと冷やしたいんだけどねえ……」

雅はブラウスの襟元を少し開け、手でパタパタと風を送りながら言った。

一応フォーマルな服装をしているのだが、そういった事に無頓着なのは相変わらずだ。

本当はもつとラフな格好をしたいのだが、一応、今回の集まりでは主催者の立場なので、それは仕方ない。

公式の場所では、それなりの格好をするというのが社会という物なのだ。

「雅ちゃん、見えちゃうぜ？」

「この位置で見えるのは掃部関君だけでしょ？ 顔を横に向けてなさい」

「ケチ」

「……もつと緊張感を持ちなさいよ」

隣に立っている真一郎に、苦笑と共に厳しい視線を送ってから、雅は大きな拍手が送られている壇上へと視線を移した。

そこでは新たに建設されるテーマパークの見取り図面が、大画面

に映し出されている。

ステージの下、ホール中央には縮小された模型も展示されており、それも併せて施設の説明がなされている。

本来ならば企画発案者である真一郎か雅が説明をしなければならぬところなのだが、まだ二人とも学生である事を考慮し、それは社の者に任せた。

やはり出資者に対する説得力に欠けるといのが、その理由だ。

ちなみに、この模型を制作したのは真一郎である。

「けど、良く出来てるわね。さすが掃部関君」

「でしょ？ 雅ちゃんの為に必死に作ったんだぜ？ 俺に対して愛が芽生えそうでしょ」

「一之瀬との共同プロジェクト第二弾なんだから当然でしょ？ そんな事ばかり言っていると、美奈さんに言い付けちゃうからね？」

ちなみに、美奈は現在ニューヨークで開かれているコンベンションに出席しており、その名代として真一郎がここにいる。

さすがに美奈の父である棗はいい顔をしなかったが、母の馨は真一郎を気に入っているらしく、美奈と共に強引に押し切ったらしい。

「またあゝ……。全然変わらないんだもんなあ、雅ちゃん」

「変わらないのは掃部関君も一緒じゃない。未だにアタシの事

『雅ちゃん』って呼ぶんだもん。アタシ、もう今年で十九歳だよ？」

雅は、しかし、楽しそうにクスリと笑った。

「俺は一生そう呼ぶよ」

「アタシがお婆ちゃんになっても？」

「勿論」

「変わらないのだ……」。

真一郎の中では、例えどれだけの時間が自分の傍を通り過ぎようとも、あの頃のまま何一つ変わりはないのだ。

それは雅も同じなのだろう。

真一郎の言葉を聞いて、その顔は先程よりも柔らかい微笑を湛え

やがて説明が終ったのか、ホールの中に再び大きな拍手と共に歓声が沸き上がった……。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

それは琢磨の日々の手入れも然る事ながら、傷んだ部分をすぐに修理しているからに他ならない。

何しろ、

177

「うん、そうなんだけど……」

床に正座している雛子が言った。

すぐ傍に座布団が用意されているのだが、琢磨が稽古中という事もあって使わずにいた。

「この間かかって来た電話では、今日帰って来るって言うてたんだけどね……無理みたい」

「相変わらず肝心な所で抜けているな、涼は。しょうのない奴だ」

「ごめんね、何度も予定を変えさせちゃって……」

「佐伯のせいではなかう？ そんなに申し訳無さそうな顔をするな」

琢磨も苦笑しつつ、雛子の正面に正座をして座った。

それと同時に道場の戸が開いて、

「琢磨様、お茶をお持ち致しました」

と、人数分のお茶を乗せた盆を持ち、美耶子が入って来た。

雛子と琢磨の前にそれぞれお茶を置くと、美耶子は琢磨の隣に正座をする。

まるでずっと昔からそうしているかのように、その動作はあくまでも自然だ。

「佐伯さん、どうぞお楽になさって下さい。足が痛くなってしまうすし、春とは言っても、道場には床暖房が入っていませんから冷えてしまいます」

「うん、ありがとう美耶子さん」

美耶子が差し出した座布団を受け取り、雛子は素直にそれを敷いた。

こういう時、昔は「大丈夫だよ」と答えていた雛子だが、最近ではそうだった『つまらない遠慮』は、しなくなっている。

ちなみに、琢磨は床の上に平然と正座をしているのだが、まあ、琢磨にとっては当たり前の事なのだろう。

「やはり床暖房は必要だろうか……？」

琢磨は難しい顔をして考え込んでしまった。

浦崎流剣術道場を開いたはいいが、どうにも門下生が集まらない。

それは稽古の厳しさや知名度の低さだけが理由ではなく、設備に問題があるのではないかと、美耶子にも言われているのだ。

しかし、今の琢磨にそんな金銭的余裕がある筈も無く、今のままの状態が続いている。

「わたしからお父様をお願いしてみましようか？」

「いや、それはいけません」

琢磨は、美耶子の言葉に首を振って、

「まだ、お借りしたお金を返済し切れていません。その上お父上に頼み事をするなど、俺には出来ませんよ」

「琢磨様は借りたと仰いますが、あのマンションのお家賃は不要と申し上げた筈ですよ？」

「そういう訳にはいきません。俺が住んでいた期間の分は必ずお支払いします。それに、この道場の建築費も……」

黎明高校卒業と同時に、琢磨は勤めていた小料理屋に就職し、昼間に加えて夜間も働く事になった。

道場は、小料理屋の定休日と早朝に開いているのだ。

しかし、それらの稼ぎだけでは、到底払い切れる金額ではない。

せめて、もっと門下生が増えてくれれば、その月謝で何とか出来る可能性もあるのにと、琢磨も美耶子も常々考えていた。

「この道場こそ、お金など頂けません。これは、わたしが勝手に建てた物ですし……」

北鳳杯へ向けての特訓の為に建てた道場。

本当なら大会終了後に解体される筈だったのだが、美耶子の断つての希望でそのまま残された。

そして、卒業と同時に登内邸の敷地内からここへ移設し、その運営を琢磨に任せたのだが……。

「わたしが要らぬ事をしたばかりに、琢磨様に余計な負担をおかけしてしまって……申し訳ありません」

「いえ、そんな事はありません。若輩の身で、こんなに立派な道場の主になれたんです。張り合いにこそなれ、負担になど感じませんよ」

琢磨はそう言うと、にこりと笑った。

まさに二人だけの世界が展開している。

「あの……」

「え？」

「そろそろ、わたしの話に戻してもいいかな？」

苦笑しながら雛子が言うと、琢磨も美耶子も途端に顔を真っ赤にして、

「も、申し訳ありません！ 佐伯さんのお話のお邪魔をするつもりは無かったのですけれど……」

「す、すまん佐伯、つい……」

「……ぷっ」

雛子が堪え切れずに噴き出すと、二人もつられて噴き出し、三人は声を揃えて笑った。

三人は一瞬、道場内の空気が、高校時代の物と同じ匂いになったような気がした。

「それで同窓会の会場の件だが、俺の勤め先の大將に承諾を得た。

午後八時から深夜零時までだ。日程の変更も問題無い」

「登内のホールが使えれば良かったのですが、さすがに今のわたしの勝手には出来ませんし……」

「同窓会って言っても、わたし達七人だけの集まりだからね。あ

の大ホールじゃ持て余しちゃうよ」

「まあ、その分は真が大騒ぎをするだろうから、賑やかさでは問題無いだろうがな」

琢磨の一言で、再び三人は笑った。

この件に関しては電話で確認しても良かったのだが、丁度、大学の授業で使う物を買に出たついでに、琢磨と美耶子の顔を見たくなった雛子は、その誘惑に勝てなかったのだ。

いや、それよりも二人の暮らしぶりが見たかった……と言った方がいいたろうか？

「美耶子さんも、もうすっかりここでの生活に馴染んだみたいだね」
「はい、お蔭様で」

高校卒業と同時に、美耶子は家を出て琢磨の元へと押しかけ、そのままここへ住み着いてしまった。

だが、二人はまだ結婚している訳では無い。

あくまでも美耶子が押しかけ女房を気取っているだけの事だ。

寝室も別々（美耶子が寝室を使い、琢磨は道場で寝ているそうだ）だし、美耶子はきちんと大学生としての生活を営んでいる。

二人は決しているいい加減な事をしている訳では無いのだ。

さすがに美耶子の父である大蔵も、いくら娘に甘いとは言え激怒し、一切の援助はしないと断言したのだが、そこはそれ。

こつそりと母の美晴が、美耶子の学費や生活費を調達している。

勿論、それは大蔵の耳にも入っている筈だが、どうやら知らぬふりをしているようだ。

「ところで佐伯、大学生活はどうだ？」

「うん、すごく充実してるよ」

「佐伯さんは、管理栄養士さんを目指していらっしゃるのですよね？ 素敵ですねえ」

素敵だとは言っているが、美耶子は管理栄養士が実際にどのような物か知らない。

まあ、貶しているのではないのだから、この際放っておこう。

「先日、真からの電話で聞かされたんだが、佐伯が先生役をしている事もあるそうだな？」

「相変わらず真君は凄い情報網持つてるなあ……。まあ、先生役って言っても、実習の時なんかにまとめ役をしてるだけだよ」

雛子は笑いながら言ったが、実際、雛子は大学でも一目置かれる存在である。

あの宇佐奈環の一番弟子である事も、その一因だ。

そのせいで、あちらこちらからお呼びがかかり、最近ではプライベートの時間も殆ど取れなくなってしまうている。

「すっかりお忙しくなってしまうわね、こうしてお会いする機会も減ってしまいましたねえ……」

「そうだね。昔ほどは一緒に遊べなくなっちゃったもんね」

「雅もあまり顔を出してくれませんか……。仕方のない事と解つてはいるのですが、わたし、少し寂しいんです」

「あ、雅ちゃんと言えば……」

何かを思い出したのか、雛子は急に可笑しそうに笑い出した。

「愚痴の電話がたくさんかかって来るってボヤいてたよ？」

「まあ！ あの子ったら、そんなご迷惑をおかけしているんですか？」

「本人は全然気にしてないって言うか、むしろ楽しんでるみたい。でも、美耶子さんの事は言ってたなあ」

「わたしの事ですか？ もしかして、怒っていらつしやるのでしょ
うか……？」

「自分だけ幸せを満喫してるのは許せん！ 少しは分ける！……
だって」

「これは、今度の同窓会では覚悟をしておいた方が良さそうですね
？ 美耶子さん」

「脅かさないで下さいまし、琢磨様。今のわたしには、SP部隊
もついていないのですから……」

「どうやら美耶子さんは本気で怯えているようだ。」

「琢磨君がいるから大丈夫だよ、美耶子さん」

「いや、俺の力ではどうしようもないかもしれん……。何しろ、
相手が相手だからな」

「あははは」

道場の格子窓から、桜の花弁が一片、風に運ばれて舞い込んで来
た。

「でも、意外だったなあ」

里美は学食のカレーを食べながら言った。

勿論、独り言ではなく、目の前には話し相手が座っている。

「何が？」

と、恵が答えた。

しかし、本来なら、恵はこの場所に座っていてはいけないのだ。
何故なら……。

「恵が看護学校に行くとは思ってなかったもん。　と言うより、看護師になるなんて、いつ決めたのよ」

「うん……。　実はさ、わたし、進路の事なんて全然考えてなかったんだよね。　元々、涼先輩を追いかけて黎明に入ったでしょ？　でも、結果があれだったじゃない？　ずっと涼先輩と同じ道を歩きたいって思ってたけど、その道が急に無くなっちゃって……」

「涼先輩、卒業式の日に行っちゃったんだってね……。　道理で送る会が終わったあと、探してもいなかった訳だ」

「それもあってさ。　わたし、卒業したあとに、何をどうしたらいいのか解んなくなってたんだ。　そんな時に街をブラブラしてたら、阿達さんに会ってさ」

「阿達さんって……ああ、先輩達の友達の？」

「うん。　なんか懐かしくって、思わず声をかけてた。　阿達さんもビックリしてたよ。　まさかわたしと出くわすなんて、思ってたかっただろうからね」

「阿達さん！」

「え？」

急に声をかけられ、抱えていた数冊の本が落ちないように気を付けないが振り返ると、紫はそこに立っている少女の顔をじっと見た。

「あら、貴女は確か……」

「迫水恵です。　一年の時、文化祭でお会いしました」

「そうそう、憶えてるわ。 お久し振りね、お元気？」

「はい。 わたし、それしか取り得がありませんから」

「まあ」

笑顔で答える恵に、紫も笑顔を返した。

その拍子に少しバランスが崩れたのか、本を落としそうになって慌てて抱え直した。

「うわ……。 何だか重そうですね」

「関連書籍をあれもこれももって選んでると、結局こうなっちゃうの。 わたしって、本を選ぶのが下手みたい」

「宅配を頼んだらどうです？」

「あまり余計なお金を使いたくないの。 自分で運べる物は、自分で運ぶ方が得でしょ？」

「でも、危なっかしいですよ。 わたし、お手伝いします」

「え？ そんな、悪いわ」

「いいんです。 どうせ暇人ですから」

紫の腕から何冊かの本を受け取ると、恵はその表紙に書かれた文字を見た。

……読めない。

どうやらドイツ語で書かれているようである。

「随分楽になったわ」

紫は、ホっとしたように笑いながら言った。

そのまま二人並んで歩き出してすぐ、紫は恵の顔が何故か少し沈んでいる事に気付いた。

文化祭で会った時には、もっと弾けるような明るさがあったのに、今は何か考え込むような、それでいて何かを諦めているような、そんな微妙な暗さがある。

「どう？ 時間があるなら、その辺でお茶でも飲まない？ 本を運んでくれたお礼をしたいの」

「え？ そんな、お礼なんていいですよ」

「貴女が良くてわたしは良くないの。 わたしを礼儀知らずにし

ないでね？」

「あ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

駅前まで来ると、丁度、可愛らしい造りの甘味処が目について、紫はそこへ恵を連れて入った。

店内は明るく、店員も皆、きびきびとした動きを見せていながらも、客にリラックスさせる事を忘れていないようで、落ち着いた空気がある。

こういった目に見えない基本が出来ている店は紫の好みである。これからはここを贔屓にしてもいいかなと思った。

今度、美奈を連れて来てみよう。

きつと美奈も気に入る筈だ。

二人で注文を済ませると、紫はお茶を口に運んで一息ついた。

「美奈が一緒の時は大抵紅茶になっちゃうんだけど、わたしは緑茶も好きなのよ」

「そうなんですか」

「美奈は紅茶党だからね。でも、たまには違った物も飲みたいと思うわ。例え、どんなに紅茶が好きでも、時にはコーヒーやトマトジュースもね」

「そりゃあそうですね。毎日同じ物じゃ飽きちゃいますもん」

「……人も同じだと思わない？」

「え？」

「例え、その人の事がたまらなく好きでも、時には違う人の事を考えたりしない？ 顔を見たくない日だって、あると思うし」

「どうでしょう……。わたしにはそういった経験が無いんで、よく解りませんけど……」

「人間は感情の動物だから、時には理性よりも感情が勝る事があるの。普段は押さえていても、どうしようもない時があるのよ」

そう言つと、紫は再びお茶を飲んで、美味しそうに軽く息をついた。

「阿達さん、その本、何の本ですか？ わたし、さっき表紙を見た

んですけど、何が書いてあるのか解りませんでした」

「ああ、これ？ 医学書とか、症例に関する文献よ」

「医学書？ 阿達さん、お医者さんになるんですか？」

「ええ。家が病院を経営してるし、祖父も父も医師だしね」

「そうなんですか……」

「迫水さんは？ もう進路は決めてあるのかな？」

「わたしですか？ いえ、わたしは……」

何も決めていない……いや、決められないのだ。

子供の頃に思い描いた夢は、どれも現実味が無く、そもそも夢と呼べる物でもない。

だいいち、その為の努力などした事も無かったし、ただ毎日を涼を追いかける事に費やして来たのだ。

これといったスキルを身に付けている訳でもないし、ましてや明確なビジョンなど、ある筈がなかった。

周りは皆、自分の夢に向かって努力している。

道をしっかりと見定めている。

あの作矢でさえ大学進学を目指して猛勉強しているのに、自分は何も見つけられず、どんどん取り残されて行く気がする……。

「……迫水さん」

「はい」

「道は望めば無限の方向を示してくれる。でも、望まなければ、自分が今どこにいるのかさえ、見せてはくれないわ」

「……」

「時々意地悪して迷路に誘い込んだりするけれど、でも、それも決して無駄な回り道にはならないものよ。その道を選んだのが自分の意思なら、迷路の出口は必ず見つかるわ。必ずね」

「……阿達さんも、そうだったんですか？」

「そうね……。わたしも迷ったり転んだり、もう立ち上がるのが……歩くのが嫌になったりした事があったわ。でも、目指す先にある何かを見ないままに終るのが嫌だったから、また必死になった

……そうしてここまで来たわ」

「わたしにも見つかるでしょうか……？ 目指すべき物……」

「それを探す為に歩いてみるのもいいんじゃないかしら？ もしかしたら、思わぬ所で何かを拾うかもしれないしね」

注文した品が来て、会話が一旦途切れた。

紫は口に広がる甘さに、暫しの幸福感を味わうと、その余韻を楽しみながら言った。

「疲れたら休めばいいだけの事よ。 こうやって、甘い物でも食べて……ね？」

「それで？」

里美は水を一口飲んで、恵の話の先を促した。

「阿達さんの家って、代々お医者さんの家系なんだって。 でもね、だからお医者さんになるうって決めた訳じゃないんだってさ。 阿達さんの友達に病気で苦しんだ人がいて、でも、何とかしたいって思っても何も出来なかった自分が悔しかったって。 その人が病気を克服して退院する時、家族の人が凄くいい顔をして笑ってるのを見て、自分も誰かを笑顔にしたいって、そんないい笑顔をたくさん作りたいって……それでお医者さんになる決意を固めたんだって言うってた」

「そうなんだ……」

「今、最先端医療の本場はアメリカなんだってね。 でも、阿達さんはドイツに拘ってる。 懷古主義って訳じゃないけど、その拘りは捨てたくないんだって。 理由は教えてくれなかったけど、何となく解る気がするんだ」

「へえ……。 優しいそうに見えるけど、阿達さんて意外に頑固な所もあるんだね」

「それを聞いて思ったんだ。 わたしだって、きっと何か出来る筈だって……誰かの為に、役に立てる筈だって。 その時に、目指す

べき何かを見つけられたような気がしたの」

「それで、進路が決まったって事？」

「それだけじゃないけどね」

「他にも何かあるの？」

「まあね。でも、それは内緒にしとく。口に出すと消えちゃい

そうな気がするから……」

「そう」

しつこく訊き出す気は無かった。

里美は、恵が決めた道を歩くのを、ただ応援してあげればいいと思っただ。

それが友達としての自分の務めだし、今までだって、そうやって恵と付き合ってたのだから……。

「で？ 学校サボってわたしを訪ねて来たのには、何か理由があるんじゃないの？」

「別に、そんなの無いよ。ただ、久し振りに里美の顔を見たくなっただけ」

「ふうん」

「陸上、頑張ってるみたいだね」

「勿論。みつともない成績だと、雅先輩にどやされちゃうもん」

「そう言えば、何で雅先輩と同じ大学に行かなかったの？ 誘われてたんでしょ？」

「え？ そ、それは、まあ、色々と事情があって……」

急に俯き加減になってゴニョゴニョと言葉を濁した里美を見て、

「隠したって無く駄。どうせ五作と同じ大学に行きたかったってのが理由に決まってるんだから」

恵は冷かすように言った。

「ち、違っわよ！ そんな事、一度も言っただ事無いでしょ！」

「言われなくなっただけ解りますう」。あんたと何年付き合ってると思ってるのよ」

「むうう……」。あーっ！ ここに部外者が紛れ込んでるーっ！

誰か警備の人呼んで来て下さい！」

突然叫んだ里美の声は、さすがに運動しているだけあってよく響く。

途端に何人かの生徒が集まりだして、恵は大いに慌てた。

「ちよ、ちよつと里美、何て事言い出すのよ！　ち、違うんですよ！　わたしはこの子の友達で、決して怪しい者じゃ……」

「きゃー！　襲われるっ！」

「あんたって子はあゝ……！　雅先輩に似て来てるわよ！」

「何だよ、煩せえな……。誰だあ？　食堂で騒いでる馬鹿は……って、迫水じゃねえか！　こんな所で何やってんだ、お前！」

「あ、五作……！　あんたこそ何しに来たのよ！」

「ここは食堂だぞ？　飯食いに来たに決まってるだろ。相変わらず馬鹿丸出しだな、お前は」

「何だとおおゝ……五作のクセに生意気なっ！」

「また始まった……」

中学生の頃から、この二人は顔を合わせればこれである。

これ程行動パターンが変わらないのも珍しいのではないだろうか？

「……あ、成る程。恵は、これがやりたかったのか」
勉強よりは身体を動かすのが得意な恵である。

恐らく、結構なストレスが溜まっていたのだろう。

そう考えながら二人のやり取りを見ていると、何となく楽しそうですらある。

「たまにはわたしも参加してみようかな？」

二人を見る里美の目は、いつもと同じように優しかった……。

「まだ帰って来てねえだあ？　何考えてんだよ！　約束は今日だったろうが！」

真一郎は乱暴にビールのジョッキをテーブルに置くと、ガシガシと頭を掻きながら、つまみの枝豆をポイポイと口に放り込んだ。

座敷の席には琢磨と真一郎、それに向かい合うようにして美耶子と雅が座っている。

雛子は何か用事を済ませてから来るとの事で、少し遅れると、雅の携帯電話に連絡があった。

「何であいつは肝心な時になると、いつもボケた真似をかますんだ！」

「俺に言うな。それに真、お前はまだ未成年だろう、ビールはよせ」

「琢磨……お前もお前だぞ！」

「何がだ」

「いつまで経っても成長しない！ 酒も吞めずに漢と言えるか！ 酒も吞まずに仕事が出来るかあつ！」

「成長しとらんのはお前だろうが……。それに、それは学生の台詞ではないぞ」

琢磨はウーロン茶を飲みながら、隣に座る真一郎に説教を始めた。この構図も昔から変わっていない。

「まったくねえ……。こっちは宇佐奈君に合わせて予定組んでるつてのにさあ」

「雅、そんな事を言うものではありませんよ？ きつと宇佐奈君にも、何か事情があったに違いないのですから」

「大体、姉さんも姉さんよ。まさか卒業と同時に出て行っちゃうとは思わなかったわ。お蔭でアタシがどれだけ大変な思いをするか……」

「その件に関しては申し訳無いと思っています。それに、もう何度も謝ったではありませんか」

「謝ってもらっても、アタシには幸せはやって来ないわあ。あ

ゝあ、アタシもラブラブ光線出したいなあ……」

「鳳蔵院さんがいらつしやるでしょう？」

「はあ？ 何よ、それ」

「先日、鳳蔵院さんからお電話を頂いたそうではありませんか。

お付き合いは上手く行っているのですか？」

「何でアタシがあんなのと付き合いなきゃなんないのよ。それに、どうして姉さんが知ってるの？……って、訊くまでも無いわね」

雅がジロリと睨むのと同時に、真一郎がそそくさと立ち上がってどこかへ行こうとしている。

「お待ち。どこへいくのかな？ 真ちゃん」

「いや、ビールを飲むとトイレが近くなるものですから……」

「まだジョッキ一杯も飲んでないでしょ。ちよつとこつちへ来て座りなさい、話があるから」

「……何で話をするのに携帯握り締めてるの？」

「掃部関君とのやり取りを、美奈さんに実況中継しようと思って。今までの悪行の全ても含めて」

「悪魔ですか、あなたは……。ん？ 今バイクの音しなかった？」

真一郎は通路まで行くと、耳に手を当てて、店の出入り口の方へ向けた。

目を閉じて、じつと耳を澄ましている。

「また……。そんな事言って誤魔化そうたってダメだからね！」

「いや……。雅さん、真の言っているのは本当ですよ。段々近付いてます」

「浦崎君、判るの？」

「さすがは琢磨様ですね」

「間違いないね……。こりゃあ、涼の単車の音だ！ あの馬鹿、やっと帰って来やがった！」

真一郎が駆け出すと、

「あ、待ってよ！ アタシも行く！」
と、雅もそれに続いた。

「琢磨様、私達もお迎えに出しましょう」

「そうですね、行きましょうか」

真一郎が店の戸を開けて外へ飛び出すと、こちらへ向かって走って来るバイクのヘッドライトが見えた。

しかし、何故かかなりのスピードを出しているようで、それはあつという間に真一郎に近付いて来た。

「おい、涼！　ここだここ！　まったく人を散々待たせやがっ……
…おわあっ！？」

真一郎が飛び退くと同時に、今まで真一郎が立っていた場所に、バイクが横滑りしながら停止した。

「ば、馬鹿野郎！　俺様を轢き殺す気か、お前はっ……って、あれ？」

「さっすが真ちゃん。　いい反射神経持ってるわね」
てつきり涼だとばかり思っていたのだが、ヘルメットを脱いで現れた顔は……。

「……何で環さんが涼の単車に乗ってるんですか？」

「涼なら……ああ、来た来た」

環が振り返った先に、車のヘッドライトが見えた。

しかし、右に左にと蛇行していて、危ない事この上ない運転だ。

「あれって恭さんの車ですよ？　恭さん、酔ってるんですか？」

「うっん、そうじゃなくて、車内で修羅場が展開してるから、その煽りを食らってるんですよ」

「修羅場……？」

真一郎も、続いて外に出た雅達も、何の事が解らずに首を傾げている。

「いや、家じゃ決着が着かなくてさ。　でも、みんなが待ってるって雛子ちゃんが焦ってたもんだから、仕方なく私は涼のバイクで来たって訳。　恭一はこの場所知らないし、雛子ちゃんは道案内どころじゃないし、涼じゃどこへ案内されるか解らないしね」

「話が全然見えないんですけど……？」

「美耶子ちゃんも雅ちゃんも、危ないから下がってた方がいいわよ。

あ、琢磨君はそのままね」

「は、はあ……」

「何？　姉さん、一体何が始まるのかな？」

「さあ……？　わたしには解りませんが、ここは言われた通りにした方が良さそうですね」

美耶子と雅は、環に言われるがまま、店の軒下まで下がった。

「真ちゃん、琢磨君、下手に手出ししない方がいいわよ？　相当にご機嫌斜めだから」

「手出しすると言われても……」

「何が起るのか解らないままでは、手の出しようもありませんが……。　真、一応、構えだけは取っておいた方がいいかもしれない」
取り敢えず臨戦態勢をとった二人のすぐ傍に恭一の車が停まると、後ろのドアが開き、そこから転がり出て来たのは……。

「いててて！　痛えって言ってるだろうが！　いい加減にしろよ、お前はっ！」

両手で頭をガードしながら、必死の抗議をしている涼と、

「うるさい馬鹿者っ！　三日前に帰って来るって約束してたのに何で遅れたんだ！　理由を言え、理由をっ！」

「利恵ちゃん！　涼ちゃんは道に迷ってたんだってば！　仕方ないよぉ！」

「ヒナちゃんは涼に甘過ぎっ！　道に迷ってたなんて嘘に決まってるんだから！　大方、例のシーナとかいう外タレと乳繰り合ってたんだろう！」

「俺がそんな真似するかっ！　本当に迷ってたんだよ！」

「せっかくみんなで色々企画してたのに、全部無駄にしてえええ」

……！

「だから、それは悪かったって何度も謝ってるだろ！　もう勘弁してくれよぉっ！」

ポカポカと涼を叩き続ける利恵と、それを必死に止めようとする雛子。

その様子を、真一郎達は、ただ啞然として見守るしかなかった。

「真！　琢磨！　黙って見てないで、利恵を止めてくれよ！」

「いや、止めると言われても……なあ、琢磨」

「うむ。下手に手出しをして、今度は俺達が標的にされては敵わん」

「は、薄情者ーっ！もう雅でも美耶子さんでもいいから、頼むよ！」

「『でも』 って……そんな頼み方じゃあね」

「そうですね。人に物を頼むには、それなりの言い方という物がありますからね」

「な……何て奴らだ……！」

「わたし、もう疲れちゃった……」

「ヒナ！ お前まで俺を見捨てるのかあーっ！？」

利恵の体力は衰えを知らないのか、涼を叩く手の動きは一向に収まる気配を見せない。

そればかりか、涼が逃げる気配を見せる方向に素早く回り込み、すぐさま退路を断つてしまう。

利恵、恐るべし……。

「しかし、いつまでもこんな事してたんじゃ、同窓会どころじゃねえな」

「成る程、それもそうだな。仕方ない、そろそろ助けてやるとしようか」

「はいはい、利恵。もうそれくらいにしときなよ」

「放せ雅！ 今日という今日は、とことんやってやるう！」

「アタシとだつて久し振りに会ったんだから、貴重な時間を浪費するのはおやめ」

「ガルルルル……！」

「猛獣か、あんたは……」

三人がかりで、ようやく涼から利恵を引き剥がすと、涼はホットした表情を浮かべて、

「……遅くなつて申し訳ありませんでした」

と、全員に頭を下げた。

「おう。俺様の心は大海原のように広いからな。今回は特別に

許してやるから、涙を流して感謝しろ」

「偉そうに……何様だ、お前は」

「恐れ多くも掃部関真一郎様だ。この名前、しかと心に刻んでおけ」

「はいはい……。悪かったな琢磨。ヒナから聞いたよ、店の事とか」

「気にするな。佐伯がちゃんと気を利かせてくれていたからな、何の問題も無かった」

「そうか」

やはり、こういった事では雛子は頼りになる。

連絡の相手に雛子を選んで良かったと、涼は思った。

「おい、涼。俺には労いの言葉はねえのかぁ？」

「あ、忘れてた。恭さん、悪いね」

「それだけかよ……」

「さあ、恭一、わたし達は帰るわよ。今日は同窓会なんだから、わたし達は邪魔邪魔」

環は再びヘルメットを被ると、バイクのエンジンをかけながら言った。

「あ、真ちゃん。恭一の車は置いて行くから、帰りはみんなを送ってあげてね」

「え？ でも俺、酒飲んじやいましたよ」

「あら、困ったわね……」

「では僭越ながら、わたしが運転致します」

「へ？ 姉さん、いつの間に免許なんて取ったの？」

「家を出てすぐです。お母様が、今時の婦女子なら免許くらい持つていなくてはいけないと仰って、合宿所を借り切って下さいました」

瞬間、全員の頭を嫌な予感が掠めた。

「……ヒナちゃん、生命保険、入ってる？」

「入ってない……。で、でも大丈夫だよ。美耶子さんなら、き

つと安全運転で……」

「でも、ブザーの音が延々と鳴り続けるのは少々耳障りですねえ。

あの音が出ない車なら良いんですけど」

一同はその台詞を聞いて、一様に硬い表情を浮かべた。

どうやら美耶子は、ハンドルを握ると性格が変わるタイプらしい。

「琢磨、お前は免許持つてねえのか？」

少々青ざめた顔で真一郎が言った。

「こんな事になると判っていれば、無理をしても取っておいたのだがな……」

「雅ちゃんは？」

「アタシ、まだ仮免まで行っていないのよ……」

「真、お前はもう呑むな。そして、全力で水を飲んで寝ろ……すぐさま死んだように寝ろ！」

「って言われてもなあ……。命か酒か……難しい選択だな、涼」

「そこで悩むなっ！」

とにかく全員揃って店内に戻り、席に着くと、すぐにポンポンと言葉が飛び交う。

卒業して一年……しかし、その時の流れなど感じさせないほど、話題の種が尽きる事は無い。

「何でアタシが登内グループを継がなきゃなんないの？ おかしいでしょ？ ねえ、宇佐奈君、おかしいと思わない！？」

「俺に言われてもなあ……。美耶子さんとは双子なんだから、別にどっちが継いでもいいんじゃないかねえか？」

「こんな時ばかり双子だって事を持ち出さないで欲しいわ！ 普段は『わたしは姉ですよ』なんて言ってるクセしてさあ」

「まあ！ わたし、そんなに偉そうな物言いをしていましたか？ 琢磨様、わたしは嫌な女になってしまっていますか？」

「いや、雅さんは酔っているだけですから、本心で言っている訳ではありませんよ」

「ねえねえ、ヒナちゃん。酔ってるからこそ本音が出るって事も

あるよね？」

「利恵ちゃん、話がこじれるから……」

「なはははは！ こじれた話は踊って忘れるのが一番であっ！ ……」

…と、いう訳で。 一番！ 掃部関真一郎！ 裸踊りをします！」

「何で呑んでるんだ、お前はっ！」

もうこうなつては仕方ない。

帰りは覚悟を決めて、美耶子の運転でという事になるだろう。

そうと決まれば遠慮は要らないとばかり、真一郎のピッチが上がる。

涼も雅も、カパカパと呑み始めた。

それを見て、琢磨と雛子は顔を見合わせ、やれやれと溜息を吐いた。

「そうそう、肝心な事を忘れておりました。 宇佐奈君、合格おめでとうございます」

「え？ ああ、ありがとう美耶子さん」

「まさか涼が一発で合格出来とは思わなかったな」

「真でさえストレートで合格したのに、俺が落ちる道理がねえだろうが」

「じゃあさじゃあさ、利恵が先輩って事になるの？ うわ……宇佐奈君、イジメられそう」

「それもいいなっと思ってたんだけど、わたし、涼と同級生になるのよね、これが」

その場にいる全員が、『え？』という表情になった。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ わたし休学してたのよ、一年間」

「……何で？」

「やあねえ、涼ったらあゝ、何度も言わせないでよあ……。 愛しのダゝリンと同級生になりたいからだっば」

「それだけ？」

「そうよ？ 何かおかしい？」

「いや、おかしいって言うか……なあ？」

「まあ、この子のやる事だから……ねえ？」

涼と雅は頷き合うと、ハア……と溜息を吐きつつ、グラスを合わせたのだった。

「何よ……何か言いたい事があるなら、はっきり言いなさいよね」

「まあまあ、利恵ちゃん。とりあえず、今日はおめでたい席だから」

ジト目で涼と雅を睨んでいる利恵の隣りで、雛子はクスクス笑いながら利恵を宥めた。

「おめでたいって……真君の頭？」

「そ、そうじゃなくて……。涼ちゃん帰って来たし、大学にも受かったし」

「よせやい高梨、照れるぜ」

「真、誰も誉めておらんぞ……」

「まあ、真が『めでたい』ってのは確かだけどな……」

「そこまでおだてられたら豚でも木に登るっ！ 二番！ 掃部関真一郎！ スパイダーマンやるますっ！」

「脈絡の無い事をするなっ！」

騒がしくも懐かしい顔ぶれが集う。

そこには、あの頃と少しも変わらない空気がある。

そして……。

想いは時を越えて、優しく微笑みかける……。

想い、時を越えて（後書き）

このお話しは「永遠の追憶」を三部構成として考えていた頃に作った物です。

あくまでも読み切りとして公開する物ですので、ここからすぐに第三部が開始される訳ではありません。

一応、念の為……（＾―＾；）

ゝ縁ゝ (えにし) (前書き)

これは、ゝ永遠の追憶ゝを三部構成の物語として考えていた頃、第一部最終話として公開する予定だった物です。

お蔵入りさせたままにしておくのも勿体無いような気がしたので、公開させて頂く事にしました(＾|＾;))

く縁く (えにし)

立ち並ぶビル群を眼下に見下ろす高層ビルの屋上で、スーツ姿の女性は携帯電話を片手に、

「その取引の件に關してはあんたに任せるわ。腕の見せ所なんだから、しつかりやってよ？」

と、時折風に煽られる手紙を戻しつつ言った。

高校時代に一度短く切った髪も、今ではすっかり長く伸びて、艶やかな黒を湛えている。

『え？ で、でも、わたし一人だけじゃ……』

「大丈夫大丈夫。もし何かあってもバックアップしてあげるから、思い切つてやってごらん？」

『何かあつてもつて……そんなあ……』

「ええい、四の五の煩い！ そんな根性無しの後輩を持った憶えは無いわよ！ 女は度胸！ 大学新記録を出した時みたいに勝負しておいで！ あんまり泣き言ばっか言つてると、練習量を今の倍にするからね！ 合宿の時には三倍にしちゃうから！」

『ひいひい、先輩の意地悪……』

高校生の頃、陸上部の部長を押し付けられた時もこうだった。

とにかく強引で、こちらの言う事になど耳を貸してくれないのだ。

「頑張れ頑張れ！ アタシが応援してやるから。実業団エースの底力を見せてみなさい」

問答無用で電話を切ると、風に揺れる長い髪を押さえながら、女性の手紙を持ち直して真剣に読み始めた。

「そっか……それ以外に考えられなかったんだね……」

それ程長くはない文面の全てに目を通し終えると、女性は薄っすらと口元に微笑を浮かべた。

懐かしい匂いの風が吹き、女性は一時 (ひととき) 目を閉じ、その風に身を委ねた。

そして大きな溜息を一つ吐くと、うんと背伸びをして、
「さて！ バックアップするって約束したからには、ちゃんと体制を整えておいてやるか！」

ヒールを鳴らし、女性はビルの中へと戻って行った。

「やれやれ……」

分厚い胸板の前で広げた手紙に視線を落しつつ、呆れたような表情を浮かべて男性は言った。

少々年季の入ったアパートの一室には、けれど、どこか幸せそうな空気が満ちている。

男性は椅子を引いて腰を下ろすと、テーブル上にその手紙を置いた。

「何も進んで苦勞を背負い込むような真似をしなくてもいいだろうに」

「でも、彼女らしいとも言えるわね」

男性の隣りで、髪を後ろに束ねた女性が言った。

その顔は男性とは対照的に、楽しげに微笑んでいる。

「しかし、現行の法律で許される事なのか？ 何か問題が発生するような事は無いのか？」

「そうね……詳しい事は知らないけど、特に問題無いと思うわよ？」

「法律上の問題が無くても、後々の事を考えるとだな……」

「その点はしっかり考えてるみたいだし、わたし達が心配する必要は無いわよ」

「そうはいかん。やはり先輩という立場に立つ者としては、後輩の動向には常に気を配ってやらんと」

「変わらないわねえ……。後輩の世話を焼くのもいいけど、少しはわたしの事も考えてね？」

「考える？ 何をだ？」

言った瞬間、男性はお尻を抓られた。

しかも、思い切り……。

「いたたた！ いきなり何をするんだ！」

「まったくもう！ 少しは彼を見習って成長してちょうだい！」

「何を怒っているのか知らんが、こんな事をしているようでは、奴が成長しているとは思えんぞ？」

「そこが違うのよ。彼は成長してるわ……だって、こんなにも凄い結末を用意したんだもの」

「……そうなのか？」

「そうなの！」

難しい顔をして考え込んでしまった男性を見て、女性は深い溜息をついた。

何やら難しそうな本の並んだ小さな机の正面で、白いレースの力ーテンが風に静かに揺れた。

ボブカットの髪を手で直しながら、白衣姿の女性医師は手にした手紙にもう一度目を通した。

「そう……。貴方はその道を選んだのね……」

少しだけ微笑んで、女性は机の引き出しに大事そうに手紙をしまった。

「彼らしい結末……。なのかしらね」

傍に立っていた研修医の女性は、それが医師の独り言なのか、それとも自分に言ったのか少し考えてから、「そうですね」と相槌を打った。

医師の読んでいた手紙と同じ物を受け取っていたので、その内容は研修医も知っているのだ。

どうやら医師は研修医に言っていたようで、満足気にニコリと笑った。

「そういえば、彼とは中学校が同じだったわよね？」

「はい。 と言っても、その頃は一度しか喋った事がありませんでしたけど」

「卒業して、別の学校になってからの方が仲良くなれたなんて、不思議なものね」

「そうですね。 でも、もしも彼と再会しなかったら、わたしがここで、こうしていられなかったんだと思うと、何だか不思議ですね」「そうね、それが縁（えにし） っていうものなのかしらね……。ところで、妹さんは、お元気？」

「ええ、毎日煩くしてます。 彼女の影響かな？ 小さい頃から懷いてましたから。 将来は看護師になるんだって言ってます」

クスクスと笑いながら言う研修医を見て、医師も笑った。

その時、穏やかな空気を切り裂くように、白い壁に取り付けられたホットラインが鳴った。

『先生、交通事故ですう！ 頭部からの出血と、内臓に損傷も考えられますう！ 救急車の到着は十分以内の予定ですう！』

受話器から慌しく患者の容態が告げられると、先程まで優しくかった女性の顔は、キリリと引き締まった医師の顔になる。

「解りました、すぐに裏口を開けて」

『はいですう！』

「スキヤンの用意。 それと、処置室は空いてる？」

女性医師はすぐさま、近くに控えていた研修医に指示を出した。

「はい、大丈夫です」

「頭蓋骨（あたま） を開頭（ひらく） かもしれないから、その用意もね。 意識レベルの確認と、輸血の準備も」

『ご安心下さい、全て手配済みですう！ その辺に抜かりはありませんですう！』

「頼りになるわね。 じゃあ、お迎えに行きましょう」

「はい！」

女性医師は眼鏡を直すと白衣の襟を正し、研修医と共に颯爽と部

屋を出て行った。

「よし、今日はここまで！」

「ありがとうございますあーっ！」

小柄な青年が終了の声を上げると、子供達はそれぞれ使った物を片付け、帰り支度を始めた。

「みんな道草など食わずに、真っ直ぐ帰宅するようにな。迎えが来られない遠方の人は、先生が送って行く」

「では、お迎えの来ていらっしやらない方は、わたしに申し付けて下さいね。お車を御用意致します」

和服姿の女性が、青年に寄り添うようにして言った。

しかし、幸いな事に各々の迎えはきちんと来ているようで、子供達は手を振りながら元気に帰って行った。

板張りの床だというのに、ドタドタという足音も聞こえない程、子供達は静かに歩いている。

どうやら相当に日頃の指導がしつかりとしているようだ。

「お疲れ様でした。只今お茶をお持ち致します」

「ありがとうございます」

青年はその場に正座をすると、女性の差し出したタオルで汗を拭い、一つ息を吐いた。

「あ、そうそう。先程、お手紙が届きましたよ」

女性は思い出したように、懷中から手紙を一通取り出し、青年に手渡した。

「手紙？ ああ、奴からですか？」

「はい。全て滞りなく、無事に終わったとの事でした」

「ん？ どうして内容を？」

手紙が開封された様子は無い。

と言うより、目の前の女性がそのような事をする筈も無いのだ。

「わたしにも届きましたから」

「全員に送っているのか……。 律儀と言つか、相変わらず無駄な手間をかけているな」

「あ、それとも一つ、お電話がかかって参りました。 一体いつになったら試合の日程を組むのかと、些かご立腹のご様子でしたよ？」

「奴もしつこいな……。 まあ、近い内に手合わせの機会は設けます。 それまで適当にあしらっておいて下さい」

クスクスと笑いながら、青年は自分宛の手紙の封を切った。

「……お前が選んだ道だ、俺達は何も言わん。 ただ精一杯、応援してやるのみ」

青年は文面を目で追いながら、今日までの数々の出来事を思い出していた。

「但し、後悔する事は許さんから……。 心しろよ？」

青年は開け放たれた窓から入る爽やかな風を感じ、静かに目を閉じた。

「うわっぶ！」

桜並木のある川沿いの道で、突然吹いた強い風に、大柄な青年は思わず目を閉じた。

いくらか砂埃が入ったのか、パチパチと何度も瞬きをしている。

「ペツペツ！ 口の中がジャリジャリする……」

「歩きながら口を開けてらっしゃるからですね。 お話も良いですけど、気を付けないと」

「ははは。 こればかりは一生治りそうもありませんね」

隣に立つ女性は、それを聞いてクスリと笑った。

さりげなく、一瞬の強い風から自分を庇った青年を見ながら。

「今回、貴方の出番はありませんでしたわね」

「まったくなあ……。あの野郎、俺様に何も言わんで勝手に全部やっちまいやがって。色々プランを考えてたのによ」

「それは仕方ありませんわ。きつと、迷惑になるとお考えになったのでしょうか」

「迷惑なんて事あるもんか。俺は、あいつらの為なら何だってしてやるのに……」

「それでも」

長い髪を風に遊ばせながら、女性が続けた。

「彼は彼なりに、色々と考えての事だったのでしょう」

「馬鹿のクセに考えんなっつーの。考える事は、俺に任せておきやあいいのによ……」

「変わりませんのね、そういう所も」

「ええ、変わりませんよ。俺達はみんな、ずっと変わらない……変わらないさ」

「あーっ！ こんな所にいたんすか！」

まだ少年のような、あどけなさを残した小柄な青年が、大柄な青年に駆け寄って声をかけた。

「探し回っちまいましたよ……。早く戻って下さいよ、仕事、溜まってるんすから」

「何だよお前はよく……。この満ち足りた至福の一時を邪魔するとは、何と無粋な」

「勘弁して下さいよ。携帯の電源は切ってるし、行き先も言わずに消えちゃうし……。これで何度目っすか？」

「よく見つけれられたな？」

「先輩の行動パターンは把握してますからね。ダテに二代目を襲名した訳じゃないっすから」

小柄な青年は『どうだ』と言わんばかりに胸を反らし、得意気な顔になった。

「なかなか有能な秘書ですこと。これも貴方の教育の賜物ですかしら？」

長い髪の女性は、クスクスと楽しそうに笑った。
「あゝあ……こんな事なら色々仕込むんじゃないかな……」
一陣の風が、再び春の街を駆け抜けて行った。

桜の花弁が風に舞う……。
優しく、静かに……。

春の風はあくまでも穏やかで、しかし、時折その表情を変え……。

「ちょっと待った！ それはおかしいよ」
「何でえ？ 全然おかしくなんてないもん」
「だって、今日はわたしの当番じゃない」
「起きて来ないんだもん、しょうがないでしょ？」
「起こしてくれてもいいじゃない！」
「子供じゃないんだから、自分で起きられない人の事なんて知りません！」

使い込まれた感のあるキッチンで、ショートカットの女性とポニーテールの女性が言い合いをしている。
ポニーテールの女性の方が若干小柄であるものの、勢いではショートカットの女性に負けていないようだ。
「なあ、どうでもいいけど、もう三時だぜ？ 俺、腹減ってるんだけど……いい加減に昼飯にしないか？」

青年は力無くテーブルに両肘を着き、組み合わせた両手に顎を乗せて言った。

「どうでも良くないっ！ あんたはお黙り！」

「そうだよ、黙ってて！」

「……はい」

口論している筈なのに、二人の息はピッタリと合っているようで、青年の付け入る隙など全く無い。

確か昔、これと似たような事があったな……と、青年は思った。黙っていると言われたからには、迂闊に口を挟む訳にもいかない。そんな事をしたら、今度は自分が槍玉に上がってしまうだろう。青年はボサボサの髪に指を突っ込み、ガシガシと頭を掻いた。

困った時や考え事がまとまらない時にする、昔からの癖である。

「何よ、ちよつとくらい料理が上手だからってさ。わたしだって、やろうと思えばそれなりに出来るんだから」

「へえへえへえへえ？ やろうと思えばですか？ じゃあ、普段はちつともやろうと思つてないんですね？」

「……どういう意味かなあ？」

「そのままの意味ですけどお？」

「おのれえええ……！ 言わせておけば図に乗つてえええ……！」

「ふふんだ！ いつまでも大人しくしてると思つたら大間違いですよっただ！」

「やいやいと言い合いを続ける二人を見ながら、それでも青年はどこか穏やかな表情で……」

（父さん……。俺は、結局こんな答えしか出せなかったけど……どうかな？ やっぱり、俺つて馬鹿かな？）

そんな事を考えて、青年が自分に苦笑すると、

「おゝい、こら！ 何を揉めてるの！ 外まで丸聞こえじゃないの、恥ずかしい子達ねえ」

呼び鈴も押さずに家の中に入って来た長い髪の女性は、両手に抱えた荷物をテーブルの上に乗せ、言い合いをしていた二人の顔を呆れたように交互に見た。

「あ、お母様……」

「お母さん！ 聞いて下さいよお！」

「あ！ 卑怯だぞ！ お母様を味方に付けようなんて！」

「シャッラップ！　おい、愚息！　嫁達の揉め事くらい、スパッと解決しなさい！」

「無茶言うなよ、母さん。俺に、こいつらの仲裁なんて出来る訳無いだろ？　そんな事したら、結局、俺が酷い目に遭うんだから……」

「ちよつと、何よそれ……大体、あんたはどっちの味方なのよ！」

「そうだよ！　この際、ハッキリして欲しいな」

「え？　いや、どっちって言われても……」

怒りの矛先が自分に向いた事を悟り、青年は椅子から腰を浮かせて逃げる態勢をとった。

どちらの味方をする訳にも行かないのだから、青年としてはこれ以外の行動を取る選択肢が無い。

しかし……。

「あ！　また逃げる気だな！？」

「今日は逃がさないからね！」

二人は前後に青年を挟み込むようにして退路を断ち、ジリジリと近付いて行く。

とても先程まで言い合いをしていたようには思えないくらい息が合っている。

こういう時の二人のコンビネーションは抜群のようだ。

「さあ！　ハッキリ言ってもらいましょうか？」

「覚悟を決めなさい！」

「いや……。そうだ！　ここは一つ平和的解決を考えてだな、みんなで和解案を模索しないか？」

「却下！」

「これ以上の妥協は拒否します！」

「う……」

ついには壁際まで追い詰められた青年は、救いを求めるように母の顔を見るが、処置無しとでも言うように、母は両手を広げて笑っているだけだった……。

「涼！ ハッキリしなさいよ！」

「涼ちゃん！ わたしと利恵ちゃん、どっちの味方をするの！」
「勘弁してくれっ！」

あまりの煩さに目が覚めてしまったのか、
『いい加減にしてよ』
と訴えるように、二つの揺りかごから同時に泣き声が上がった…
…。

緩やかに、穏やかに、時という名の船が思い出の海を奔る。

時に嵐を越え、時に風でその動きを休める事はあっても、進むべき方向を見失う事は無い。

愛という光がある限り、友という舵がある限り、決して迷う事など無いのだ。

いつまでも、永遠に……。

元旦行進曲

それは、中学生生活最後の元旦の早朝の事。

早朝と言っても、既に町は目を覚まして……いや、昨夜から眠っておらず、活気に満ちた人波が町中に溢れている。

こうして一年に一日しかない大晦日を過ごし、そして新年を迎えるというのは、日本のみならず世界の恒例である。

もつとも、どんな一日だって一年に一度しかないのは同じなのだが……まあ、今は置いておこう。

そんな寒さにも負けない人達がめでたさに浸っている頃、『ピンポン』と宇佐奈家の玄関のチャイムが鳴った。

……しかし、誰も応対に出ない。

玄関が開かないどころか、インターフォンにも出ないという事は

……。

「……誰もいないのかな？」

「おば様はご実家だけど、涼ちゃんはいる筈だよ？ 留守番頼まれてたもん」

昨夜は利恵の家で夜を明かし、今日はこうしてお正月らしく髪をセツトし、二人とも綺麗な晴れ着に身を包んでいる。

どこに出しても恥ずかしくない姿の利恵と雛子は、涼が出て来るのを待った。

だが、一向に出て来る気配が無い。

『ピンポン』

もう一度チャイムを鳴らしてみる。

……しかし、やはり誰も出ない。

「……あいつめ、さては寝コケてるな？」

「ね、ねえ、やっぱり二人で行こうよ。寒い日の涼ちゃん、機嫌悪いよ？ 特に寝起きは……」

「そこで甘やかしちゃ駄目っ！ こうなったら意地でも起こすっ！」

これでもかとはかり、まるでマシンガンのように利息はインターフォンのボタンを連打した。

当然、家の中では呼び出しのチャイムがボタンを押した回数分だけ鳴る。

結構大きな目の音に設定されているのか、その音は外にいる雛子の耳にもハッキリと聞こえるくらいだ。

という事は、そんな物を何度も聞かされていれば当然の如く……。「うるせえぞっ！ 誰だっ！」

と、ダルマと見紛うばかりの厚着をしている涼が、二階の窓から物凄い形相で顔を出した。

暖かい布団に包まって気持ち良く眠っていた所を邪魔されたのだから、涼が怒るのも無理は無い。

だが、

「あ、やつと起きたな？ 涼、初詣行こうよお！」

ニコニコしながら言う利息には、罪悪感の欠片も無いようだ。

「断るっ！ こんな寒い日に、何でわざわざ人込みの中へ特攻せにやなんのだ！」

「何を？ この軟弱者めっ！ ほらほら、晴れ着の美女が二人もお迎えに来てるのよお？ 両手に花だよお？」

「……俺は寝る」

ピシャ！ と音を立てて、涼は窓を閉めた。

ご丁寧にカーテンまで引いているところを見ると、どうやら外へ出ない事を強くアピールしているらしい。

「見事にスルーしやがったな……？ 頭に来たっ！」

再度、利息の連続インターフォン攻撃が始まったのだが……。

「あれ？ 鳴らなくなっちゃった」

「電池抜いたんじゃないかな？」

「おのれ小癪なあゝ……！ ヒナちゃん、合鍵！」

「多分、チェーンかけてあるよ？」

雛子を家族同然に扱っ環は、いつも雛子に家の合鍵を預けている。

環が家を空ける時には、雛子が宇佐奈家を管理しているのだ。

利恵は鍵を受け取って開錠し、ノブを捻ったのだが、やはり雛子の言った通り、ドアは五センチくらいしか開かない。

「ふっふっふ……面白いわ……。わたしを怒らせたらどうなるか、目にモノ見せてくれる！」

「げ、玄関壊したり、窓割ったりしちゃダメだよ？ お正月は、どこもお休みに直せないんだから」

思わず言ってしまった一言に、雛子はハっとした顔になった。

別に本気でそう思っていた訳ではないのだが、ついつい言ってしまったのだ。

「ヒナちゃん……普段、わたしの事をどんな目で見てるの？」

……言わずもがなである。

「あ……あはは……ごめんね？ ちょっとした弾みだから……」

「うふ……許してあ・げ・る。その代わり犠牲になってね？ いい事考えたからさ」

「え？」

と、雛子が不思議そうな顔をしていると、利恵は雛子の肩を掴んでクルリと半回転させ、振袖の脇から手を入れて雛子の胸を鷲掴みにした。

当然、いきなりそんな事をされれば、例え相手が同じ女性でも驚く訳で……。

「きゃあああーっ！ ヤダーッ！」

辺りに雛子の悲鳴が轟いたのとほぼ同時に、

「どうしたヒナ！ 何があった!？」

玄関のドアが開かれ、涼が飛び出して来た。

その一瞬、利恵の目が光った！ ……ように見えた。

「かかったわね、涼っ！」

雛子の影から飛び出すと、利恵は素早く涼に飛び掛り、スリーパーホルドの形に捉えた。

しかも、回した腕が頸動脈を絞めている……。

たまらず涼は、利恵の腕をタップする。

「着替えて初詣に行くか、このまま天国へ行くか。好きな方を選んでね」

「行く……行きます……。是非、初詣の方に連れて行って下さい……い……」

「利恵ちゃんのバカーッ！」

「そう言えば、真君はどうしたの？」

神社までの道すがら、利恵はイベント好きの真一郎を見かけないので、不思議に思って涼に訊いた。

「真のこった、今頃どこぞでナンパでもしてるんだろ？」

「いつまで経っても行動パターンの変わらない人ねえ……」

「お前が言うな」

涼は、ジト目で利恵を見ながら言った。

何しろ出会った頃からの強引さが未だ健在なのだから、涼がそう言いたくなるのも無理からぬ事なのだ。

「何よお……ねえ、失礼しちゃうと思わない？ ヒナちゃん」

「知らないっ！」

雛子は、まだ先程の一件で機嫌が悪いまま、ムスツとした顔をして二人の後に付いて歩いている。

利恵に同意を求められてもニコリともしない。

「あゝん、いい加減に機嫌直してよお……」

「直んないっ！」

ブン！ と、そっぽを向いてしまう。

いつものポニーテールではなく、今日は髪を結い上げてあるので、髪飾りが『シャリン』と軽い音を立てた。

「まったく……さつきは驚いたぞ。ヒナが襲われたのかと思ってさ」

「実際、襲われてたもんっ！」

「実って羨ましかったなあ……まだ掌に感触が……」

と、ニヤニヤしながら、両手をニギニギする利恵。

「うう……！ 恥ずかしい事言わないでよおっ！」

「オヤヂかお前は。そこでまた怒らせてどうすんだ」

「ごめんなさい！ 反省してます！ もうしません！」

ニギニギしていた手を、今度は合わせてスリスリする。

それがふざけているように見えて、雛子は益々機嫌を悪くした。

「ヒナ、もう許してやれ。正月早々、いつまでも怒っててもしよ

うがねえだろ、な？ それに、せっかくの綺麗な着物が泣くぞ？」

仕方なく、涼は話題を逸らそうと、雛子の着物を誉めた。

涼に着物を誉められて、雛子の機嫌は若干良くなる。

「えと……似合ってるかな？」

「……ああ、別嬪さんだ」

「えへへ……ありがと、涼ちゃん」

雛子も存外単純である。

「ねえねえ、涼、わたしは？」

「馬子にも衣装……って言うんだっけ？」

「……もう一回言うだけの勇氣、ある？」

「とてもお似合いです、お嬢様」

「まあ良からう」

やれやれと、涼は深い溜息を吐いた……。

そんな調子で他愛も無い会話をしつつ暫く歩くと、

「あ、真君だ」

神社の鳥居が見えて来る頃、雛子が指差す方向に、人込みの傍で

ウロウロしている真一郎を見つけた。

「へえ〜？ あいつが初詣なんて意外だな」

「……なんか、ちよつと違うみたいよ？」

利恵に言われて良く見ると、確かに列に並ぼうとしているように
は見えない。

何だか、ガツクリと肩を落としている感じだ。

「こりゃ、ナンパ失敗の図ってとこか？　　ったく……正月早々、何やってんだ」

「おゝい！　そのフラレ小僧ゝ！」

その声に、周りの視線は一瞬だけ利恵に向いた後、声をかけられた真一郎に集中する。

真一郎は慌てて駆け寄って来ると、

「こういう危険な生き物を放し飼いにすんな！」

利恵ではなく、涼に文句を言った。

「何で俺に言うんだよ？」

「お前が飼い主だろうが！　しっかり管理しろよ！」

「ちよつと、何よそれ。人を猛獣みたいに言わないでよね。そんな事言ってるの怒っちゃうから」

「フ……今日は着物、いつものような蹴りは出来まい！　高梨の戦闘力は、いつもの半分以下……グフォッ！？」

タカを括っていた真一郎の脇腹に利恵の貫手が入ると、一瞬、真一郎の呼吸が止まった。

いくら真一郎の筋肉が凄くても、かなりの高速で繰り出される利恵の貫手は衝撃力が半端ではないのだ。

「わたしのやってるのは少林寺拳法。　テコンドーじゃないんだから、両手もメインで使うの」

「も、猛獣どころじゃねえ……こいつは特別天然危険物だ」

真一郎は脇腹を押さえて蹲った。

……どうやら相当痛かったらしい。

「……しかし凄い人出だな」

涼は右手を翳して言った。

普段は閑散としているのに、一体何処からこんなに湧いて出たのかと思う程、神社は人で溢れ返っていた。

鳥居の外まで伸びる数珠繋ぎの人の列は、遥か彼方まで繋がっているように見える。

「最後尾が見えないぞ？　仕方ない、諦めて帰ろう」

「お待ちっ！」

利恵は、踵を返して帰ろうとする涼の皮ジャンの襟を掴んで引き止めた。

手加減無しで引つ張ったものだから、涼は一瞬首が絞まって気が遠くなりかけた。

「絶対に順番は回って来るんだから、待てばいいでしょ？」

「こんな寒風吹きすさぶ中、俺を立たせておく気か？」

涼は、両腕で自分を抱きしめるようにして抗議した。

人込みと寒さが大の苦手な涼にとって、ここはまさに地獄である。

「わたし達と一緒にんだから、大丈夫よ」

「どういう理屈だ、それは……」

「わたしとヒナちゃんまで、くっついててあげる。暖かいぞあ？」

そう言つと利恵は、涼にピッタリと寄り添った。

「ほらほら、ヒナちゃんも！」

「あっ！」

利恵に引つ張られて、雛子も涼にくっつく形になる。

途端に、雛子の顔は真っ赤になった。

「あつたけえかあ？ ヒナ」

「う……うん、何となく……」

「そうかなあ……？ 大して変わんねえと思うけど……」

「さあ、並ぼうよ。 どんどん後になっちゃうよ？」

「しょうがねえ、行くか……」

「……お前ら、俺を置いて行こうとするなよ。 冷てえな、まった

く……」

真一郎もヨロヨロと立ち上がり、歩き出した。

「おっと！ ……何とも歩き辛いな、こりゃ」

「あ、ホイホイと」

人込みに押されてバランスを崩す涼に対して、真一郎は巧みに人

の流れに乗り、混雑をかわしている。

この辺は運動神経云々よりも、普段からの慣れが占める割合が大きいのだ。

「……器用な奴だな」

「こんなもんで驚いてたら人生の荒波は越えられないぞ?」

「どういう例えだ、そりゃ」

「……あれ? おい涼、雛子ちゃんは?」

「え?」

真一郎に言われて見回してみると、雛子の姿が無い。

「さっきまでここにいたのに……どこ行っただよ?」

「高梨もいねじゃねえか。お前、何やってんだよ」

「困ったな。まあ、いないもんは仕方ない……とか言っつて、このまま帰ったら殺されるだろうな」

「訊くまでも無いな」

「利恵は体力あるから大丈夫だろうけど……この混雑じゃ、ヒナが心配だな」

「雛子ちゃん、ちっこいからな。見えるか?」

「……まるつきり見えん」

「二人で固まっつてもしょうがねえな。よし、二手に分かれて探そうぜ」

「お、思うように歩けないよお……」

案の定、雛子は人波に翻弄されて、流されるままになっていた。列の外に脱出する事も叶わず、意思に反して、ただ前に進まされるのみだ。

「うゝん! ……駄目だあ……全然隙間が空かない」

いくら周囲の人を押し退けようとしても、雛子の力ではどうしようもない。

誰かの足を踏まないようにするので精一杯である。

こういつ時、頭ひとつ分だけ上に出る筈の真一郎を探そうとするのだが、首を巡らせる事も困難だ。

一方、その頃……。

「あゝもうつ！ 何でそんなに押すのよっ！」

利恵も雛子同様、圧倒的な人の群れに悪戦苦闘していた。

ただ一つ雛子と違うのは……。

「あゝ、ストレス溜まる……。後方に伝達っ！ 事故を未然に防ぐ為にも、無闇に前に進もうとするのはおやめっ！」

と、こちらは若干、スペースに余裕を作る事に成功している。

さて、そんなこんなで、はぐれてからそろそろ十分が経過しようという頃……。

「あそこから、こっち方向に流されたんだろうから……いるとすれば……」

二人を探していた涼が前方へと目を凝らしてみると、人の波の中に不自然に窪んだ部分がある。

それだけではなく、どうも周囲の人間が気を遣っているフシがある。

「もしかして、あそこか……？ ちょっとすみません！」

何とか人波を掻き分けてその場所へと辿り着くと、窪みの中心で心細げにキョロキョロしている雛子がいた。

成る程、確かにこんなにもウルウルした目で見られたら、周りの人間もさぞ心苦しかっただろう……。

「いたいた、ヒナ！」

「あ……涼ちゃん！」

「ほら、こっちに手え出せ」

「うん！」

差し出された手を掴むと、そのまま自分の方へと引き寄せ、涼は何とか雛子の救出に成功した。

と言ってもまだ人ごみの中なので、そのまま進む以外に方法は無

い。

「利恵は？　一緒じゃなかったのか？」

「うん。最初は手を繋いでただんだけど、押される内に放しちゃって……」

「あちゃ……」

涼は困ったような顔で頭を掻いた。

いつまでも発見出来ずにいたら、後で何を言われるか判ったものではない。

そんな涼の考えが判るのか、雛子はクスクスと笑った。

こうなったら真一郎だけが頼りである。

さて、当の真一郎はというと……。

「さ……て……？　あそこから、こっち方向に流されただろうから、いるとすれば……あっちの方しかねえよな」

と、真一郎が手を翳して目を凝らしてみると、人の波の中に不自然に窪んだ部分がある。

それだけではなく、どうも周囲の人間が気を遣っているフシがある。

「もしかして、あそこか？　はいはい、ちょっとすんまつせーん、通してねー」

何とか人波を掻き分けてその場所へと辿り着くと、窪みの中心では居丈高に周りを威嚇している利恵がいた。

成る程、確かにあれだけ怖い目で睨まれたら、周りの人間もさぞ生きた心地がしなかったであろう……。

「ビンゴ！　高梨！」

「あ……真君！」

「ほら、こっちに手え出せ」

「はい、お手！」

「わんっ！　……って、バカやつてる場合かつ！」

差し出された手を掴むと、そのまま自分の方へと引き寄せ、真一郎は何とか利恵の救出に成功した。

「はあ、助かった。……あれ？　ねえ、涼は？」

「さあ？　雛子ちゃん探してんじやねえか？」

「むう……」

その後、やつとの事で合流を果たした四人は、そのまま流れに乗り、拝殿へと向かって歩を進めた。

人の多さは全く変わらないが、今度は互いに場所を確認しながらなので、はぐれる心配は無さそうだ。

「早目に見つかって良かったよ。一時はどうなる事かと思ったぜ」
「涼なんか、二人を見捨てて帰ろうとしたもんな」

「よせよ馬鹿！」

と、涼が焦って利恵を見ると、何やら怖い顔をしている。

（ほら見る……こつちを睨んでるじゃねえか。どうすんだよ、真）

（さ……さつきより怖い顔してるぞ！　俺はもう嫌だからな！　今度は涼が行けよ！）

（わたしより、先に利恵ちゃんを助けてあげないからだよ……）

（そんな事言われても、ヒナを先に見つけちゃったんだから、しょうがねえだろ……）

利恵から一歩遅れるようにして、三人はひそひそと密談を始めた。今後の対策を練っているのだ。

「……あんた達、何をコソコソ話してんのよ？」

だが、そんな事をしていればさらに利恵の機嫌を損ねてしまうのは当然である。

さつきよりも、一層、利恵の表情が陰しくなった。

（ほら、涼ちゃん！）

（とつとに行けよ！　俺らを巻き込むんじやねえっつーの！）

雛子と真一郎に促されて、涼は利恵の傍へと近付いて行く。

近付くといってもほんの一步半くらいのものだが、涼にとってはとてつもなく長い、そして重い一步半であった……。

「あゝ……もしもし、利恵さん？」

「……何？」

「えゝっと……救出が遅れまして、どうも申し訳ありませんでした。今後は迅速な活動を心がけたいと考えております……」

顎をポリポリ掻きながら、適当な言葉を並べている涼の手を、利恵はギュツと握った。

「……ちゃんと掴んでてね？」

「あ、ああ……」

どうにかこうにか順番が来てお賽銭を投げ込むと、利恵と雛子が神妙な面持ちで手を合わせた。

それとは対照的に、涼は大欠伸をしながら目を擦っている。

「やゝねえ、この男は……こつちのご利益まで無くなりそう」

「しょうがねえだろ？ 眠いんだから……。そもそも俺の安眠を妨害したのは誰だよ」

「ヒナちゃんでしょ？」

「正月早々に嘘なんてついてると、今年一年口クな事にならねえぞ……」

やれやれといった表情を浮かべる涼に向かって、利恵はケラケラ笑っている。

「ねえ、真君は何お願いした？」

「素敵な出会いがありますようにってね。 今年は何かありそうな予感がするんだ」

今年も真一郎のスローガンは変わらないようである。

「利恵ちゃんは？」

「涼のネボ助が治りますように」

「……下らねえ事言っな。 さあ、もう終ったんだし、とつと帰るっぜ」

「まだよ、御神籤引くんだから。 ところで、ヒナちゃんは何をお

願いしたの？」

「え？ え〜っと……内緒」

「お？ 何やら怪しい雰囲気……白状しないと、また触っちゃうぞ？」

両手をニギニギする利息を見て、雛子は慌てて両脇を固め、真一郎の後ろへと退避した。

さすがにこんなに人目のある所ではやらないとは思うが、それでも一応、念の為なのである。

何しろ相手が相手だし……。

「あれ？ でも、願い事つてのは、人に言つと叶わなくなるんじゃないか？」

確かそんなような事を聞いた記憶のある涼は、首を傾げている。

「そ、そんな！ それじゃあ、涼は一生ネボ助のままなの！？」

「本気で願掛けしたのかよ……」

「しまった……俺様の願いが……」

ガックリと肩を落とす真一郎を囲むようにして、一向は御神籤売り場へと歩を進めた。

「おおっ！ 大吉だ！」

「わたしは中吉〜！」

「やったね、雛子ちゃん！」

良い結果が出て喜んでゐる二人に対して、利息と涼は微妙な表情をしていた。

「なあ、お前らはどうだったんだ？」

「わたし末吉〜……なんかイマイチ」

「涼は？」

「……凶」

と言った途端に、パッと利息と真一郎が涼から離れた。

二人でヒソヒソと何かを囁き合い、涼に対してイヤ〜な視線を送

っている。

「何だよ？」

「きゃあ！ 寄らないで！ 不運が移る〜！」

「せっかくの大吉が不吉な色に染まるっ！ 俺様の半径十メートル以内に入るな！」

「なっ……ちくしょう、俺だけ不幸になつてたまるか！ お前らも道連れだっ！」

「わああっ！ 逃げろ高梨！ 大凶菌が移るぞーっ！」

利恵と真一郎はシツシツと犬を追い払うような仕草をしつつ、更に涼との距離を空ける。

「勝手に人の運を下げるなっ！ しかも菌で何だ菌で！ 俺は病原体かっ！」

「これは危険だ！ 早速、衛生局に連絡しないと！」

「真君、駄目よ！ お正月だから、衛生局はお休みだわ！」

「何てこった……人類の歴史は、ここで幕を閉じるのか……！」

「そんなに大層なもんかっ！？ ……あつたま来た！ お前ら、この凶の御神籤、煎じて飲ませてやるっ！」

逃げ出す二人を追いかける涼。

そんな三人を目で追いつつ、雛子は御神籤を枝に結び付けた。

そして静かに目を閉じて、両手を合わせる。

（これからずっと、みんなと仲良く出来ますように……。ずっと、みんなで楽しく過ごせますように……。）

ずっと……ずっと……。

家族の肖像

夕暮れの公園の砂場の近くで、小さな女の子が座り込んで泣いている。

「どうやら転んでしまったらしく、膝を擦りむいてしまったようだ。泣くなっ！ 泣いたって痛いのは治らないんだから！」

「だって、痛いんだもん……」

「こんなもん、ツバでもつけときゃすぐ治るよ」

男の子が自分の指を舐め、女の子の膝へつけようとすると、

「汚いよおっ！ そんな事したら、余計に痛くなっちゃうもん！」

女の子は必死に身体を振り、涙を一杯溜めた瞳のまま、男の子に精一杯の抗議をした。

「何だよ、人をバイキンみたいに言いやがって……もう知らねえかな！ いつまでもそこで一人で泣いてろっ！」

そう言うと、ボサボサ頭の男の子は女の子に背を向けて、さっさと公園の出口に向かって歩き始めた。

男の子にしてみれば好意でした事なのに、それを思い切り拒絶された事で腹が立ったのだろう。

だが、女の子にしてみれば、やはり傷を触られるのは痛くて嫌だし、男のこの手が汚れていた事もあって拒否してしまったのだろう。決して男の子の事を嫌いで拒絶した訳では無いのだが、それはまだ経験不足な小さな子供には感じ取る術が無いのである。

「あ！ たもちゃん、待ってよお！ 置いて行かないでよお……あっ！」

女の子はベソをかきながらも立ち上がり、痛む足を必死に動かして男の子の後を追った。

だが、誰かが掘ったのだろう、地面のくぼみに足を取られて、女の子は派手に転んでしまった。

先程擦りむいた膝小僧を強かに地面に打ちつけた女の子は……。

「う……う……うわあああゝん！」

「ったく……何やってんだよ、お前は。ドンくさいな」

「わああーん！ たもちゃんがイジメたああーっ！」

「あーうるせえっ！ お前が勝手にコケたんだろぅがっ！」

女の子に文句を言いつつも、男の子は女の子の傍に歩み寄って手を引いて立たせると、服の汚れをパタパタと叩いてあげた。

何だかんだ言っている、やはり泣いている幼馴染を放っておく事など出来ないのだ。

「いちいちビャービャー泣くんじゃねえよ。うるせえな」

「だってえええ……ホントに痛いんだもぉん……」

しゃくり上げながら言うと、女の子は男の子の顔をジッと見つめた。

「な……何だよ、オンブはしねえからなっ！」

「恭ちゃんだったら、オンブしてくれるのに……」

「……だったら恭一と遊べよ！」

男の子はプイと背中を向けると、今度は振り向かずに公園を出て行ってしまった。

それきり、男の子は女の子と遊ばなくなった。

何度女の子が誘いをかけても、他の男の子の友達と一緒に、女の子が追い付けない速さで走って行ってしまふ。

それ以来、女の子は独り寂しく公園のブランコに揺られている事が多くなった。

「俺は可哀相だと思うんだけどなあ……保は、そう思わないのか？」
サラサラした髪をかき上げる仕草をして、少年が言った。

いや、単に少年と言うより、美少年という形容がピッタリだろう。色白で、どこか色気すら感じさせるその少年は、テーブルを挟んで座っているボサボサ頭の少年をジッと見据えている。

「だったら恭一が遊んでやればいいだろ？ 環も恭一の方がお気に入りみたいだしさ」

面白く無さそうに言う保の顔を見て、恭一はクスクスと小さく笑った。

「俺はクラスの女の子と遊ぶので忙しいんだ。……ところで、この家は客に飲み物も出さないのか？」

「……今出すよ」

保は冷蔵庫を開けてペットボトルのジュースを取り出すと、恭一の前に『ドン！』と置いた。

どうせそう言うだろうと思って居間には通さず、ダイニングで話しを始めて正解だった。

「コップは？」

「俺の家は喫茶店じゃねえっ！ そのまま飲めっ！」

自分もジュースをラッパ飲みながら、保は不貞腐れたように言った。

恭一に言われるまでもなく、ちょっと環が可哀想かな？ と思っ
てはいたのだ。

だが、それを素直に認めるには、小学二年の保は幼過ぎた。

「環は保と遊びたいんだってさ」

「やだよ……。俺、いつも環がくつつついて来るから、野球もサッカーも全然出来なかったんだぞ？ クラスの奴にも、たくさんからかわれたしさ……」

まあ、からかって来た相手は全員殴り飛ばした訳だが……。

「女の友達だっているんだから、そいつらと遊べばいいんだよ。」

男と女じゃ遊び方も違うんだし」

「でもさ、アイツだって、お前にくっついてばかりだったから、あんまり友達いないみたいだぞ？」

「そ、そんなの……」

「そりゃ環の勝手だけだよ。一人って、つまないだろうな……
…なんて思わないか？」

「で、でも、アイツすぐ泣くんだぞ！？ お前だって困ってたじゃねえかよ！」

保は同意を求めたが、恭一はヤレヤレといった感じで肩を竦めるだけで、保の意見に賛同する様子は無かった。

「じゃあ、どうすりゃ、お前は環と遊んでやるんだ？」

「どうすりゃって……ま、まあ、俺と同じくらい野球とかサッカーが出来て、すぐに泣かなきゃ……」

「無茶言うなあ、保は。環は女の子だぜ？」

「……」

言われるまでもなく、環が女の子だという事は、保にだって充分解っている。

保が全力で走れば環は絶対に追い付けないし、水切りだって保の方が上手い。

逆上がりも保の方が先に出来るようになったし、水泳だって保の方が早いし、たくさん泳げるのだ。

それを同じようにやれと言っても、今の環には絶対に無理だろう。

「……じゃあ、俺は帰るよ」

「え？ もう帰るのか？」

「女の子達と遊ぶ約束があるんだ」

「あ、そ……」

恭一は残っているジューズを一息に飲み干すと、椅子からピョンと飛び降り、玄関へと駆けて行った。

「俺が悪いのかな……？」

保は自分のジューズを見ながら暫く考え込んでいた。

一方、外へ出た恭一は、電柱の陰に隠れるように立っている女の子に声をかけた。

「あ、恭ちゃん……たもちゃん、何て言ってた？」

「一緒に野球とかサッカーが出来るようになれ。すぐに泣かない、強い子になれ。……だってさ」

「……そしたら、たもちゃん、遊んでくれるの？」

「多分ね」

「よゝっし、わたし頑張るっ！ 恭ちゃん、色々教えてね！」

「いいけど……俺は女の子らしいのがいいんだけどなあ……」

しかし恭一は、せっかく頑張ろうとしている環の決意に、それ以上の事は言えなかった。

そして……。

「恭一……お前、環に余計な事言つたろ？」

「俺は、お前の気持ちをそのまま伝えただけだ」

「何だよ、俺の気持ちって!？」

「そこっ！ 男二人でコソコソ話さないっ！」

中学に入ってから、保と環の立場は完全に逆転してしまった。

環は保よりも運動が出来るようになり、保がどんなに必死に逃げても、あつと言う間に追い付いて、その首根っこを捕まえてしまう。そして捕まえたあとは、必ず放課後に付き合う事を約束させるのだ。

「どうせまたスケベな話してもしてたんでしょ」

「そら恭一だけだ」

「おいおい……いくら俺でも、スケベな独り言は言わんぜ？」

「そんなのどうでもいいから、今日はどこ行く？」

環はニコニコしながら保に訊いた。

今日も結局、逃げ切れずに捕まった保は、今まさに約束をさせられそうになっているのだ。

「そんなに毎日お前にばっか付き合ってられるかよ。今日はクラスのヤツらと約束が……」

その為に、終業のチャイムが鳴ると同時に疾風の如く教室を抜け出したのだが、校門を出た所で環に追い付かれてしまったのだ。

後からのんびり出て来た恭一は、偶然その場に遭遇したという訳

である。

「わたしさあ……小さい時に、すっごく寂しい思いをさせられたんだよね。あれって誰が意地悪したんだっけかなあ？」

「ガ、ガキの頃の話しを持ち出すなよな！ もういいだろ？ 今まで散々付き合っただじゃねえかよ……」

「ま、諦めるんだな。そんな事言っても、結局お前が折れるんだからさ」

疲れたように言う保を見ながら、恭一は楽しそうに笑っている。

「そうだ！ たまには恭一と行けよ、な？」

「あゝダメダメ、俺は淑女達との交遊で忙しいのだ。じゃ、そういう事でー！」

「あ、恭一！ てめえ、逃げんのかよっ！」

保が手を伸ばして捕まえようとしたが一瞬遅く、既に恭一は保の射程距離外へとダッシュしていた。

ただでさえ足の速い恭一は、こういう時、普段以上の速さを発揮するのである。

「ちくしょー……！」

「さ、もう観念して、わたしに付き合いなさいよ」

「でも、今日は……」

大好きなバンドのライブがあるのだ。

苦労してやっと手に入れたチケットに書かれた日程は、今日が最終日となっている。

別に今日行かなければ二度と見られないという訳でもないが、今日しか聴けない曲もあるだろう。

それを考えると、今日ばかりはどうしてもすぐには譲れないのだ。「お願いだからあゝ……。わたし、あれから一度も泣かないで頑張ったんだよ？ ご褒美くれても、バチは当たらないでしょ？」

「ご褒美って……今まで何回お前に付き合ってたと思ってんだ！」

「回数の問題じゃないのっ！ いつまでもゴチャゴチャ言っていると

……怒るぞ？」

「わ、解ったよっ！ 解ったから大人しくしてろっ！ ……あゝあゝ一度言い出したら聞かないのが環である。

これは保が首を縦に振らない限り、いつまでも言い続けるだろうし、本当に怒らせてしまつては大変なのだ。

（つたく！ 恭一の野郎、環に喧嘩の仕方なんて教えやがつて……！）

保と遊びたい一心からだつたのだろう、『強い子になる』の部分で環は必死に頑張つた。

その結果、今では保や恭一よりも『強い子』になつてしまつたのだ。

「人間、意外な素質とか才能つてのがあるんだな……」

「ん？ 何か言つた？」

「何でもねえよ。……で？ 今日はどこに行くんだ？ 金のかからねえ所にしろよな？」

チケットを買つたお蔭で、今月はもう余裕が無いのだ。

そのチケットも、もう紙くずになる事が決定してしまつた……。

「相変わらず貧乏ねえ」

「デッケエお世話だつ！ ……そう言えばハラ減つたな、何か作れよ環。お前、料理だけは上手いだろ」

「あんたねえ……あんた、わたしを何だと思つてんのよっ！ それに、料理だけとは何だ、料理だけとは！」

「他に何かあつたっけか？」

「うふ……知りたい？ 教えてあげようか？」

「……背筋に悪寒が走つたから遠慮する」

環の蹴りが保の尻を捉え、辺りに保の絶叫が木霊した……。

環は小さな日記帳を閉じると、表紙に付いている鍵をかけ、大事そうに箱に収めて押入れの奥にしまった。

「たまゝに整理すると懐かしい物が出て来るわね」

最後の片付けを終え、お茶でも飲んで一服しようと、環はキッチンへ入った。

留守にする事が多いキッチンも、日頃の整理整頓と、雛子のお蔭でいつでも綺麗だ。

「ここはわたしの聖域だもんね。雛子ちゃんに感謝しなきゃ」

毎日ここで保の為に料理を作る……そんなさやかな夢が叶い、子供も出来、お隣には仲の良い人もいる。

二人目を身籠った時、雛子のような女の子がいいなと思っていた。涼と二人で環のお腹を摩りながら、早く出ておいでなどと言って笑っていた。

毎日が幸せの連続だった……あの夏の日が来るまでは。

「ごめんね……弱いお母さんで……」

そつと自分のお腹を摩って、環がポツリと呟くと……。

「あ、母さん何か無い？ 俺、腹減っちゃってさ」

無粋な息子の一言が、感傷に浸る環を現実世界に引き戻した。

「何よあんたは。勝手に何でも食べたらいいでしょ？」

「だって面倒臭いんだもん……頼むよ」

「まったく……！」

環は涼の側まで歩いて行くと、無言のまま、いきなり頭を叩いた。普段、悪戯でやっているのとは違い、それにはかなりの勢いと強さがあった。

「イテッ！ 何すんだよ、いきなり！」

「あんた、段々お父さんに似て来るわね……」

「親子なんだから、当たり前だろ？」

「普通、男の子は母親に似るって言うじゃない？ なのに、あんたと来たら、わたしにはちつとも似ないじゃないよっ！ 憎ったらしい所まで、お父さんに似なくてもいいのっ！」

「いてててっ！ 何だよ、俺が何したってんだよおっ！？」

「うるさいっ！ あんたは黙ってわたしに叩かれてればいいのっ！」

「何でだーっ!？」

そして……。

その日の夕方、迎え火を手にした涼と環は、保を迎えに外へ出た。

ファイター

「白！ 明光道場、高梨利恵さん！」

「はいっ！」

天井から強い照明の光が、立ち上がった利恵を照らす。

試合場へ上がった利恵が開始線へと歩を進めると、観客席からは大きな歓声が上がった。

「す…… すごいな、高梨への声援」

声を出そうとした真一郎だったが、会場全体を包むあまりの熱気に、声援を送るタイミングを逃してしまった。

「そりゃあそうだろ、ここまで全部ストレート勝ちだからな。注

目浴びねえ方がどうかしてるぜ」

「利恵ちゃんて、凄く強いんだね……」

雛子は目を丸くして、戦いの舞台に上がる利恵を見ていた。

涼や真一郎が利恵を怖がる理由が、これで何となく解ったような気がする。

まあ、それだけが理由でもないのだろうけど……。

「赤！ 蓬萊道場、笙内洋子（しょうないようこ）さん！」

「はいっ！」

対戦相手の選手にも、利恵に勝るとも劣らない声援が飛んだ。と同時に、

「行けーっ！ 洋子！ いてもたれーっ！」

「洋子！ 負けたら晩御飯抜きねっ！」

関西弁と、もう一人は中国系の訛りが混じった女の子が、利恵の対戦相手に声援を送った。

拡声器を使っているのか、その声は会場の大声援にも全然負けていない。

ただ、その拡声器らしき物は、利恵が今までに見た事の無い形をしていた。

「面白い応援団ね、笙内さん」

「はは……悪い子達じゃないんだけど、ちよ〜っと煩いのが玉に瑕なのよ。あんまり気にしないでね」

「まあ、わたしの友達も似たようなもんだから」

「そうなの？ お互い苦労するわね」

「コホン！」

何やら世間話のような会話が交わされる中、主審の咳払いで、二人は開始線に立っている事を思い出した。

何とも呑気な二人である。

「二人とも、私語は慎みなさい。……始めっ！」

主審の合図とともに、利恵と洋子は一旦相手との距離をとった。身長は双方ほぼ同じくらい、リーチやコンパスも同様だろう。

お互いの実力は、今までの戦いを見て大体の予測はつけた。

だが……。

（笙内さん、あんまり大技は出さないみたいだけど、何か隠し球があるかも……。用心した方がいいかな？）

（高梨さんか……。ここまでオールストレート勝ちしてるんだから、相当な腕前って事よね。ここは様子を見て……）

互いに構えを取りつつ、相手の出方を窺っている。どんな技があるのか判らない内は、不用意に飛び込むのは危険だ。

だが……。

（お見合いしても仕方ないか。そういうのは、わたしの性に合わないもんね……。よし、行けっ！）

相手が様子を見ようとしているのを感じ取った利恵は、先制攻撃を仕掛けた。

「せいやあっ！」

利恵の右回し蹴りが、洋子の側頭部めがけて飛んで行く。

「くっ！ 何の……でやあっ！」

利恵のスピードの乗った蹴りを寸でのところでブロックすると、洋子も負けじと右の蹴りを返した。

その蹴りを、利恵はスウェーバックで間一髪かわす。 最初の一撃は双方互角だ。

（くうう……！ ブロックした腕がジンジンしてる…… まともに食らったらアウトだわ！）

いくら防具を着けているとは言え、ここまでの蹴りを食らえば確実に一本取られるところか、下手をすれば病院送りだ。

洋子はガードを固め、利恵の動きを目で追い始めた。

（速い！ あの蹴りは曲者ね、崩れた体勢からでも確実に当てて来る…… 油断したら負ける！）

確実に決められない限り、大技は控えなければならない。 フェイントも通じ難そうだ…… 利恵は、そう判断した。

「空手の大会だあ！？」

いつもの通り、自室で休日をダラダラと過ごしていた涼は、椅子を半回転させると、驚いた顔をして利恵に向かって言った。

中学二年も終わりに近付き、受験に向けての準備を始めた頃、殆ど日課になった宇佐奈家への襲撃をかけた利恵は、涼がビックリする顔を見てもニコニコしている。

まあ、利恵が涼を驚かすなど毎度の事だし、むしろこれを楽しんでいるフシもあるのだ。

「お前がやってんのは少林寺拳法だろ？ 空手の大会なんて出られるのか？」

「それが出られるんだな。 実は、師範代の友達の道場なんだけど、この間、合宿中に集団食中毒になっちゃって、出場選手が足りないんだって」

「それでお鉢が回って来たってか？」

「うん、その試合の時だけ、その道場所属って事にしてね。 わたしも一度、空手の人とやってみたかったしさ、いい機会だからOKしちゃった」

利恵はバッグからチラシのような紙を取り出すと、隣に胡坐をかいて座り直した涼に手渡した。

他人事のように笑いながら言う利恵を、困ったような目で見た後、紙に視線を落とした涼は、

「……おい、ここにフルコンタクト制って書いてあるぞ?」

と、再び利恵を見やった。

フルコンタクトとは、つまり寸止めではなく、直接加撃。文字通り、相手に打撃を加えるという事である。

「大丈夫大丈夫、ちゃんとグローブと防具は着けるから」

「けどなあ……」

「……心配? 出ちゃ駄目?」

「うーん……でも、OKしちまったんだろ? しょうがねえよ」

渋々利恵の出場を認めた涼だが、その顔は不満気だ。防具を着けたって気絶するくらいの事があるのを、涼も知っている。

いくらルールがあるといっても喧嘩とは違い、相手も稽古を積んだ専門家である。その攻撃は素人とは雲泥の差があるだろう。

それを考えると、やはり軽く「頑張れ」とは言い難いのだ。

そんな涼の後ろに回りこむと、利恵は背後から抱き付き、

「身体に傷が付いたら、嫌いになっちゃう?」

と、耳元で囁いた。

「アホ。下らねえ事言ってんじゃねえ」

「応援……来てくれる?」

「ああ、行つてやるよ。……気が向いたらな」

「えへ。ありがと、涼」

「せいっ!」

「はああっ!」

どちらも有効打の決まらないまま、時間だけが過ぎて行く。このまま行くと、延長戦に突入する事になるだろう。

（高梨さんの技、空手と違うわ……むしろ、あたしに近い！）

利恵の攻撃を避けながら、洋子は考えていた。

空手の大会だという事で、相手は当然、空手を使う者だとばかり思っていたが、蹴りも突きも、空手のそれとは何かが違う。

（クツ！ 予想してない所から攻撃が来る……これ、空手じゃないわ！）

利恵も同様の事を考えていた。

道場での稽古で空手対策を練ったというのに、相手の技はことごとく、その予想に反している。

（少林寺拳法……間違い無い！ これは少林寺拳法だわ！）

二人ともに攻めあぐね、互いに牽制するような打突が多くなった。それだけ、お互いの実力が伯仲しているという事だろう。

主審から指導が入り、双方共にポイントを失うと、客席からは一層大きな声援が飛んだ。

「ん？ なんかおかしいね」

試合の成り行きを見守っていた中国訛りの女の子は、肉まんをモグモグと食べながら怪訝そうな顔をしている。

隣に座る関西弁の女の子にも勧めているようだが、こちらは手を出そうともしない。

「何がいな、何ぞおかしなトコでもある？ 二人とも、ようやってるやん」

「洋子の相手の技、空手と違うね」

「ほなら洋子と同じやん。 何や？ 功夫か？」

「多分、少林寺拳法ね。 しかも、色々アレンジを加えてる……面白いな」

中国訛りの女の子の、肉まんを頬張る口の端が微かに上がった。と同時に、試合場を見つめる目が鋭く光った。

「互角か……相手の子、強いな」

涼は試合場を見つめながら、冷静に言った。

だが、その手は固く握られており、涼も緊張しているのが判る。

「くわああ……なんかこう、手に汗握るって感じだな……。高梨ーっ！ 気合入れるーっ！」

「利恵ちゃん、頑張れーっ！」

他の歓声に掻き消され、雛子達の声は利恵に届かなかったが、三人が自分を見ている事を、利恵は感じていた。

お陰で利恵は冷静さを失わずにいられる……焦りは無い。

（ヒナちゃん達に、みつともないところは見せられないわ……これで決めてやるっ！）

利恵の足が風を切った。

（……！ 左前一字構えからの蹴り！？ 天地拳第四系！）

利恵の構えから出される技を一瞬で見切り、洋子はすぐさま防御体勢に入った。

どうやら洋子は、少林寺拳法の型を熟知しているようだ。

「咬龍脚散水撃（かりゆうきやくさんすいげき）！」

利恵は、跳躍と共に連続した蹴り技を放った。

「くうっ！」

咄嗟に反応した洋子は、見事に三連続の蹴りをブロックする。

確かに跳躍の分の破壊力はあるが、今度の蹴りは連続で出している分、最初の蹴りよりは一発の威力が低い。

（これなら着地した後に隙が出来る……その時が勝負！）

洋子の目は、利恵の足が下に着く瞬間を計っている。

その時こそ、自分が攻勢に転じる時だ……！

（着地する！ 半身の体勢……なら、次は手刀っ！）

バリエーションに多少の違いはあっても、攻撃の段取りは決まっている事が多い。

一撃で決めるつもりが無ければ、蹴りはその殆どがフェイント。

もしくは、次の攻撃に繋げる為の伏線である。

洋子は利恵の連続攻撃を伏線、次の攻撃は手刀による物だと読み、それに合わせた攻撃を繰り出す体勢に移行する。

一撃で勝負をつけようというのだ。

だが……。

「ていつ！」

「えっ！？」

着地する寸前に両手を着いた利恵は、そのまま足を着ける事無く、洋子の予想に反して更に蹴り技を飛ばした。

カウンターを狙っていた洋子は、再び防御の体勢に入る。

（オリジナル！？　ここまで連続した蹴り技なんて……しかも両手を着いての蹴りなんて、カポエラじゃあるまいし！）

何とか利恵の四発目の蹴りもブロックした洋子は、すかさず反撃に転じようと、交差させた腕を解いた。

利恵は技を出した直後で構えがとれていない。　決めるならここだ！

（体勢を立て直す暇なんて与えないわ！　次の技を出す前に決めてやるっ！）

一気に間合いを詰めた洋子は、がら空き状態の利恵の顔面めがけて正拳突きを……。

「おっと、甘いぞ！　この技にはオマケもあるのだっ！」

「嘘っ！？」

利恵は手を着いた低い体勢のまま、洋子の足めがけて正面からのローキックを放った。

攻撃に転じようとして重心を預けていた洋子の足に、まともに利恵の蹴りが決まった。

（やられた……っ！）

防御する間も無く利恵の蹴りを食らった洋子は、たまらずその場に倒れ込んだ。

すかさず跳ね起きた利恵は、倒れた洋子に向かって、とどめの一撃を叩き込む。

……と言っても、その拳は当たる寸前で止められ、再び利恵の脇に収まった。

「やめっ！　白一本！　それまでっ！」

「へへへ、優勝しちゃったあ。ねえねえ、ヒナちゃん、わたし
って凄い？」

「凄い凄い！ 利恵ちゃんすごーい！」

「さすが高梨……御見それしました！」

「うーん、気持ちいい。二人とも、もっと言って」

表彰式を終えて着替えた利恵は、涼達との待ち合わせ場所でトロ
フィーと賞状を持ち、嬉しそうにしている。

思い切りやれた事への満足感と、三人の前で格好良く決められた
事。そして、何といっても優勝だ。利恵でなくても浮かれてし
まうだろう。

「見てるこっちはヒヤヒヤもんだったけどな」

「あれあれえ？ 涼はわたしが負けると思ってたの？」

「そうじゃなくてよ。その……何て言うかさ……」

「『お前の身が心配だったんだあ！』 って言わないのお？」

涼の前に回りこむと、利恵はニヤニヤとしながら言った。

「……今で言いたくなくなった」

「何でよっ！」

「高梨さん、おめでとう」

利恵と涼が乳繰り合っている所へ、対戦相手だった洋子と、先程、
観客席で騒いでいた友達である二人が近付いて来た。

「参ったわ。まさか五連続の蹴り技で来るなんて思わなかった」

洋子が右手を差し出すと、利恵もそれに応え、互いに握手を交わ
した。

試合の最中だけなのかと利恵は思っていたのだが、どうやら洋子
は普段から髪を結い上げているようで、雛子とはちょっと違った形
のポニーテールだ。

「あれって、高梨さんのオリジナルでしょ？」

「うん。わたし、足を使った技の方が得意だから」

「足癖悪いからね、こいつ」

言った途端に、真一郎の尻に利恵の蹴りが炸裂した。

「いつてええーっ！ お前！ 今、加減しなかったなあっ！？」

「おほほほ。チャンプの蹴りをもらえるなんて嬉しいでしょ？」

「んな訳あるかつ！」

その様子を呆気にとられて見ている洋子に気付くと、利恵は少し慌てたように、

「あ、ごめんね、笙内さん。これ、わたしのペット。ちょっと
躰が行き届いてなくて……恥ずかしいわ」

「誰がペットだっ！ しかも、これって何だ、これって！ ……コ
ホン。どうも、掃部関真一郎です」

「この子はヒナちゃん。わたしの愛人」

「あ、あのね……佐伯雛子です、どうぞよろしく」

「で、この人はわたしのダリン」

「……宇佐奈涼です、よろしく」

「は、はあ……笙内洋子です。こちらこそ、よろしく……」

困惑しつつ頭を下げた涼と雛子に、洋子も同じように頭を下げた。
何とも問題の多い紹介ではあったが、少なくともこの四人の仲が
良い事は解った。

「次は、わたしが挑戦するね！」

ズイ！ と洋子を押しのけて、細身の女の子が利恵の前に出た。
肉まんを頬張っていた、中国訛りの子だ。

もみ上げに当たる部分の髪を三つ編みにして垂らしているのが特
徴的だなと利恵は思った。

「楊光（やんくわん）。勁（けい）を使うね」

「勁？ ……中国拳法かな？」

「詳しい事は知らないね。わたし、お祖父ちゃんに色々習っただ
け。技の名前も自分で付けた」

「……何で？」

「一口に中国拳法言っても、ジャンルは色々なんやて。詳細の殆

どは誰も知らんらしいで？」

洋子の隣で、ちよつと目つきのキツイ女の子が言った。

こちらは利恵と同じくらいのショートカットだが、その身長は三人の中で一番小さい。雛子と同じくらいだろうか？

だが、利恵が注目したのはそれよりも、彼女が白衣姿だという事だろう。

「えっと……？」

「ウチは門奈加寿美（もんな かずみ）。未来のノーベル化学賞受賞者や、今から崇め奉るとき！」

「はあ……それはどうも」

「う、ごめんね、高梨さん。この子、ちよつと妄想癖があつて……」

「こら、洋子！人をアホの子みたいに言うなっ！」

何とも騒々しい人達だな……と利恵は思った。

もつとも、普段の自分達も彼女達と大差無いのだが。

「高梨さん、いつか、またあなたとやってみたいわ」

「そうね、わたしもよ」

「それじゃ、また。加寿美、光、行くよ」

洋子達三人は、まだ何やら言い合いをしながらその場を去って行った。

いつかまた……けれど、それはそう遠くない内に実現しそうな気がした。

利恵も洋子も、互いに手の内の全てを見せた訳ではない。今日の試合だけで満足はしていないのだ。

「おい利恵、再戦の約束なんかしまつていいのか？お前と彼女じゃ、同じ大会に出るチャンスなんて無いだろ」

「大丈夫よ。彼女、空手使いじゃないから」

「へ？じゃあ何だ？」

「多分、わたしと同じよ」

「……成る程」

道理で、利恵の技の殆どを捌ける訳だと涼は思った。

しかし、それにしたって、相当な強さである事に間違い無い。

「笙内洋子さんか……楽しみだわ」

その後、利恵と洋子は親しくなるのだが、それはまた別のストーリーでの事である。

alternative (前書き)

このお話しは 『永遠の追憶』³ (第三部ではありません)
の第一話として書いた物ですが、今回 *retrain* の最終話と
して投稿します。

『永遠の追憶』本編第一部は、

<http://www.digbook.jp/products/info.php/products?id=ff3dbbd5d83f041e11a60f121f483da>

第二部は、

<http://www.digbook.jp/products/info.php/products?id=ff3dbbd5d83f041e11a60f121f483da>

にて販売致しております。

公開時の物に加筆・修正を施し、一枚だけですが挿絵を入れてあります。

alternative

⋮
春。

この季節になると、毎年必ず桜が咲く。

それはもう当たり前だっと思ってて、当たり前前にも感じなくなってるけど、考えてみたら凄い事なんだっと思う。

だって毎年必ずだよ？
絶対に忘れないんだよ？

それに、同じ花卉や枝に見えても、それは確実に去年とは違う物なんだもん。

匂いだってそう。 同じ匂いだって感じてても、それは去年その場で嗅いだのとは違う物なんだよね。

もし、わたしが桜だったら、毎年同じように咲けるかな？

毎年毎年、同じように見えても違う花を咲かせる事が出来るかな？

そう考えると、凄いなって思うんだ……。

あ、言い忘れてました！

わたし、宇佐奈雛菊、十五歳です！

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

永遠の追憶
Termo
春の風に乗って
alternative

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

朝が来た……それはしっかりと理解出来ている。

何故なら、部屋の空気が仄かに暖かいし、先程から目覚ましが鳴っているからだ。

空気が暖かいという事は日が昇ったという事だし、目覚ましが鳴っているという事は、起きる時間になったに違い無いのである。

だが、頭の片隅で理解出来ていても、それを行動に移すまでには若干のラグがある。

「うゝん……煩い」

一度だけ小さく唸って目覚ましを止めると、二、三度呼吸をして再び眠りの世界へ……。

「こらっ！　いつまで寝てるの！」

旅立つ間も無く叩き起こされた。

「まったく……少しは大人になったかと思ったら、ちゝとも変わってないわね、この子は。　ほら雛菊、目覚ましが鳴ったんだからさっさと起きる！」

「んゝ……もうちよつと寝かせてよ、お祖母ちゃ……」

そこまで言って、雛菊は一気に目が覚めた。　何故なら、そのまま寝ていたらとっても危険だからだ。

「はっ！」

雛菊が、サツと飛び退いた直後、今まで寝ていたベッドに拳がめり込んだ。　丁度、雛菊の鳩尾の辺りだ。

あと一瞬、決断が遅かったらまともに喰らっていただろう。

「い、いきなり鉄拳はやめてよ！　危ないでしょ！」

肩の辺りで綺麗に切り揃えたショートカットの髪に、少し小柄だがバネのありそうな肢体。

見た目通りに運動神経も反射神経も良いようだ。

「雛菊ちゃあ〜ん……今、何て言おうとしたのかなあ……？」

「え？ え〜つとお……『ママ』って……」

「そうは聞こえなかったわねえ？ おばあ……とか何とか聞こえたけどお？」

「き、気のせいじゃないかなあ？」

雛菊は引き攣った笑顔を浮かべつつ言ったのだが、さすがに何の効果も無いようだ。

「まあ、確かにわたしは立場上『お祖母ちゃん』と呼ばれても仕方ないんだけどお、まだ若いつもりなんだけども……心も身体も」

女性はそう言つと、腰まである長い髪をかき上げ、モデルのようなポーズをして見せた。

確かに、お祖母ちゃんと呼ぶには少々若い感じだ。

その女性こそ誰あろう、かつて驍名をはせた宇佐奈環その人である。

今でも名場保、美浜恭一の二名を抑え、伝説の女王として人々の記憶にその名は刻まれている。

……と言つても、それは一般市民とは少し違った生活をしている人達だが。

「うんうん、もっちらんだよ！ 環ママは最高に綺麗だし、今でも二十代で通用しちゃうよ、うん！ わたしが男だったら絶対に結婚申し込むな〜！」

「あら、そう？ そこまで言われると、全然嬉しくない上に嘘臭いわね〜。……怒っちゃおうかな？」

「朝から苛めないでよあ〜……ごめんなさい、反省してますっ……」

雛菊はベッドから降りると、ピヨコンと頭を下げた。 どうやら本気で詫びているようだ。

それだけ目の前の相手が怖いという事なのだろう。

「冗談よ。 この程度の事で、可愛い孫に本気で怒る訳無いでしょ？」

ベッドの下にずり落ちた毛布をたたみながら、環はニツコリと微笑んだ。

だが、環の拳がめり込んだ形がすっかり残っているベッドを見ると、その微笑を真実と受け取るにはちよつと抵抗がある。

「恵利は？」

「もうとつくに起きて支度してるわよ。目覚ましが鳴る前に起きてたもん」

「相変わらず早いなあ、あの子は……じゃあ、わたしも手伝って来るね！」

先程まで寝ぼけていたとは思えない素早さで部屋を出て行く雛菊を見て、

「……さすがに十五歳。やっぱり本物の若さには勝てんわ」

一言呟くと窓を開け放ち、環は外の空気を部屋へ招き入れた。

「祝福の風よ吹け！……なんてね」

優しい風に乗って部屋いっぱいに広がるのは、近所の公園に咲く桜の香り。

環は大きく深呼吸して、今年も春が来たのだと実感した。

「恵利、おっはよー！」

階下へ駆け下りるとすぐ、雛菊はダイニングへと飛び込んで、そこに立つ女の子の背中に抱き付いた。

「あ、危ないよ雛菊ちゃん！今、包丁持ってるんだから！」

「大丈夫大丈夫！要は、恵利が手を放さなきゃいいんだからさ」

「放しちゃう可能性があるから危ないって言ってるの！」

恵利は慌てて包丁を置くと、自分を抱えている雛菊の手を掴んだ。雛菊がパジャマ姿なのに対し、恵利の方は既に制服に着替えている。

濃紺のブレザーに真っ白なエプロンという格好は、その細身の身体には少しバランスが悪いような印象だ。

黄色いリボンでポニーテールにまとめた髪は、それでも腰の辺りまである。

手入れを怠っていないのだろう、黒々とした髪はコシがあつてしなやかだ。

「邪魔しないでよ。朝の一分は午後の一時間に相当するんだからね」

「はあ？ 何言ってるのよ、一分は所詮一分でしかないでしょ？」

「気分的な事も含めて、それくらいの価値がある時間だって言うてるの」

「じゃあ、わたしが恵利に抱き付く時間も、午後に換算したらそれくらいの価値があるって事だね」

「ちーがーう！ 無為に過ごす時間と一緒にしないで！ それと、耳に息を吹きかけるのもやめて！」

恵利は雛菊の手を無理矢理引き剥がすと、再びまな板に向き直った。

「あははは。ムキになっちゃって、可愛いんだ」

「あのね……どうでもいいけど、お尻触るのやめて」

「いちいち煩い嫁だな」

「わたしは雛菊ちゃんのお嫁さんになった憶えはありません！」

何とも騒々しいやり取りを二人がしていると、

「何よ、まだ支度出来てないの？」

洗濯物を抱えた環が、呆れ顔でダイニングを覗き込んだ。

「恵利、その程度の事に時間かけてちゃ駄目よ？ もっと手際良くやりなさい」

「だって！ 雛菊ちゃんが邪魔するんだもん！」

「邪魔なんてしてないよお。単なるスキップじゃない」

「それが邪魔なの！」

「はいはい、朝からモメない。恵利、例え邪魔が入るうとも、台所の仕事を見事にこなしてこそ宇佐奈家の娘よ？ もっと精進なさい」

「……」

環に言われ、恵利は少々不機嫌そうな顔になった。

自分としては一生懸命やっていただけに、それを邪魔された拳句、どうして意見されなければならないのだろう？

まだ処世術を身に付けていない十五歳の身には、それは納得のいかない事なのである。

「お返事は？」

「……はい」

しかし、結局のところ環に逆らうような真似は出来ず、素直に返事をするしかないのも事実である。

怖いとかいう事でなく、弟子が師匠に逆らえないのと同じなのだ。師匠以上の腕が無ければ、逆らう事など許される筈も無い。

「こら、雛菊！ あんた、恵利の手伝いするって言ってたんじゃないのかったの？ 偉そうに新聞なんて広げてないで、早く手伝いなさい！」

「はい」

どうやらこの家では環がルールブックのようで、その号令一つで全てが動くらしい。

可愛い二人の孫がキッチンでの作業を再開したのを見届けてから、
「しかしまあ、二人とも見事に母親に似たわね。良かった良かった、父親に似なくて」

幸せそうな微笑を浮かべ、環は再び洗濯物を抱えて洗面所へと歩き出した。

「行つて来まゝっす！」

「行つて来ます！」

朝食を摂り、片付けを終えて身支度を整えた恵利と雛菊は、揃って元気良く宇佐奈家の玄関を出た。

暖かな春の陽射しと柔らかな風。それに、優しく鼻腔をくすぐ

る桜の香りが心地良い。

新生活のスタートとして満点の日である。

「ん……気持ちいいね、雛菊ちゃん」

「そうね。こんな日には、何かすごくいい事がありそうな気がする？」

「うん、そうだね」

こんな日には自然と笑顔になってしまう。

それは大人も子供も一緒のようで、バス停までの道すがら、擦れ違ふ近所の人達もみんな良い顔をしている。

二人が朝の挨拶をすると、誰もが笑顔で答えてくれる。

この辺りの事は、近所付き合いをキチンとしている環や、二人の母のお蔭でもあるだろう。

「あ、そう言えばさ」

「何？ 雛菊ちゃん」

「お父さん、今日帰って来るんだよね？ 入学式、来てくれるのかな？」

「本人はそのつもりみたいだけど、どうかな？ 紀行文を書くのつて、そう予定通りにいくとは限らないんじゃない？ それに……」

「道に迷って余計な時間食うかもしれないし……か。 いい加減、あの方向音痴は治らないもんかなあ？」

年齢よりも若く見えるし、スタイルも良くて、見た目は申し分無し。

時々怖いと思う事もあるが、基本的に性格も優しい父の事は、二人とも大好きである。

ただ、肝心な所で鈍いのと、酷い方向音痴が欠点なのだ。

「ま、お母さん達が来てくれるし、それだけでもいいけどね」

「でも……また色々言われたりしないかな？」

先程までの明るさが急に無くなったかと思うと、恵利は足を止めて小さく溜息を吐いた。

「恵利は気にし過ぎだよ。」

わたし達は何も悪い事なんてしてない

んだから、堂々としてればいいの」

「でも……」

「言いたい奴には言わせておけばいいのよ。お母さん達を見てくらんよ。何も恥じる事無く、堂々としてるじゃん」

「うん。それはそうだけど……」

ちよつと顔を伏せてしまった恵利の肩をグッと引き寄せると、

「恵利の事は、わたしが護ってあげる。誰にも、何も言わせたりしない。だから安心して」

雛菊は自信たつぷりの顔をして言った。

少し自分と似た部分のあるその顔を見ると、恵利も不思議と元気になれるような気がした。

「……ありがとう、雛菊ちゃん。わたしも頑張るよ」

「うん、それでこそ恵利だよ。さ、行こう」

二人同時に笑顔を浮かべた時、バスが停留所へとやって来た。

「春だなあ……なあ、この薄桃色の小さな花弁を見ると、何となく、しみじみしねえか？」

「別に……」

私立黎明高等学校の校門前で、二人の男子生徒が立っている。制服が新しいところを見ると、どうやら新入生のような。

舞い落ちる桜の花弁を感慨深げに見ている方は長身、その隣に立つ方は、どちらかと言えば小柄な部類に入るだろう。

そんな二人が並んでいると、見事なでこぼこコンビである。

「情緒のねえ野郎だね、お前は。親父さんとは大違いだぜ」

「当たり前だろう？ お父さんと僕は違う人間だ」

「屁理屈言つところも全然違うな。……お前さ、何でそんなに親父さんを嫌うんだ？ 真面目でカッコ良くて、いい親父さんじゃねえかよ」

「英（えい）には関係無い。以降その質問はするな」

「へいへい、解りましたよ」

両腕を頭の後ろで組むと、長身の英雄（『ひでお』と読んでしまいがちだが、彼の名はそのまま『えいゆう』と読む）は、門柱に凭れかかるようにして、正門をくぐって行く生徒達を目で追った。

みんな自分達と同じ年……その中には見知った顔もいたりして、英雄は手を振って挨拶を交わしていた。

「優磨（ゆうま）も挨拶くらいしろよ。あいつ、同じ翔峡中学の奴じゃんか」

「僕は彼と面識が無い。知らない人間に挨拶されても困惑するだけだろう」

「やれやれ、無愛想な奴だな……。過去に面識が無かったって、これから同じ学校の生徒になるんだろが」

「僕はお前と違って、他のクラスの人間との交流が無い。剣道部での係わりが無い人間に挨拶する必要も感じん」

「あ、そ。何ともクールだねえ……」

英雄は苦笑すると、再び生徒達の波に目をやった。

「ところで英、いつまでここに立っているつもりだ？」

「ん？ ああ、恵利ちゃん達、待ってようかと思つてさ。新生活

第一歩、やっぱり一緒にスタートしてえじゃん」

「別に待っている必要など無かるう？ 今、お前が言ったように、ここに入學する事は決定しているのだから、顔を会わせる機会などいくらでも……」

「そういう事じゃねえんだって。何つか、こう……一緒にスタートを切るってのは、気分的にいい感じじゃねえか」

「お前、小学校の時も中学校の時も、同じ事を言っていなかったか？」

「あゝ、いちいち煩せえよ！ たまには黙って俺の行動に合わせろ！」

「優磨、英、おはよ」

二人が声のした方を向くと、そこには一人の女の子が立っていた。春の陽射しを弾き返しているように感じる程、キラキラと光る長い黒髪。

手足も長く、モデルと見紛うばかりのスタイルの良さを持ち合わせており、それに引けを取る事の無い整った顔立ち。

そして、その背後には黒塗りの超高級大型リムジンと、お付きである黒服の男性がいる。

そのどれを取ってみても、女の子が只者ではない事が判る。

「おはよ、春日（はるひ）ちゃん」

「二人とも、こんな所で何やってんの？」

「恵利ちゃん達を待ってるんだよ。ほら、初日だしさ、一緒に行こうかと思つて」

「あれ？ あの子達まだ来てないの？」

春日は左右に顔を動かしながら言った。当然、その視界の内に
お目当ての人間の姿は無い。

「だから待っているんだろう。つまらん事を訊くな」

「何よ優磨、朝っぱらから随分突っ掛かってくれるじゃない？」

腰に手を当てて、けれど余裕のある表情を浮かべて春日は言った。それに対し、優磨は変わらず不機嫌そうな表情のまま、春日とは目を合わせようもしない。

「おーおー、不貞腐れた顔しちゃってまあ……。乱丸、こいつムカつくからやつつけていいわよ」

春日から声がかかると、乱丸と呼ばれたお付きの黒服は一瞬だけ表情を変えた。

本気で優磨にかかつて行く事はしないだろうが、習性で春日の命令に反応しているらしい。

「まあまあ春日ちゃん、大目に見てやってよ。きっとホルモンバランスが崩れてんだよ、こいつ」

「残念ながら、僕は健康体だ」

「ま、いいけどね。……あ、来た来た。こら、恵利！ 雛菊！

遅いぞ！」

両手をメガホンのようにして、春日は二人に声をかけた。　　まるで自分が一番長く待っていたようだ。

「自分だって今来たばかりのくせに……」

「英……何か言った？」

「いえ、何も……。　　よう、おはよう！　二人とも随分ゆつくりだったね」

「おつはよく！　いや、朝の情事が長引いちゃって。　　恵利ったら甘えん坊だからさ」

「やめてよ雛菊ちゃん！　知らない人が聞いたら誤解するでしょう！」

「何よ恵利ったら、アタシには全然サービスしてくれないくせに、雛菊にはそんな事してるの？　……ちょっと悔しいかも」

「春日ちゃんまで一緒になつてえ！」

どうやら恵利をからかうのが楽しらしく、恵利がムキになればなる程、雛菊も春日も調子に乗るようだ。

だが、女の子三人が加わって、より一層騒がしくなった場の空気に耐えかねたように、

「二人が来たんだから、もういいだろう？　……僕は先に行く」

眉を顰めてそう言い残すと、優磨は一人で門をくぐり、さっさと歩いて行ってしまった。

「あ、優磨君……行っちゃった。　わたし、まだ朝の挨拶もしてないのに……」

優磨の背中を見ながら、恵利はションボリしている。

「な、によ、あいつ。　ねえ英、アタシが来るまでに何かあったの？　優磨の奴、いつも以上に不機嫌だったみたいだけど」

「ん、……ちつと会話のチョイスをミスった。　親父さんの話、出しちゃってさ」

「はあ？　あいつ、まだ言ってるの？　仕方ないって言葉が脳にインプットされてないのかしらね？　従妹として恥ずかしいわ」

春日は少し怒ったような顔付きになると、腕組みをして優磨が歩いて行った方向を見た。

既に優磨の姿は無いが、それでもそこに優磨がいるような感じで、キツイ目をしている。

「春日、優磨君の前でそれ言っちゃ駄目だよ?」

「何でよ、雛菊」

「あんたの立場で言うべき言葉じゃないでしょ? 登内家を継ぐのは優磨君じゃなくて、あんたなんだからさ」

「別にアタシは登内を継ぐつもりなんて無いわよ? アタシには他に夢があるんだもん。優磨が欲しいって言うなら、今すぐにでもくれてやるわ」

「あんたのお祖父ちゃんは、そう思っていないでしょうに。それに、あんたの一存でどうにかなるような物でもないでしょ?」

「お祖父ちゃんも頑固だからねえ……。あ、乱丸、もう行つていいわ。帰りはみんな一緒に帰るから、駐車場で待機してなさい」
「かしこまりました、春日様」

細い身体を折りたたむようにして一礼すると、乱丸と呼ばれた黒服の男性は駐車場へ向けて車を走らせた。

まだ二十代だろうと思われるが、その行動には一分の隙も無いような感じで、熟練した何かを感じさせた。

「自然にそういう態度がとれちゃうんだから、あんたはやっぱり登内のお嬢様なのよ。解った?」

「しょうがないでしょ? 小さい頃からそういう風にして来たんだから……。ほら、行くわよ雛菊」

「優磨君、大丈夫かな……」

「恵利も! 優磨の事なんて、いつまでも気にしないでいいから。あいつの事は英に任せればいいの。ね、英?」

「ま、昔からの付き合いだし、帰る頃までには何とかしましょ。恵利ちゃん、心配要らないよ」

「うん……」

軽く笑う英雄を先頭に、三人もその後が続いて歩き出した。

女三人寄れば姦しいと言うのは本当のようで、一瞬沈んだ空気も何のその、弾けるような話し声は周囲を圧倒するかのようだった。

だが……。

「お？ …… よう、見てみるよ。 翔峡の有名人ご一行様だぜ、あれ」

「あの先頭歩いてるデカイ奴、あれって一之瀬の会長の孫だっけ？ 確か、掃部関とか言ったよな」

「その後ろにいるの、登内の会長の孫だろ？ スゲー可愛いじゃん、お近付きになりてえ〜！」

「やめとけやめとけ。 一緒にいる宇佐奈って女、少林寺拳法の有段だつてよ。 ナンパ野郎には、口より先に手が出るって話だぜ」

「あ、そうそう。 その宇佐奈について、ちよつと面白い話があるの知ってるか？ 実はよ……」

様々な話し声に混じって、何やら自分達を噂する声が聞こえる。

さすがに人数が多くて誰が話しているのかは判別出来ないが、それが良い噂でない事は雰囲気ですぐに判った。

何故なら、雛菊も恵利も、昔から同じような事を何度も経験しているからだ。

「……ブッ飛ばして来ようか？」

「いいよ英君、いちいち気にしてたら身がもたないって。 ね、恵利」

「う、うん……」

「アタシもムカついてるんだけど……」

「放つときなさいよ、春日。 下らない連中なんか、相手するだけ損だよ」

「やっぱり、わたしだけでも別の学校に進学した方が良かったんじゃない……」

クラス分けの貼り出された掲示板の前で、恵利はうつむき加減で言った。

それを聞いた春日は、

「また言ってる……恵利、いい加減にしなよ？ あんた一人いないからって、何がどう変わるってのよ。噂する奴は、その本人がいようがいまいが、どこでだってするんだから。だいいち、あんた一人の所で何か言われたらどうすんのよ」

と、呆れたような顔をして言った。

「だって、春日ちゃん達にまで嫌な思いさせちゃうかと思うと、わたし……」

「あのね、そんなの気にするくらいなら、ハナから黎明なんて受験してないわよ。アタシ、咲姫の推薦もあつたんだよ？」

「でも……」

「アタシは、あんた達といった方が楽しいからこっちに来たの。それに、ママ達の母校だしね」

春日はそう言つと、眩しそうに校舎を見遣つた。

本年度に合わせて校舎を改装したそうで、その真つ白な壁には少しの汚れも無い。

それに伴つて、制服も以前の詰襟とセーラーからブレザーに変更された。

「アタシさ、ママ達の話聞く度に、黎明に入ろつて気持ちが大きくなつたんだ。ここで一生分の経験したみたいだって、よく言ってるもんね」

「わたしと恵利も一緒だよ。他の学校なんて眼中に無かつたもん」

「それはそうなんだけど……」

「ま、人の噂も七十五日ってね。いつまでも同じネタ使ってるってのは、かなり寂しい奴なんじゃないの？ ひょっとして、構つて君か？」

英雄は、わざと大きな声で言った。

そのせいなのかどうかは不明だが、噂をしていた声も聞こえなくなつたようだった。

「ふむ……どうやら話題が無いどころか、根性も無いみたいだな」
「ほらね？　この程度のもんならだつて。　さ、クラスの確認しようよ」

そう言うのと、雛菊は英雄の肩に手をかけ、ヒョイとその背中に伸び上がった。

雛菊の身長はそれ程高くないので、こうしないと掲示板がよく見えなないのだ。

五十音順に並べられた名前を順に追って行くと、自分の名前はすぐに見つけられた。

「宇佐奈雛菊、A組であります。　恵利はB組か……。　ま、隣りなら、ちよくちよく会えるね」

英雄の背中から飛び降りると、雛菊は恵利の肩を抱きながら言った。

飛び降りた時にスカートの裾が跳ねて、一部の男子生徒の視線を集めたのだが、当人はそういう事に無頓着らしく、気にする様子も無かった。

「恵利、お昼は一緒に食べようね。　お弁当はよろしく頼んだぞ」

「ああ。　じゃあ、家にいる時と同じだね」

「えーっと、掃部関、掃部関……　っと、俺はC組だ」

「アタシはD組か……。　ゲ！　浦崎って……。　参ったなあ、優磨と一緒に……。　」

「何で？　いいじゃん。　優磨君、成績優秀だし、いざって時に頼りになるでしょ？」

頭をポリポリと掻きつつ、困ったような顔をしている春日に、雛菊はキョトンとした顔で言った。

「雛菊さあ……。　さっきの事、もう忘れちゃったの？」

「さっきの事？　何だっけ？」

雛菊は本当に解らないのか、口元に指を当てて首を傾げている。

「はあ……。　もういい。　さ、教室行こう。　一旦、教室に集合してから、クラス単位で体育館に移動するんだから」

「あれ？ そうだっけ？」

「あんたね……ちゃんと入学案内に書いてあったでしょ？ 書類にはキチンと目を通さないと、詐欺に遭うわよ？」

「そういう類の事は、全部うちの嫁に任せてるもんで。ね、恵利？」

「知りません。ところで雛菊ちゃん、優美ちゃんは何組だった……？」

「A組、わたしと同じよ。……昨夜、急にだつてね」

「このところ調子いいって聞いてたから、今日は一緒に来られると思つてただけだな……」

恵利が言つと、他の者も少し沈んだような表情になった。

優磨の双子の妹である優美は生まれ付き身体が弱く、小、中学校とも休みがちであつた。

どうも心臓に欠陥があるらしいのだが、詳しい事は何も聞かされていなかった。

それでも優美は、みんなと同じ高校へ進学したいと必死に努力していたのだ。

その甲斐あつて、見事入試をパスしたのだが……。

「まあ、念の為、大事を取つてつて事らしいから、そんなに心配する事は無いわよ。大丈夫大丈夫、登内総合病院を信じなさい」

「軽いなあ、春日は。でもまあ、春日の言う事も尤もだね。わたし達がへこんでたんじゃ、優美を元氣付けるどころじゃないもん」

「そういう事。今日は終つたら病院に直行して、この雰囲気は優美に届けてあげなきゃ」

「あ、成る程……優磨の奴、それでか」

女性陣が明るく頷き合っていると、英雄は何かを納得したように、一人でうんうんと頷いた。

「何よ英、男のくせに独り言なんて……気持ち悪いからやめなさい」
「気持ち悪いって何だよ、失礼な。いやさ、優磨の奴、機嫌悪かつたろ？ てつきり俺のせいかと思つてただけど、あいつ優美ち

やんの事考えてたんじゃねえかな？　それで……」

「じゃあ、やっぱり英のせいじゃない」

「何でだよ？」

「伯母さん、登内の力は一切使えないんだよ？　そのせいだって、優磨は思ってるんじゃないの？　それで伯父さんの話が出ればさ……」

「……」
「そつか……。　普段は思慮深くて、いい奴なんだけどなあ……」

いつも物静かで、他人を思い遣る事も出来る優磨だが、父親の事となると人が変わったようになってしまう。

本人からは何も聞いていないが、その理由は、みんな何となく察している。

「あ、ほら！　いつまでも話し込んでたら遅れちゃうよ！　早く教室に行こう」

ちよつと新生活のスタートに不向きな物になってしまった話の流れを断ち切るように、雛菊は笑顔で言った。

それが良いきっかけになったようで、それ以降、話題はこれからの学校生活についてがメインになった。

窓の外には真つ青な空が広がり、ぷかぷかと浮かぶ白い雲に届きそうなくらい、高く鳥が舞っているのが見えた。

ついこの間までは冷たく感じられた空気も、今日は優しく抱きしめてくれているような暖かさだ。

「いい天気……」

ベッドで上半身を起こし、肩にかけたカーディガンのズレを直しながら優美は言った。

真ん中から左右に振り分けた長い髪は緩く編まれており、先の方を赤いリボンで留めてある。

少し線が細く、身体付きも小さいのは、幾度もの入院生活のせいだろう。

だが、鼻筋が通って整った顔立ちは清楚で可憐な印象で、ちよつとタレ目がちな目は愛嬌があり、その表情を柔らかない物にしている。「今日は最高の一日だね、お母さん」

「そうですね。きっと、良い思い出の日になるでしょう」

清潔感よりも、むしろ無機質な印象を強く受ける部屋の中には、優美と母親の二人しかない。

先程までは看護師がいたが、点滴が終ると片付けをして出て行った。

もうどれくらい、この状態が続いているだろう……点滴の痕を見ながら優美は思った。

一年？ 二年？ ……いや、物心付いた時には、既にこの状態だったような気がする。

「せっかく制服、間に合ったのにな……」

真つ白な壁には、真新しいブレザーが掛けられている。

着られないまでも、せめて身近に置いておきたいと、我俣を言つて持つて来てもらったのだ。

「すぐに着られるようになりますよ、優美。果報は寝て待てと言いますからね、焦りは禁物です」

春の陽だまりのような暖かい微笑を浮かべ、母は言った。
昔から、この柔らかない笑顔を見ると、不思議と落ち着ける。

「お母さん、中学校の時も同じ事言つたよ？」

「そうでしたか？ でも、その通りだったでしょう？ ちゃんと次の日から着られましたし」

ニコニコと笑う母の顔を見て、優美も笑った。本当に、何度この笑顔に救われただろうか……。

家の空気がいつでも明るく穏やかなのは、きっと母の笑顔のお蔭だろうと優美は思った。

「でも、出だしから躓いちゃったなあ……。何だか、わたし一人だけ置いて行かれちゃうような気がする……」

「あらあら、それは貴女の考え過ぎですよ？ 皆さんは貴女を置い

で行ったりはしません。修学旅行の時だって、電車を一本遅らせ
て待っていてくれたではありませんか」

「お母さん、わたしの言ってるのは、そういう意味じゃなくてね…

…」

「あら、何か間違っていましたか？ あ、一本ではなくて、二本で
したか？」

「あはは……」

母との会話が噛み合わないのは珍しい事ではない。

と言っても腹が立つような物ではなくて、どちらかと言えば微笑
ましく、思わずこちらの方が親になってしまったような、そんな錯
覚まで覚える。

無邪気という言葉がピッタリ来る、そんな母なのだ。

と、ドアをノックする音に気付いて、優美が声を出した。

「誰だろう？ まだ面会時間じゃないのに……はい、どうぞ」

首を傾げつつ返事をした優美の目に飛び込んで来たのは、

「やほ、優美！ 小母さん、こんにちほ！」

「雛菊ちゃん、あんまり大きな声出したら駄目だよ」

「どうして恵利は、いつもつまない事気にするかな？ 個室なん
だから大丈夫だって。優美、いい子にしてた？」

「春日ちゃんまで……」

全身から元気が溢れているような雛菊を先頭に、どやどやと病室
内に入って来たみんなだった。

「ど、どうしたの？ みんな揃って……」

「優美の顔を見に来たに決まってるじゃん。 な、雛菊」

「な、春日」

注意する恵利の言葉には耳を貸さず、春日は雛菊と肩を組みなが
ら言った。

どうもこの二人は性格が似ているらしい。

「優美ちゃん、具合どう？」

「うん、そんなに大した事無いから、もう起きてても大丈夫だよ。

「ごめんね恵利ちゃん、心配かけちゃって」

「よしよし。 お？ おあつらえ向きに制服持って来てるじゃない。
じゃあ、さつさと着替えて」

「え？ 春日ちゃん、着替えて……？」

「制服に着替えるの。 ほら、さつさとする。 廊下で英達が待つ
てるんだから」

「達って……ひょっとして、お兄ちゃんも来てるの？ どうして？」

「あゝもう、ごちゃごちゃ煩い！ 雛菊、こいつ剥いちやえ！」

「OK！」

「え？ ちょ、ちよつとお！ きゃあ！」

何が何だか解らない内に、雛菊と春日の手によって、優美は病院
指定の寝巻きから、黎明高校の制服姿へと変身させられてしまった。

「あらあら……皆さん、お元気ですねえ」

しかし、それを見ても慌てるどころか、優美の母は相変わらずの
ニコニコ顔である。

「おお、可愛いじゃん。 アタシ達の中で一番似合ってるかもね。

英、もう入ってもいいわよ」

「ったく、お前ら騒ぎ過ぎだぜ……廊下まで聞こえたぞ？ あんま
し他の患者さんの迷惑になるような真似はすんなよ」

「え、英君……！」

病室に入って来た英雄を見た途端、優美は脱がされた寝巻きを抱
え、慌てて布団の中へ押し込んだ。

お年頃の女の子としては、脱ぎ散らかした物を見られるのは恥ず
かしいらしい。

「なゝに真面目ぶってんのよ、英」

春日がケラケラ笑いながら言った。

「俺は真面目なの！ つーか、それ以前に、病院で静かにするって
のは基本だろうが」

「相変わらずね。 少しは碎けなさいよ、木っ端微塵に」

「何で碎け散らなきゃならんだ！」

静かになるどころか、英雄と春日が揃った事で、部屋の中は益々煩くなってしまった。

雛菊とは違った意味で、英雄は春日の良い相方のようなのだ。

「と、ところで、みんな入学式は？　まだ終る時間じゃないでしょ？」

「ああ、その事？　退屈だったから途中でフけて来ちゃった。校長の話が長過ぎんのよね」

「お兄ちゃんまで？」

あっけらかんと笑う雛菊に呆れつつ、優美は言った。

「みんなに無理矢理引っ張られて来たんだ……。まったく、節目の行事だというのに、最初からこれでは先が思い遣られる」

「結局付いて来てるくせに偉そうな事言っつーの。　んじゃ…その壁際にしようか、みんな並んでくれ」

一眼レフの高そうなカメラを三脚に備え付けながら、英雄は言った。

「並ぶって……？」

「記念撮影。　ほら、優美は真ん中ね。　雛菊と恵利はその両隣で、アタシは優美の後ろ。　優磨と英はアタシを挟んで両隣ね」

「どうして春日が決めるんだよ……」

「何よ優磨、不満なの？　じゃあ、あんたが配置決めていいわよ。御自由にどうぞ？」

と言われても、どう考えても春日の言ったポジションがベストなので、優磨はそれ以上何も言わず、黙って春日の右隣に立った。

「さすがに立ち位置決めるのは春日ちゃんが一番上手いわな」

ファインダーを覗き込みながら英雄が言った。

その言葉通り、フレームに収まるバランスは完璧だ。

「ふふん。　だてに俳優の娘やってないって」

「よっっし！　みんな、行くよ！」

英雄はセルフタイマーをセットすると、すぐに春日の左隣へとダッシュした。

優美の母に撮ってもらっても良さそうなものだが、そうすると人物は写らずに、地面や空だけが写ってしまうのだ。

それ以外にも、一緒にカラオケへ行けばリモコンもロクに使えないという有様で、徹底的に機械類に弱い事が証明されている。

そんな人が一眼レフのカメラなど扱える筈も無い。

「三……二……はい、一足す一は？」

「につ！」

カシャッ！ と音がして、永遠の一瞬が記録された。

旅立ちの春……全員揃つてのスタートが切れたのだ。

「ほら、わたしの言った通りでしょう？ 皆さんは待っていて下さいましたし、制服もちちゃんと着られました。それに、良い思い出の日にもなりますね」

優美の母は優しい微笑を浮かべ、はしゃぐ子供達の様子をじっと見守っていた。

「まったく……あのカメラには大事なフィルムが入ったままだったのに。雛菊の奴、勝手に持って行きやがって……」

「お前が遅れたのが悪いんだろう。雛菊さんのご機嫌を取る為には仕方あるまい。一体、どこで何をしていたんだ？」

「大方、道に迷ってたんだろ？ 未だに方向音痴が治つたらんのか、このボケ男は」

黎明高校近くにある喫茶店『ソレイユ』店内で、三人の男性が話し込んでいる。

その内の大柄な男性と小柄な男性はスーツ姿だが、ボサボサの髪を掻き毟るようにしている男性は、革ジャンにジーンズのラフな格好だ。

「大体、娘達の晴れ舞台の日だったのに、その格好は何だよ」

「しょうがねえだろ？ 取材が終って、そのままこっちに直行して来たんだから。お蔭で、まだ出版社に顔も出してねえんだぜ？」

「だから、道に迷わなきゃ充分間に合っただろって話だよ。いい加減、移動にバイク使うのやめろっての」

「単車の方が何かと便利なんだよ。自分の勝手にルートも変えられるしな」

「それで迷ってりゃ世話ねえぞ……」

大柄な男性は呆れたように言うと、コーヒーをブラックのまま一口飲んだ。

「お前もそろそろパソコンの一つも使えるようになれよ。それなら出先からデータ送れるし、いちいち出版社に顔出す手間も省けるだろ」

「俺の性に合わねえ」

それを聞いて、二人の男性は顔を見合わせて笑った。

未だに携帯電話も持たずにいるなど、目の前の男性が昔とちつとも変わっていない事に安心感を覚えながら。

「いや、参った参った……」

男性達の席の傍に、髪の長い女性がやって来た。

何故か少々疲れているようで、大柄な男性を脇に押し退けると、その隣りにどつかと腰を下ろして溜息などを吐いている。

「どうしたの？ 随分時間食ったじゃん」

「何だか理事長やらPTAの会長やらが、アタシとお近付きになりたいらしくてさ、もう煩い煩い。おべんちゃらなんて聞きたくないっつーの……」

「それは大変だったね、お疲れ様」

小柄な男性は、少し笑みを浮かべながら言った。

勿論、本心から大変だったろうと思っではいるのだが、どうしても笑いがこぼれてしまうのだ。

「何を他人事みたいに言ってるのよ。本来なら、この役目は姉さんと二人でやってもらっただけだからね」

「それは遠慮したいな。俺にはそういう仕事は向いていないよ」

「まったく……もう一人はさっさと逃げちゃうしさあ……」

女性は、大柄な男性を恨めしそうに睨みながら言った。

「なはははは。　けど、俺は単なる支社長だもん。　本物のお偉いさんは、あちら」

「何言ってるのよ。　事実上、仕切ってるのは自分じゃない。　この間、電話で言ってたよ？　『もう私が口を挟む余地はありませんわ』　って」

「それは逆に怖いなあ……　お手並み拝見って事なんだろうからね」
苦笑しつつ、それでも自信があるのだろう。　大柄な男性は、大して慌てる様子を見せなかった。

「で？　優美、どうなの？」

コーヒーを注文すると、女性はテーブルに乗り出すようにして、小柄な男性に言った。

「さっき電話があった。　みんなと一緒に病室で騒いでいるようだよ」

「そつか、良かった。　姉さんの説明だと、いまいち要領を得ないのよね……」

「お前、病院へは行かなくていいのかよ？」

ホっとした表情を浮かべた女性の横で、妙に真剣な顔で大柄な男性が言った。

「俺が行くと優磨が顔を出さんからな。　それでは優美が寂しがる。俺は優磨とは時間帯をずらして顔を出すよ」

「いっぺん徹底的に話し合った方がいいのと違うか？　変になあなあにしちまうと、ずっと引き摺うちまうぜ？」

「話すべき事は全て話した。　あとは優磨の気持ち次第だ」

「これだよ……。　ま、何かあったらいつでも言ってくれ。　出来るだけの事はさせてもらうからよ」

「こいつで足りなきゃ俺に言ってくれよ。　こいつよりは時間が自由になるからな」

「済まん、二人とも。　……頼りにさせてもらっ」

小柄な男性は、そう言うത്と一口お茶を啜った。

お茶と言っても極上品であり、一般家庭で気軽に飲むような品ではない。

元々はメニューに無かった物なのだが、とある筋よりメニューに加えるようにとのお達しがあったらしい。

「ねえ、あの二人はどうしたのよ？　こっちに来てたんじゃないの？」

キヨロキヨロしながら女性が言った。

店内に誰かの姿を探しているようだが、お目当ての人物はいないようだ。

「さっきお袋から電話があつてさ、何か頼まれてたみたいだ」

「環さん、相変わらずなんだろっね。　今、可愛がられてるのは…

…雛菊かな？」

「ああ、そうだな。　恵利は昔から手がかからないから、随分助かったよ」

「二人とも見事なまでに母親似だもんねえ……。　雛菊、かなり苦勞したでしょ？」

「今もだよ……お袋の影響も受けてるからなあ、あいつは」

「それじゃ尚更大変だ」

女性の一言で、その場にいる全員が笑った。

何故か一瞬、その場には学生服に身を包んだ若者達がいるように見えた。

「ただいま！」

「あれ？　お父さん達、まだ帰ってないみたいだね」

宇佐奈家に戻った雛菊と恵利は、自分達以外に誰もいない家の中をキヨロキヨロと見回した。

「英君のお父さん達も来てたし、きっと同窓会みたいな事してるんだよ」

「環ママもいない……　ったく、無用心だなあ、鍵もかけないで。」

あ、もしかして恵利の家にいるのかな？」

「そうかもしれないね。隣に行くくらいなら、わざわざ鍵をかけたりしないかも」

「それにしたって無用心には変わり無いけどね」

言いながら、雛菊はキッチンへ入ると、即座に冷蔵庫を開けて牛乳をパックのまま飲み始めた。

それを見た恵利の顔色が即座に変わる。

「ああー！ またそんな飲み方してえっ！ ちゃんとコップ使って、いつも言ってるのに！ それじゃすぐに雑菌が繁殖して駄目になっちゃうでしょ！」

「煩いなあ……これは、わたしが買って来た、わたし専用の牛乳なんだからいいでしょ？ もう飲み終わっちゃったし、ほら」

「それに！ まだうがいもしてないし、手も洗ってないっ！ 外から帰ったら必ずしなきゃいけないのに！」

「子供か、恵利は……」

「言われなきゃやらない雛菊ちゃんの方が子供ですうっ！」

「はいはい、さようでございますかっ」と

紙パックをバラしつつ、ついでに手を洗ってうがいも済ませる雛菊を見て、恵利の表情は一層硬くなった。

「洗面所でやりなさい！」

「どこでやっても同じでしょ？ もう……ホントに煩いんだから……」

「そういうズボラな所、お父さんそっくり……お母さんの苦労がよく解るわ」

疲れたように首を振りながら言う恵利の言い方にカチンと来たのか、雛菊も若干ムっとした顔になった。

「わたしは方向音痴じゃないし、髪だって毎日ちゃんとお手入れしてるぞ……」

「それでも生活態度の端々に、お父さんの片鱗が見え隠れしてるもん……」

「あんな朴念仁と一緒にしないでくれる？」

「朴念仁とは何よ、お父さんに向かって……大体、雛菊ちゃんは何え」

絡み合う二人の視線が火花を散らすと、

「こら、お前達は何をモメてるんだ」

ちよつと笑いの混じった声が背後から聞こえた。

その声に振り返ると、そこには二人の女性が大荷物を抱えて立っていた。

ポニーテールの女性は小さな身体に見合わず、なかなか力があるようで、ショートカットの女性よりも大きな荷物を持っているのに涼しい顔をしている。

一方、ショートカットの女性はと言うと、こちらはテーブルに荷物を置きつつ、雛菊を軽く睨んでいる。

「雛菊、また何か悪さでもしたのか？」

「ち、違いわよ！ 人聞きの悪い事言わないでよ、お母さん。わたし、今まで悪さなんてした事無いじゃない」

「そうだったわけ？ 色々でかしたような気がするんだけどなあ……？」

「う……」

ショートカットの女性に言われ、雛菊は言葉に詰まってしまった。きつと、過去に何かやらかした事があるのだろう。

そのやり取りを見て、ポニーテールの女性はクスクスと笑いながら、

「恵利、まだ荷物があるから運んでくれる？ すぐに下ごしらえをしなきゃならないから、後でそっちもお願いね」と、優しい顔で言った。

「それよりお母さん、聞いてよ！ 雛菊ちゃんったらね、お父さんの事を……」

「あー！ 告げ口なんて卑怯だぞ、恵利！」

「告げ口じゃないもん。報告だもん」

「あゝ、煩い！」

シヨートカットの女性は、バン！とテーブルを叩くと、二人を一喝した。

「恵利！ あんたは、今、お母さんに頼まれた事をすぐにやりなさい！ 話しはその後！」

「は、はい！」

「雛菊！ あんたも手伝う！ 外に美浜さんの車が停まつてるから、恵利と一緒にトランクから荷物を出して来て。 たくさんあるんだから」

「ええ……重労働はやだなあ……」

「じゃあ、恵利のお母さんのお手伝いする？ そっちの方が重労働だと思うけど？」

「え、恵利の……？」

恵利の母親は、普段はとても優しくて大人しい。

だが、一度キツチンに入って作業を始めたら、その性格は地獄の鬼も裸足で逃げ出すような物に変わる。

聞いた話によると、それは恵利達と同じ年頃の頃から少しも変わっておらず、優磨、春日、雛菊それぞれの母親も学生時代にそれを体験したそうだが、最後まで耐え抜いた者は一人もいないとか……

「が、頑張つて運んで来まゝす！ 恵利、行くよ！」

「う、うん！」

ドタドタと廊下を駆け出す二人を見送ると、シヨートカットの女性はいささく溜息を吐いた。

「まったくもう……あの二人は仲がいいんだか悪いんだか……」

「二人は仲良しだよ。 昔のわたし達みたいだね」

「あら、仲が良かったのは昔だけ？」

シヨートカットの女性が言うと、

「訂正します。 ……今も、だね」

と、ポニーテールの女性は楽しそうに笑った。

「うむ、よろしい。 さ、わたし達も準備しちやおう。 今夜は宴

会だからね、また騒がしくなるよ、きつと」

「究極宴会芸……今夜も出るかな？」

「覚悟だけはしとこうか？ ホント、そんな物にばかり磨きをかけてるんだもんねえ……」

「優美ちゃんの前でだけは、やらせないようにしないとね」

「その時は、わたしとお母様で食い止めて見せるわ！」

「あはは。頼りにしてるよ、利恵ちゃん」

「任されて、ヒナちゃん」

時間は、ただ進むだけで、決して過去に戻りはしない。

けれど、時に時間は、信じられない程の鮮やかさで昔を映し出してもする。

そして、思いは時間に左右される事無く、いつまでも色褪せない輝きを見せ続ける。

春の風に乗って……。

く永遠の追憶く alternative

『春の風に乗って』

Fin

alternative (後書き)

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091a/>

～ 永遠の追憶～ refrain

2010年10月8日15時59分発行